

来住・久米地区の遺跡 III

北久米町屋敷遺跡

南久米町遺跡

南久米町遺跡 2・3次調査地

来住町遺跡 4次調査地

2000

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財團

埋蔵文化財センター

「来住・久米地区の遺跡Ⅲ」正誤表

頁	行数	誤	正
V	上より11行目	(縮尺1/3・1/2)	(縮尺1/3・1/4)
78	右下の縮尺	0 10cm [———]	0 20cm [———]
78	右下の縮分	(S=1:2)	(S=1:4)
145	報告書抄録 16行目	南久米町遺跡2次調査	南久米町遺跡3次調査

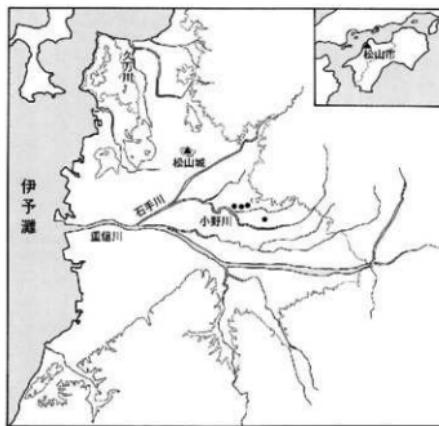
来住・久米地区の遺跡 Ⅲ

北久米町屋敷遺跡

南久米町遺跡

南久米町遺跡 2・3次調査地

来住町遺跡 4次調査地



2000

松山市教育委員会

財團法人松山市生涯學習振興財團

埋蔵文化財センター



南久米町遺跡出土の「時」墨書き土器



南久米町遺跡



南久米町遺跡 2次調査地



来往町遺跡 4 次調査地出土の須恵器

序

本書は、平成3年度から同4年度にかけて、松山平野東部に所在する来住・久米地区を緊急調査した5遺跡の発掘調査報告書です。

昭和50年代から本格的に始められた来住台地及びその周辺の発掘調査によって、国指定史跡「来住廃寺」が誕生し、久米豪族の拠点であり古代役所の中核施設と推定される久米高畠遺跡群等の重要な発見がありました。これらの内容は、全国的に知られるところとなり、寺院・官衙の数多くの研究者が全国各地から来松されました。

今回報告します南久米町遺跡からは、墨書きで「時」と記した土師皿が発見されており、古代役所の一角が来住台地から少し離れた北方で確認されました。また北久米町屋敷遺跡では古代から中・近世、南久米町遺跡2・3次調査では古墳から古代の集落関連遺構、さらには来住町遺跡4次調査から古墳時代の多数の須恵器が見つかっています。

これらの調査結果は、来住・久米地区北部の遺跡における古代から中・近世の未解明部分が山積みとなっている中にあって、貴重な資料となるものです。

本書に掲載した内容や成果を得ることができましたのも、埋蔵文化財行政に対する深いご理解とご協力をたまわった関係各位のお陰と感謝申し上げます。今後ともなお一層のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

また、本書が埋蔵文化財調査研究の一助となり、ひいては文化財保護、教育文化の向上に寄与できることを願っております。

平成12年3月31日

財團法人 松山市生涯学習振興財團

理事長 中村時広

例　　言

1. この報告書は、松山市教育委員会及び財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成4年に松山市北久米町・南久米町・来住町で実施した5遺跡について発掘調査したものをまとめたものです。
2. 遺構は呼称を略号で記述した。堅穴住居址：S B、掘立柱建物址：掘立、溝：S D、土坑：S K
自然流路：S R、横列：S A、柱穴：S P、井戸：S E、性格不明遺構：S Xとし、遺跡ごとに通し番号を付記した。
3. 遺構の測量は、調査担当田城武志・高尾和長指示のもと補助員が実施した。
4. 遺物の実測及び掲載図の製作は、調査担当者指示のもと山邊進也、岩本　憲、志賀夏行、原田英則、仙波ミリ子、仙波千秋、金子育代、高尾久子が行った。
5. 遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。
6. 写真図版は、遺構図の撮影は担当者と大西朋子が、遺物の撮影は大西朋子が担当し、図版作成は担当者と協議のうえ大西朋子が行った。
7. 本書に使用した方位は、磁北である。
8. 報告書中の土層分類は、「新版 標準土色帖」（財団法人日本色彩研究所監修）を使用した。
9. 本書に掲載した遺物及び写真・図版等の記録類は、すべて松山市立埋蔵文化財センターにて収蔵保管している。
10. 本書の執筆は、田城武志、高尾和長が行い、田城が編集した。

本文目次

第1章はじめに	1
1. 調査に至る経緯 2. 組織 3. 歴史的環境	
第2章北久米町屋敷遺跡	7
1. 調査の経過 2. 層位 3. 調査の概要 4. 小結	
第3章南久米町遺跡	31
1. 調査の経過 2. 層位 3. 調査の概要 4. 小結	
第4章南久米町遺跡2・3次調査地	55
1. 調査の経過 2. 層位 3. 調査の概要 4. 小結	
第5章来住町遺跡4次調査地	87
1. 調査の経過 2. 層位 3. 調査の概要 4. 小結	
第6章調査の成果と課題	112

挿図目次

第1章 はじめに

第1図 来住台地主要遺跡分布図 (縮尺1/15,000)	3
------------------------------------	---

第2章 北久米町屋敷遺跡

第2図 調査地位置図 (縮尺1/4,000)	9
第3図 調査地区割図 (縮尺1/150)	12
第4図 東壁土層断面図 (縮尺1/40)	13
第5図 南壁土層断面図 (縮尺1/40)	13
第6図 西壁土層断面図 (縮尺1/40)	15
第7図 遺構配置図 (縮尺1/100)	17
第8図 挖立1平断面図 (縮尺1/60)	20
第9図 S K 4 平断面図 (縮尺1/60)	22
第10図 S K 2・4出土遺物実測図 (縮尺1/3)	22
第11図 柱穴内出土遺物実測図 (縮尺1/3・1/4)	23
第12図 表探出土遺物実測図 (縮尺1/3)	24

第3章 南久米町遺跡

第13図 調査地位置図 (縮尺1/4,000)	33
第14図 東壁土層断面図 (縮尺1/40)	35
第15図 南壁土層断面図 (縮尺1/40)	35
第16図 西壁土層断面図 (縮尺1/40)	37
第17図 北壁土層断面図 (縮尺1/40)	37
第18図 調査地区割図 (縮尺1/150)	39
第19図 遺構配置図 (縮尺1/150)	41
第20図 挖立1平断面図 (縮尺1/60)	43
第21図 挖立2平断面図 (縮尺1/60)	44
第22図 挖立3平断面図 (縮尺1/60)	45
第23図 挖立4平断面図 (縮尺1/60)	46
第24図 挖立5平断面図 (縮尺1/60)	47
第25図 挖立6平断面図 (縮尺1/60)	48
第26図 挖立・SD 1・表探出土遺物実測図 (縮尺1/3)	50
第27図 表探出土遺物実測図 (縮尺1/3)	51

第4章 南久米町遺跡2・3次調査地

第28図 調査地位置図 (縮尺1/4,000)	57
第29図 周辺調査地位置図 (縮尺1/1,000)	59

第30図	調査地区割図（縮尺1/200）	61
第31図	東壁土層断面図（縮尺1/40）	63
第32図	西壁土層断面図（縮尺1/40）	65
第33図	南・北壁土層断面図（縮尺1/40）	67
第34図	遺構配置図（縮尺1/200）	69
第35図	掘立1・2平面図（縮尺1/40）	70
第36図	S D 1 平面図（縮尺1/100）	72
第37図	S D 1 土層断面図（縮尺1/40）	72
第38図	S K 1 平断面図（縮尺1/40）	74
第39図	S K ・ S D・表採①出土遺物実測図（縮尺1/3）	77
第40図	表採②出土遺物実測図（縮尺1/3・1/2）	78
第41図	表採③出土遺物実測図（縮尺1/3）	79
第42図	S K ・ S D出土遺物実測図（縮尺1/3）	80
第43図	掘立1出土遺物実測図（縮尺1/1）	85

第5章 来住町遺跡4次調査地

第44図	調査地位置図（縮尺1/4,000）	89
第45図	北壁土層断面図（縮尺1/30）	91
第46図	南壁土層断面図（縮尺1/30）	93
第47図	S D 1 測量・コンタ図（縮尺1/200）	96
第48図	周辺遺跡配置図（縮尺1/500）	97
第49図	第5層①出土遺物実測図（縮尺1/3）	102
第50図	第5層②出土遺物実測図（縮尺1/3・1/8）	103
第51図	第5層③出土遺物実測図（縮尺1/3）	104
第52図	第6・9層・その他出土遺物実測図（縮尺1/3）	105
第53図	第5・6・9層出土遺物実測図（縮尺1/4）	106

表 目 次

第1章 はじめに

第2章 北久米町屋敷遺跡

表1 SK2出土遺物観察表 土製品	27
表2 SK4出土遺物観察表 土製品	27
表3 SP1出土遺物観察表 土製品	27
表4 その他出土遺物観察表 土製品	29

第3章 南久米町遺跡

表5 遺構内出土遺物観察表 上製品	53
表6 表探出土遺物観察表 土製品	53

第4章 南久米町遺跡2・3次調査地

表7 SD1出土遺物観察表 土製品	82
表8 SK1出土遺物観察表 土製品	82
表9 2次調査地表探出土遺物観察表 上製品	82
表10 SD2・SK2・SX2出土遺物観察表 土製品	84
表11 3次調査地表探出土遺物観察表 土製品	84
表12 掘立1出土遺物観察表 錢貨	85

第5章 来住町遺跡4次調査地

表13 第5層出土遺物観察表（須恵器） 土製品	108
表14 第6層出土遺物観察表（須恵器） 上製品	109
表15 第9層出土遺物観察表（須恵器） 土製品	110
表16 その他（試掘）出土遺物観察表（須恵器） 土製品	110
表17 第5層出土遺物観察表（弥生土器） 土製品	110
表18 第6層出土遺物観察表（弥生土器） 土製品	111
表19 第9層出土遺物観察表（弥生土器） 土製品	111

写 真 図 版 目 次

卷頭図版：来住台地摺歴

南久米町遺跡出土の「時」墨書き器

南久米町遺跡

南久米町遺跡 2次調査地

来住町遺跡 4次調査地出土の須恵器

第2章 北久米町屋敷遺跡

- | | |
|----------------------|----------------------|
| 図版 1. 1 調査地全景 (南東より) | 図版 3. 1 遺構完掘状況 (東より) |
| 2 遺構検出状況 (南より) | 2 SK 4 完掘状況 (東より) |
| 図版 2. 1 遺構完掘状況 (北より) | 図版 4. 1 柱穴内出土遺物 |
| 2 掘立 1 完掘状況 (北より) | 図版 5. 1 出土遺物 |

第3章 南久米町遺跡

- | | |
|--------------------------|----------------------|
| 図版 6. 1 調査地遠景 (北東より) | 図版 8. 1 遺構完掘状況 (南より) |
| 2 遺構検出状況 (南より) | 2 掘立 1 完掘状況 (南西より) |
| 図版 7. 1 掘立 1 検出状況 (南西より) | 図版 9. 1 遺構完掘状況 (南より) |
| 2 挖立 1 墨書き器出土状況 (西より) | 図版 10. 1 出土遺物① |
| | 図版 11. 1 出土遺物② |

第4章 南久米町遺跡 2・3次調査地

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 図版12. 1 調査地遠景 (南西より) | 図版16. 1 出土遺物② |
| 2 2次調査遺構検出状況 (南東より) | 図版17. 1 3次調査遺構検出状況 (東より) |
| 図版13. 1 SD 1 検出状況 (東より) | 2 遺構完掘状況 (東より) |
| 2 SD 1 土層断面 (東より) | 図版18. 1 遺構完掘状況 (北東より) |
| 図版14. 1 遺構完掘状況 (北東より) | 2 調査区南壁土層断面 (北東より) |
| 2 遺構検出状況 (北より) | 図版19. 1 出土遺物 |
| 図版15. 1 出土遺物① | |

第5章 来住町遺跡 4次調査地

- | | |
|------------------------|---------------|
| 図版20. 1 遺構検出作業風景 (西より) | 図版23. 1 出土遺物① |
| 2 遺物出土状況 (東より) | 図版24. 1 出土遺物② |
| 図版21. 1 須恵器出土状況 (東より) | 図版25. 1 出土遺物③ |
| 2 大甕出土状況 (東より) | 図版26. 1 出土遺物④ |
| 図版22. 1 遺構完掘状況 (西より) | 図版27. 1 出土遺物⑤ |
| | 図版28. 1 出土遺物⑥ |

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

平成3年、松山市北久米町477、松山市南久米町419、松山市南久米町408、松山市来住町524の4ヶ所について埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下「文化教育課」という）に提出された（下表）。

「確認願い」が提出された北久米町477、松山市南久米町419、松山市南久米町408は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「126 高畠遺物包含地」内に属し、来住町524は「127 来住廃寺」包蔵地内にある。

『126 高畠遺物包含地』内には、弥生時代から古墳時代にかけての集落関連遺構を検出した南久米片廻り遺跡〔1987〕・北久米遺跡〔1989〕、古代の役所である官衙に関連する「久米評」線刻須恵器を出土した久米高畠遺跡7次調査〔1989・1991〕等がある。

『127 来住廃寺』内には、7世紀後半期の官衙関連施設と考えられている「回廊状遺構」を持つ来住廃寺跡や、弥生時代から古墳時代にかけての集落関連遺構を確認している久米高畠遺跡群・来住遺跡群等があり、松山平野でも屈指の遺跡の宝庫として知られている。

文化教育課では、埋蔵文化財確認願いが提出された上記の5ヶ所について、埋蔵文化財の有無と遺跡の範囲やその性格を確認するため、試掘調査を実施した。その結果、各調査地において弥生時代から近世までの遺構、遺物、包含層を確認した。

試掘調査の結果を受け文化教育課と申請者及び関係者は、遺跡の取り扱いについて協議を行った。協議の結果、遺跡が消失する地点に対し、米住・久米地区における弥生時代及び古墳時代の集落構造の解明と、古代の官衙に関連する遺構範囲の確認を目的とした緊急調査を実施することとなった。調査は、文化教育課の指導のもと財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが主体となり、申請者並びに関係各位の協力のもと、平成3年度から同4年度の間に行われた。

調査地一覧

遺跡名	所在地	面積(m ²)	調査期間
北久米町屋敷遺跡	北久米町477-1, 5	854	平成4年3月10日～同年5月30日
南久米町遺跡	南久米町419-10, 420-1	1,000	平成4年5月28日～同年8月7日
南久米町遺跡2・3次調査地	南久米町408-4・5・6	704	平成4年8月1日～同年10月30日
来住町遺跡4次調査地	来住町524-1	988	平成4年4月15日～同年5月2日

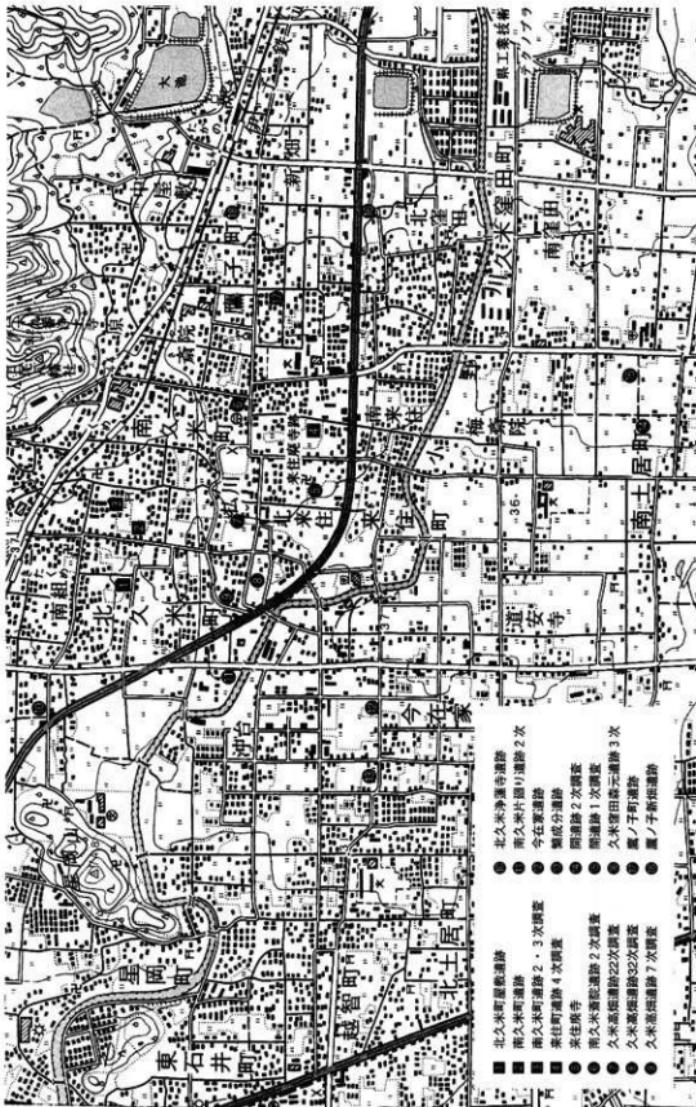
2. 組織

(1) 調査組織 [平成4年度]

財団法人松山市生涯学習振興財団	理 事 長	田中 誠一
	事 務 局 長	渡辺 和彦
	事務局次長	鶴井 茂忠
埋蔵文化センター	所 長	和田祐三郎
	次 長	田所 延行
	調査係長	西尾 幸則
	調査主任	田城 武志
	調査主事	栗田 正芳（文化教育課職員）

(2) 刊行組織 [平成12年3月31日現在]

松山市教育委員会	教 育 長	池田 尚輔
事 務 局	局 長	園上 和敬
	次 長	森脇 将
	次 長	赤星 忠男
文 化 教 育 課	課 長	松平 泰定
財団法人松山市生涯学習振興財団	理 事 長	中村 時広
	事 務 局 長	二宮 正昌
	事務局次長	河口 雄三
埋蔵文化財センター	所 長	河口 雄二
	次 長	田所 延行
	調査係長	田城 武志
	調査主任	栗田 正芳（文化教育課職員）
	担当調査員	高尾 和長



第1図 采住台地主要道路分布図 (S = 1 : 15,000)

3. 歴史的環境

松山平野の南東部には、高繩山系西麓を水源とする大小の河川が存在する。本書で紹介する遺跡が所在するところは、これら河川のうち小野川と堀越川によって形成された来住台地上、もしくはその隣接地に位置している。小野川は、松山市小野・平井地区から来住・久米・石井地区の天山・星ノ岡・東山を経て、主要河川である石手川、更には重信川へと合流する。一方の堀越川は、平井谷から鷹子・久米北部を西流し、国道11号線を越えた久米東部端で小野川と合流している。これらの河川の流域には、古くから遺跡の存在が知られており、特に白鳳期の寺院跡で国指定の史跡となった来住庵寺のほか、縄文時代から近世にいたる遺跡が数多く確認されている。ここでは、来住台地を中心とした近隣の遺跡を概観する。

(1) 先土器～縄文時代

現在までに松山市内において先土器時代の遺構の検出例はなく、僅かにサヌカイト製ナイフ形石器等が久米窪田Ⅴ遺跡、五郎兵衛谷占墳、久米山田池遺跡、平井町今吉等から表採されるにとどまっている。

縄文時代は、この地域では後・晚期に限られ、久米山田池遺跡、久米窪田Ⅰ遺跡、久米窪田森元遺跡等に代表される。特に、久米窪田森元遺跡からは後期後葉の上器片が土坑から多数出土しており、数少ないこの時期の一括資料として貴重なものである。

(2) 弥生時代

来住台地及びその周辺地域では、前期から終末期までの遺物が近年の調査によって、数多く出土している。遺構は、前期初頭、中期中頃～後期にかけてのものが多い。

前期では、前期末から中期初頭にかけての土坑が多数検出され、また集落区画の構造が数条確認されたことにより、集落周辺部の状況が判明しつつあるが、同時期の住居址が未確認であり、集落の復元は今後の課題となっている。

中期は、米住庵寺15次調査より後半期の良好な一括資料が出土しているが、前期に比べると遺構や遺物の量は少ない。ただ、近年の久米高畠遺跡、来住庵寺周辺の遺跡からこの時期の遺物等が確認されており、今後の報告を待ちたい。

後期については、米住庵寺寺域内より堅穴住居址が検出されており、集落の存在を確認している。また、この時期についても近年の久米高畠遺跡、来住庵寺周辺の遺跡から遺構や遺物が多数確認されており、弥生時代終末期には来住地区周辺には複数の集落が展開していたことは明らかである。

(3) 古墳時代

5世紀後半以後、米住地区周辺において前方後円墳が造営され、鷹子から平井谷にかけての丘陵地には6世紀以降の群集墳が存在している。古墳の数や内容は、松山平野でも有数の地域である。觀音山古墳（帆立貝式前方後円墳推定）、二ツ塚古墳（前方後円墳）、波賀部神社古墳（前方後円墳）、播磨塚古墳群、芝ヶ峰古墳群等が特に知られている。

集落は、来住台地の北部及び北東部において竪穴住居址が検出されているが、この時期の生活遺構検出例は数少ない。

また、当地域北東部の小野・平井地区では7世紀代の窯址が多数発見されており、須恵器の生産が盛んであったことを物語っている。

(4) 古代

国指定史跡として知られる来住廃寺をはじめとして、官衙関連遺構を多数検出している久米高畠遺跡等、全国的に有名な遺跡が散在する。すでに、久米高畠遺跡は調査事例が40次を越え、守院・官衙施設の構造も次第に明らかになってきている。

来住廃寺をほぼ南端とし、北方に展開するこの地域には、近年の調査で回廊状遺構で区画されたブロック、構状遺構で区画されたブロック、溝状遺構で区画されたブロックのあることが判明している。それに伴って、碁盤の日のように敷かれた道路遺構の検出もされており、久米氏が削掘した当地域の様相が次第に現れてきつつあり、今後の調査に期待されるところである。

(5) 中世

中世の集落跡は、この地域での報告例は極めて少ない。一部の北部地域では、掘立柱建物群が集中して幾重にも重なった状態で検出されており、来住台地北東部の鷹ノ子遺跡でも確認されている。来住台地の中世遺構の再検討が望まれる。

【文献】

- 吉本 拓 1981 「来住V遺跡」『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』 愛媛県教育委員会・愛媛県埋蔵文化財センター
- 栗田 茂敏 1989 「久米庄田森元遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』 松山市教育委員会
- 岸 郁男・森 光晴・小笠原好彦 他 1979 「来住廃寺」 松山市教育委員会
- 西尾 幸則 1993 「来住廃寺遺跡」 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
- 梅木謙一編 1992 「来住・久米地区の遺跡」 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
- 橋本 雄一 1994 「北久米淨蓮寺遺跡・3次調査」 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター



第2章

北久米町屋敷遺跡



第2章 北久米町屋敷遺跡

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

平成3（1991）年7月5日、宮内英紀氏より松山市教育委員会文化教育課（以下市教委）に対し、宮内氏所有の松山市北久米町477番1・477番5における宅地開発にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが提出された。

調査地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「No126 高畠遺物包含地」内にあり、松山平野北東部における平井谷地域を水源とする堀越川の北岸、標高32.8mに立地している。国指定史蹟來住庵寺跡は、当地より南東600mに位置する。

現在までのところ、調査地南方150mにおいて西流する堀越川と、1kmにおいて西流する小野川に挟まれた来往台地上には、官衙的造構や古代集落で知られる久米高畠遺跡群、来往遺跡群など有数の遺跡地帯のあることが確認されている。特に「久米評」線刻須恵器を出土した久米高畠遺跡7次調査地や掘立柱建物7棟と墨書きされた須恵器、木簡など官衙関係を窺わせる遺物を出土した久米窪田II遺跡、更には久米高畠遺跡1・11・22次調査の結果から7世紀中から後期に比定される柵列状遺構・正規的建物と推測される掘立柱建物等などが検出された。柵列は方形状の区画を形成し、その中に遺存する建物跡は、すべて柵列と同一の方向性を持つことが確認されるなど、近年の調査で数多くの遺跡が密集する地域であることが判明している。



第2図 調査地位置図 (S = 1 : 4,000)

堀越川北岸の調査地近隣では、僅かに古墳期から中世にかけての遺構・遺物を検出した南久米北野遺跡1・2次調査地を知るのみであったが、近年の調査によって古墳時代後期から古代、さらには中・近世に跨ぐる遺跡が統々と確認されている。

これらのことから市教委は、当該地における埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲やその性格を確認するため、平成3（1991）年9月2日から3日間試掘調査を実施した。その結果、出土遺物のほとんどが胴部の碎片で、且つ数量も少なかったものの、円形と方形の多数の柱穴状遺構が検出された。柱穴内の埋土から2期以上の時期に跨ぐる建物跡の遺存が想定された。これにより、少量の遺物から古代から中近世にかけての遺構群が存在することが明確となった。この結果を受けて市教委と申請人の2者により遺跡の取り扱いについて協議を行い、宅地開発によって失われる遺構・遺物について、記録保存のために発掘調査を実施することになった。発掘調査は、古代から中近世にかけての当該地及び周辺地域の集落様式解明を主目的とし、文化教育課が主体となり、宮内英紀氏の協力のもと平成4（1992）年3月10日に開始した。

（2）調査組織

調査地 松山市北久米町477番1, 477番5

遺跡名 北久米町屋敷遺跡

調査期間 平成4（1992）年3月10日～同年5月30日

調査面積 854m²

調査委託 宮内 英紀

調査担当 調査主任 田城 武志

調査員 高尾 和長

調査作業員 岩本 憲・山邊 進也・志賀 夏行・原田 英則・重松 恒彦・
田中 国広・田中 熊・二宮 和見・西田 竜一・松友 利夫・
仙波 千秋・仙波ミリ子・金子 育代・高尾 久子・宮田 里美・
相原 勇・重松 吉雄・波多野恭久・宮本 健吉・宮脇 和人・
宮脇 武勇・森 隆・八木 幸徳



発掘作業風景（北より）

2. 層 位 (第4・5・6図)

本遺跡は、松山平野南西部にそびえる後期白亜紀和泉層群に覆われた分岐山塊の南麓にあり、また堀越川右岸の冲積世海浜・川床の堆積物層と洪積世段丘・旧期扇状地堆積物層のはば境界線上に立地する。

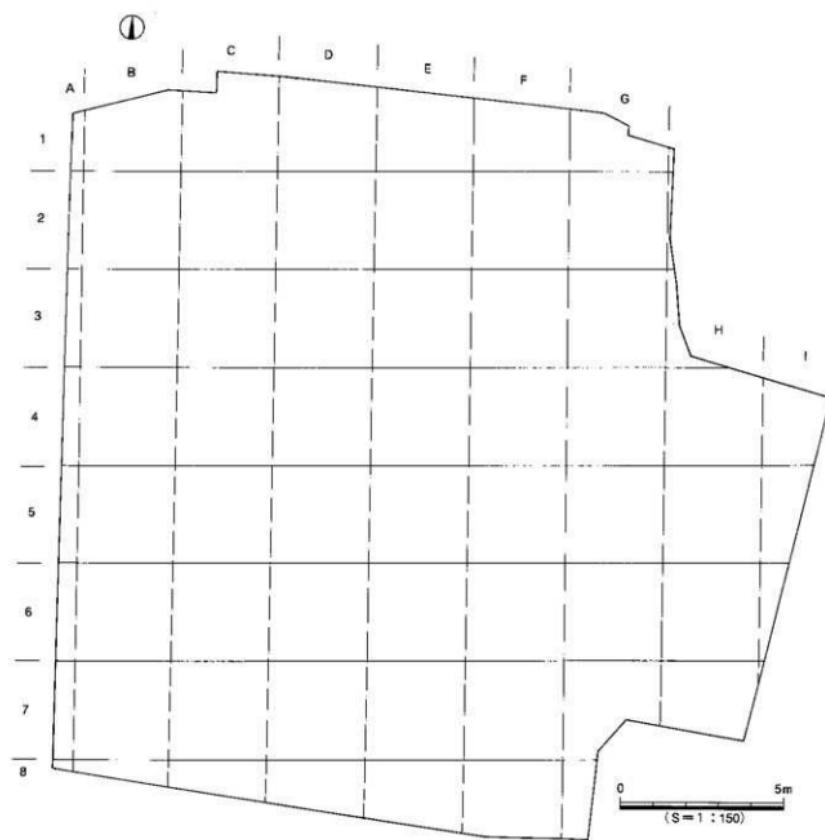
主な層位は、第1層耕作土、第2層赤褐色土（2・3・4層は床土）、第5層褐灰色土、第7層灰褐色土（中・近世）、第8層暗赤褐色土A、第9層暗赤褐色土B（やや赤色が弱い）、第10層黒褐色土、第11層黒色土、第13層淡黄色土A（砂質）、第15層灰白色土A（地山）、第16層灰白色土B（砂質）、第18層灰白色砂礫土に5~10cm大の礫を含む、第21層青灰色土（粘質）、第22層灰黃褐色土（粘質）、第24層青灰色砂質土である。擾乱層も含め25層に分層される。表土の第1層から4層は20~30cmの厚さを測る。第5層は調査区南東部において、15~20cmの厚さの層で東部中心に広がりをみせ、磁器、すり鉢を包含し、北東から南西に向か緩傾斜している。第10・11層はそれぞれ10cmの厚さを測り、調査区南部でしか確認されていない。調査区は、全体的に近現代の開墾行為によって削平・擾乱されており、土層による時期設定は困難を極めたが、ただ東壁の層序については削平の激しい西部に比較して下層の土層は比較的安定した遺存状態であった。

検出された遺構は、掘立柱建物跡1棟、土壤状遺構8基、溝状遺構12条（近世3条、中世2条、時期不詳7条）、ピット状遺構429基、近世住居址1棟であり、これらはそれぞれ第7・16・24層上面での検出である。

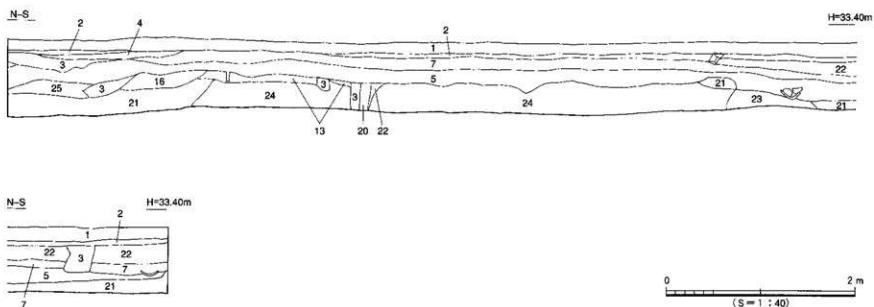
なお、調査にあたり調査区内を3m四方のグリッドに分け、西から東へA・B・C・・・H・I、北から南へ1・2・3・・・8・9とし、第3図に示すようにA1・A2・A3・・・とグリッド名を呼称した。調査は、廃土置場の都合上、南部の10区・9区・8区を対象に行い、順次北方へと調査を実施した。



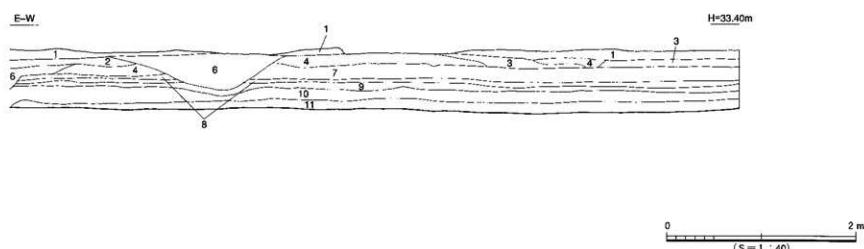
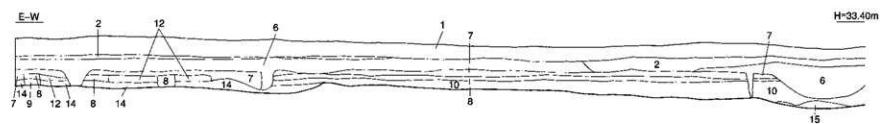
東壁土層断面・捲鉢43出土状況（北西より）



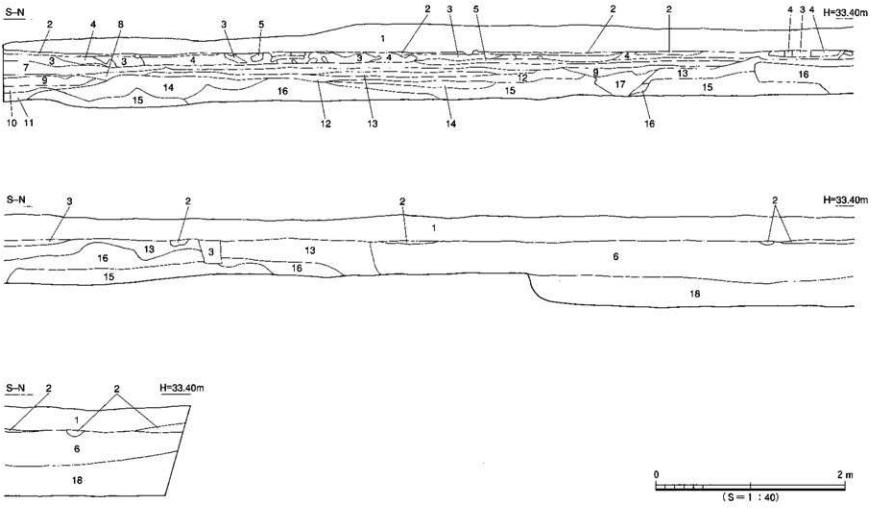
第3図 調査地区割図



第4図 東壁土層断面図



第5図 南壁土層断面図



第1層 耕作土	第14層 淡黃色砂質土 B (2.5Y 8/4)
第2層 赤褐色土	第15層 灰白色砂質土 A (2.5Y 7/1)
第3層 赤褐色土 [黄色土混]	第16層 灰白色砂質土 B (2.5Y 8/1)
第4層 黄色土	第17層 暗褐色土 [淡黄色粒混] (5YR 2/2+2.5Y 8/3)
第5層 褐灰色土 (10YR 4/1)	第18層 灰白色砂壤土 (2.5Y 7/1)
第6層 混乱	第19層 淡青色土 (2.5Y 8/4)
第7層 暗灰褐色土 (5YR 5/1)	第20層 黑褐色土 (10YR 3/1)
第8層 暗赤褐色土 A (5YR 3/3)	第21層 反白色土 (2.5Y 8/2)
第9層 暗赤褐色土 B (5YR 2/2)	第22層 反黄褐色土 (10YR 5/2)
第10層 黑褐色土 (5YR 5/2)	第23層 反白色土 [褐灰色粒混] (2.5Y 8/2+10YR 4/1)
第11層 黑色土 (5YR 7/1)	第24層 灰白色砂質土 (2.5Y 8/2)
第12層 明黄褐色土 (2.5Y 6/6)	第25層 黄色粘質土 (5Y 6/4)
第13層 淡黄色砂質土 A (2.5Y 8/6)	

()内は「標準土色誌」(財團法人日本色彩研究所監修)によるものである

第6図 西壁土層断面図



第7図 遺構配置図

3. 調査の概要 (遺構と遺物)

本調査では、弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世の遺構及び遺物を検出した。弥生・古墳・古代の各時代の遺構については近年の耕作等の影響によって明確に確認されなかつたものの、弥生土器・須恵器・上師器片等、数点を表探している。また、中世の遺構は掘立柱建物址1棟、土坑状遺構2基、溝状遺構2条、ピット状遺構数基を検出した。近世では住居址1棟、溝状遺構3条、ピット状遺構数基を確認した。

(1) 中世の遺構と遺物

本調査における中世の遺構は、掘立柱建物址1棟、土坑状遺構2基、溝状遺構2条、ピット状遺構数基があげられる。

掘立 1 (第8図)

調査区北西隅において検出した。平面形は南北軸によりN $16^{\circ}30' E$ 振っており、正方形を呈している。2間×2間(415cm×415cm)の規模を持ち、南西隅には入口部とみられる柱穴2基を検出した。1間の柱痕間隔は205~210cm、柱穴は直径40~52cm、深さ20~30cmを測る。ただ、西列中央の柱穴については近現代の開墾行為によって削半され確認されなかつた。覆土は、柱痕部が暗灰褐色土(第7層)、その周りに黄色土をブロック状に混在した暗褐色土(第17層)を有していた。

建物址の時期については、柱穴内より中世の上師器碎片がわずかに出土していることにより、中世期ないしは中世以降に造営されたものと考えられる。

S K 2 (第7図)

調査区南西部F 5~6区に位置し、土坑SK 7に切られている。南北幅は不明であるが、東西幅65cmを測る。検出状況から推して南北に長い楕円形を呈していたものと考えられる。土坑内やや西よりに土坑を切る柱穴1基を検出した。断面は舟底状を成し、深さ20cmを測る。

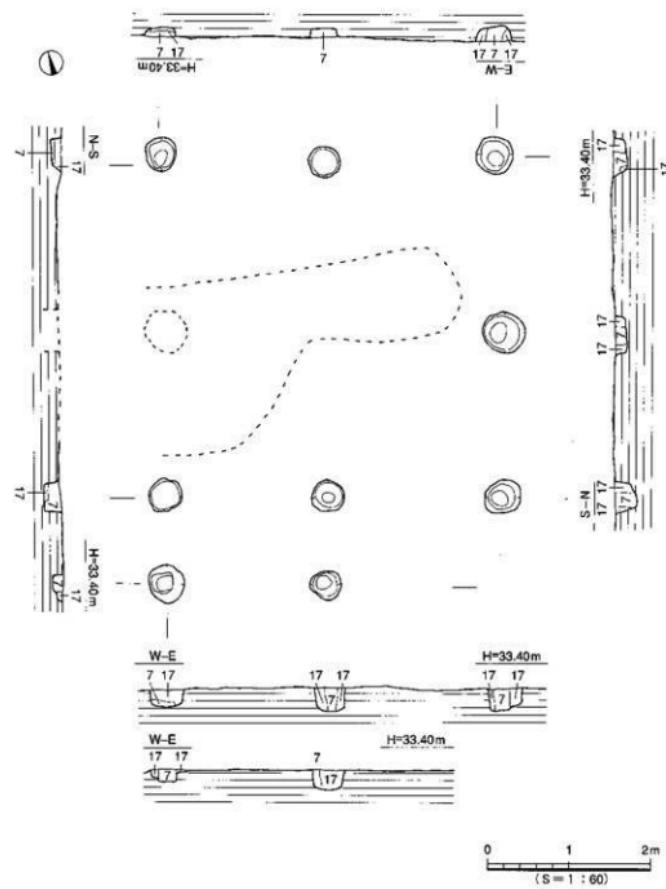
[出土遺物] (第10図 図版4)

土師器坏(1)：完形品。底部に回転糸切り痕が残り、内外面ともに横ナデ調整が施されている。外向には強いナデによる緩やかな段がみられる。

三足付土釜(2)：平底と思われる底部より、内湾気味に伸びる脚部。脚端部は、僅かに外方向に曲がる。調整はナデが施されている。

S K 4 (第9図)

調査区東部端II・I 4~5区に位置し、南北幅214cm、東西幅380cm、深さ14~18cmを測り、東西に長い楕円形を呈している。覆土は、暗灰茶色土を主とし、乳灰白色粘質土、黄茶色粘質土等を混在する。検出状況から、遺構上面は近現代の耕作によって激しく削半されており、遺構・遺物とも遺存状況はあまり良くなかった。出土遺物の中には28点の鉄洋小片(25頁参照)が土坑内全体から出土し、青磁碗片も数点検出された。その中でも、遺構上面出土ではあるが龍泉窯系青磁碗の高台部は中國産である。焼土や鉄片も土坑内各所より確認されたことから中世期における製鐵関連遺構と考えられる。



第8図 振立1平面断面図

【出土遺物】(第10図・第12図 図版5)

土師器皿(3)：口径8.1cm、底径5.4cmを測り、僅かに外反する口縁部を持つ。調整は横ナデが施されている。

土師器坏(4)：底部は回転糸切りである。

土 父(5-6)：口縁部に断面が三角形の鉢を貼りつける。

なお、青磁碗(40)は、龍泉窯系青磁碗の高台片である。内面中央に花文様と思われるスタンプ文が印されている。龍泉窯系青磁碗編年(横田賢次郎・森田勉編年)I-7類に比定され、12世紀後半と考えられる。

(2) 近世の遺構と遺物

本調査における近世の遺構は、土壙状遺構1基、ピット状遺構数基を検出した。

SK7(第7図)

調査区南西部D5・6区に位置し、SK2を切る形で検出された。規模は、南北幅80cm、東西幅220cm、深さ30cmを測る。検出状況は、東西に長い長方形を呈し、中央部に2基の柱穴を遺存していた。断面は、ほぼ平底状を呈しており、土師器皿片、擂鉢片等の細片を出土した。出土遺物から、18-19世紀の遺構と考えられる。

また、その他の主な出土遺物は江戸時代の灯明皿5点・擂鉢3点等であったが、そのほとんどの遺物が表土からの検出であり、碎片であるため遺構との関連性を見いだすのは困難であった。

(3) その他の遺構と遺物

SK1(第7図)

調査区北東部G3・4区に位置し、平面形は直径約170cmの円形を呈し、深さ22cmを測る。断面は緩やかな鉢状となっている。覆土からSK8と同時期の遺構と考えられる。出土遺物は全く検出していない。

SK5(第7図)

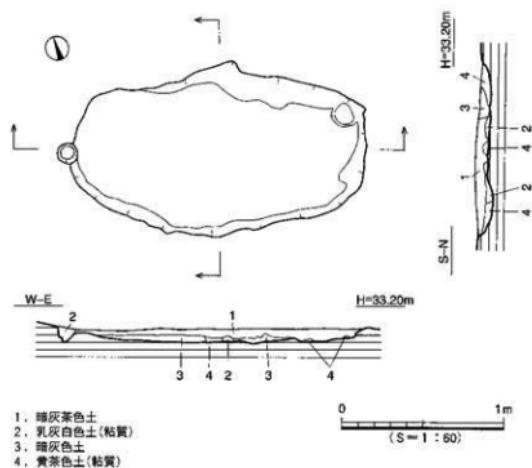
調査区中央部よりやや南よりに位置し、平面形は東西幅80cm、南北幅132cm、深さ10cmを測る。遺構の遺存状態は悪く、上層部は開墾行為によって削平されていた。断面は平底を呈していた。出土遺物は検出されなかったが、覆土中に炭化物を混在していた。

SK6(第7図)

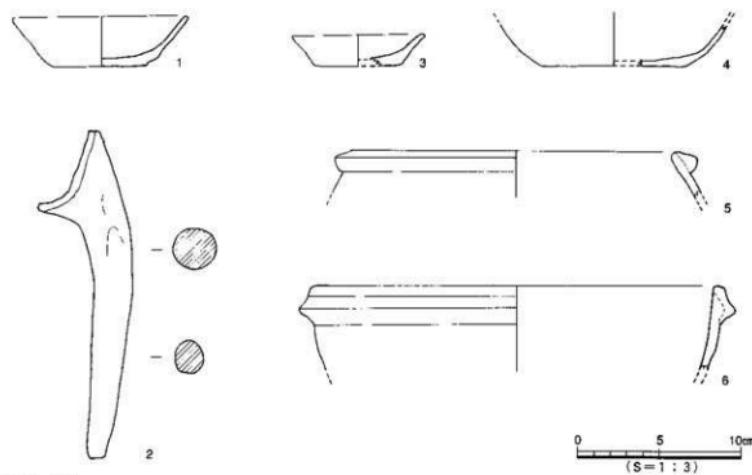
調査区南部E・F6区に位置し、平面形は東西幅148cm、南北幅50cm、深さ28cmを測る長方形である。土坑東側を柱穴に切られている。断面は、やや舟底状を呈している。覆土は暗灰色土を主とする。出土遺物は覆土中より土師器の細片が数点出土している。

SK8(第7図)

調査区中央部よりやや東よりに位置し、平面形は東西幅156cm、南北幅100cm、深さ22cmを測る円形である。土坑西部を柱穴によって切られている。覆土は暗灰色土を主とする。遺物は検出されていない。

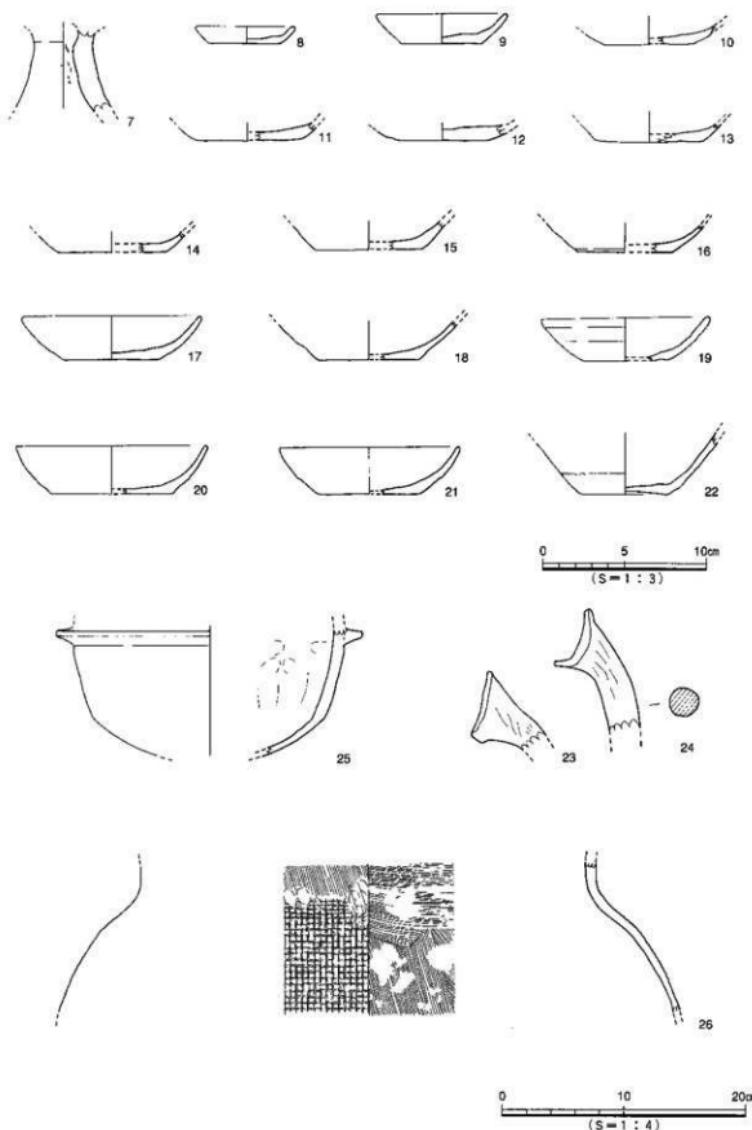


第9図 SK4平面断面図

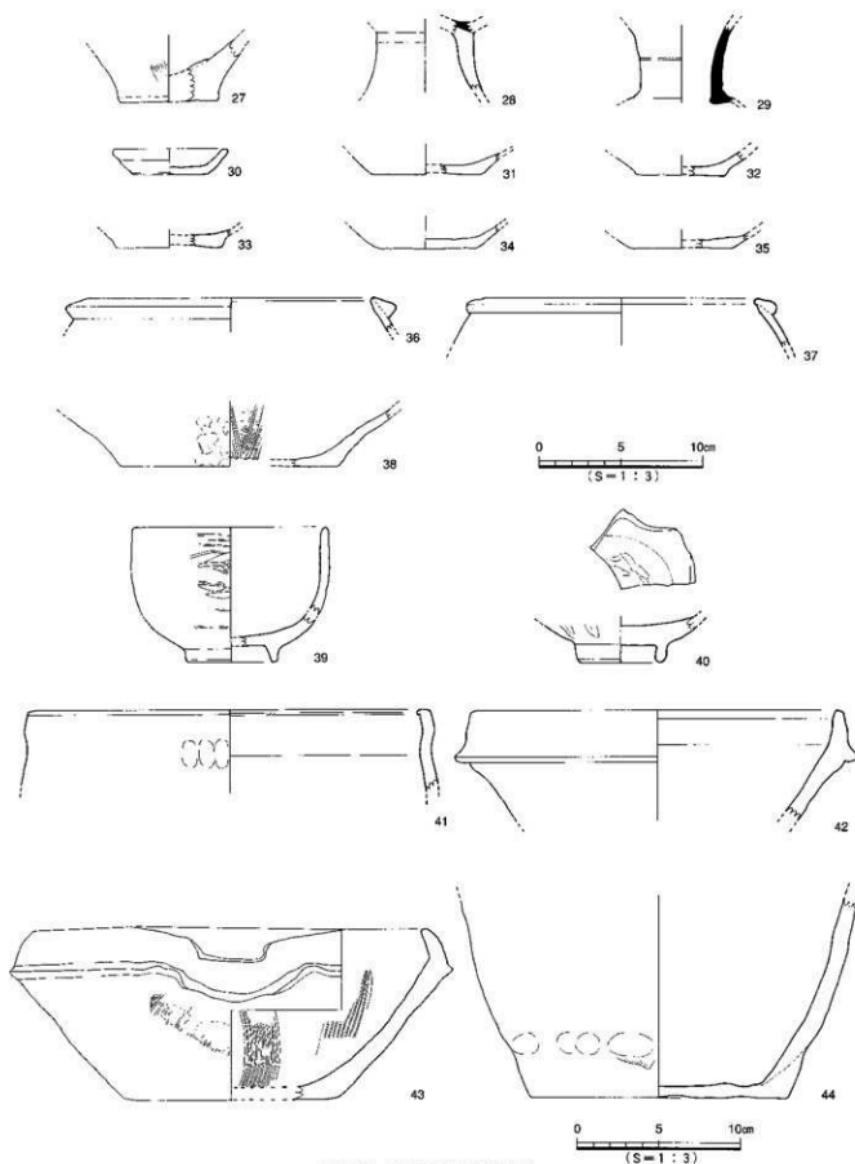


第10図 SK2・4出土遺物実測図

調査の概要



第11図 柱穴内出土遺物実測図



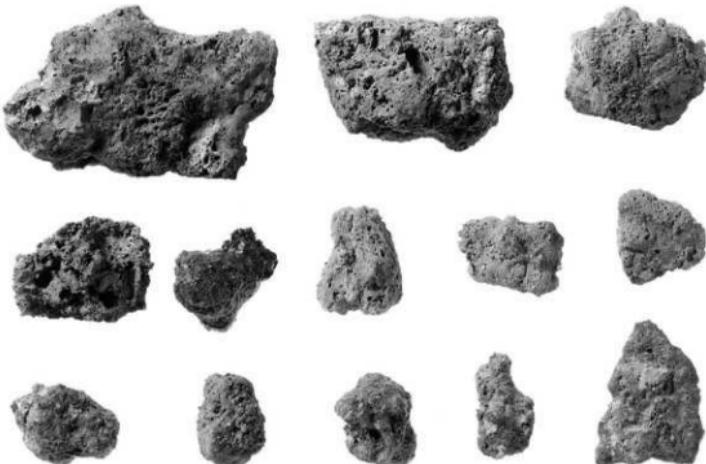
第12図 麦探出土遺物実測図

柱穴内出土遺物（第11図 図版4）

(7)は、弥生土器の高坏の脚部片である。(8)～(16)は、土師器の皿。(8)は底径4.3cm、口径6.1cmを測る小型の完形品の皿である。(9)～(16)の底部は回転糸切りである。(17)～(22)は坏、口縁部は内傾する。(17)の内面は粗雑な作りである。(20)の口縁部は丸く細くなっている。(21)は外面に強いナデによる段が見られる。(23)・(24)は三足付土釜の脚部片で、ともに平底の底部になるものと思われる。(25)は茶釜と思われ、断面四角形の鈎を貼りつける。外面に煤の付着が見られる。(26)は龜山焼の大甕で、胴部はタタキ調整で強く叩き締められている。

表探遺物（第12図 図版5）

(27)は弥生土器の壺底部片、(28)は透かし窓を有する須恵器高坏の脚部片である。(29)は須恵器長頸壺の頸部片で、直立気味に立ち上がり僅かに外傾する。(30)～(35)は土師器皿である。(30)は口径7.0cm、底径4.5cm、器高1.5cmを測り、外面にナデによる段が見られる。(31)・(34)・(35)の底部に回転糸切り痕がある。(36)は口縁端部に断面三角形の鈎を貼り付けた土師質の土釜である。(37)も土師質の土釜で口縁端部よりやや垂れ気味に鈎を貼り付けている。(38)は瓦質の擂鉢底部片、内外面にタテ方向の櫛目を施し、そのち外面にナデによる調整が行われている。(39)は口径11.6cmを測る磁器碗で、オリーブ灰色の釉がかけられている。(40)は明青灰色の釉がかけられ見込文を持つ青磁碗である。(41)は瓦質の碗で、直立気味な口縁部の手前でやや内傾し、口縁端部は内側に肥厚されている。(42)は直立気味に立ち上がる口縁部の下部に、断面三角形の帶状を持つ擂鉢である。(43)は放射状に9本単位の粗い櫛書き条線を施す擂鉢である。(44)は備前焼の大甕の底部で、やや内湾気味に立ち上がり、外面に横ナデから横ハケ調整が施されている。



SK4出土鉄津

4. 小 結

本調査において、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世の造構及び遺物を確認することができた。弥生時代、古墳時代、古代の各々の造構については、近現代における開墾行為によって削平されており、弥生土器・須恵器・土師器等、数点を表探するにとどまった。近年の周辺地域における調査例は数少なく、増してやこの時期の造構検出例は稀有といってよい。ただ、本調査地より50m南南東のところに、昭和51年市教委によって調査された北久米市道遺跡A区が存在し、そこから古墳時代前期、5世紀代の須恵器と土師器を伴う掘立柱建物址を検出している。また、300m西方には部分的な調査しかされておらず、主体部が未調査の北久米二ツ塚古墳が遺存しており、当地域における古墳時代の集落関連造構のあったことが想定されるが、今回の調査では確認することはできなかった。

中世では、掘立柱建物址1棟（SB1）、土坑状造構2基（SK2・4）、溝状造構2基（SD1・2）、ピット状造構数基を確認している。SB1は、本調査における数多い柱穴の中で唯一確認することのできた掘立柱建物址であるが、南面に広がる柱穴群の中にも規模的にみても、また覆土から比較しても酷似する柱穴が数基検出されており、この時期の当地域における集落群の存在を考えることができるであろう。

本調査で特筆される造構としては、SK4が挙げられる。土坑内からは、多数の鉄漆と広範囲に広がる焼土を検出し、床面には粘土を貼りつめた痕跡を確認することができた。しかし、近現代の削平が著しく製鉄関連造構の詳細を把握することはできなかった。また、土坑上面から出土した龍泉窯系青磁碗は、12世紀代に輸入された中国陶磁器と考えられ注目される遺物である。

今後、周辺地域の調査が進めば、製鉄造構を含めた中世の当地域における生産関連造構の広がりが具体的に明確なものとなるであろう。

なお、本調査で検出された溝状造構5条については、近現代の開墾行為による削平が著しく、遺存状態が良くないため、また検出された遺物もほとんどないことから、本稿での記載は省かせていただいた。

[文献]

- | | | |
|------------|------|---|
| 西尾 幸則 | 1986 | 「北久米寺跡遺跡」「愛媛県史 資料編」 愛媛県史編纂委員会 |
| 森 光晴ほか | | 『松山市史料集 第2巻』 松山市史編纂委員会 |
| 森 光晴ほか | 1986 | 『愛媛県史 資料編 考古』 愛媛県史編纂委員会 |
| 小笠原好彦 | 1979 | 『来住庭寺』 松山市教育委員会 |
| 西尾 幸則・池田 学 | 1979 | 「来住庭寺跡寺域調査」
〔松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ〕松山市教育委員会) |
| 西尾 幸則・池田 学 | 1991 | 「久米官衙遺跡群」
〔松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ〕松山市教育委員会) |
| 栗田 茂敏 | 1987 | 「南久米片廻り遺跡」
〔松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ〕松山市教育委員会) |

遺物観察表

表1 SK2出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	土器 不 透	口径 10.7 底径 8.7 高さ 3.0	底部 同軸糸切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	新褐色 明褐色	新褐色 ○	新褐色 新褐色	4
2	土器 透	口径 20 高さ 20	平素になる部分。	ナデ	ヨコナデ	暗茶褐色 明褐色	石・長(1-2) ○	石・長(1-2) ○	4

表2 SK4出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
3	上部 目	口径 (8.1) 底径 (3.4) 高さ 1.9	わずかに外反するL縁部。	ヨコナデ	ナデ	明褐色 明褐色	新褐色 ○	新褐色 新褐色	4
4	土器 不 透	底径 (9.0) 高さ 2.6	外縁に放いナゲ。 底部に同軸糸切り痕。	○ヨコナデ 縦ナデ	ナデ	淡褐色 淡褐色	深褐色 ○	深褐色 深褐色	4
5	土器 透	口径 (22.2) 高さ 2.8	口縁部に断面三角形の溝を貼り付ける。	ヨコナデ	ヨコナデ	明茶褐色 暗灰色	新褐色 ○	新褐色 新褐色	4
6	土器 透	口径 (25.6) 高さ 5.2	口縁部に断面三葉形の溝を貼り付ける。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 暗褐色	新褐色 ○	新褐色 新褐色	4

表3 SP出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
7	脚付 高杯	口径 5.5 高さ 5.5	脚部。 組合せ取法か。	脚部。	脚部のあ不明。	ナデ	褐色 褐色	石・長(1-3) ○	SP31
8	土器 直	口径 6.1 底径 4.3 高さ 1.1	口縁部を丸くおさめる。	ヨコナデ	深張ナデ	乳白色 乳白色	新褐色 ○	新褐色 新褐色	SP337 4
9	上部 直	口径 (8.1) 底径 (5.0) 高さ 1.9	L縁滑脂を丸くおさめる。 底部 同軸糸切り。	ヨコナデ	ヨコナデ 押印え	淡褐色 淡褐色	新褐色 ○	新褐色 新褐色	SP38
10	土器 直	底径 (3.6) 高さ 1.2	底部 同軸糸切り。	ナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	新褐色 ○	新褐色 新褐色	SP48
11	土器 直	口径 (6.2) 高さ 1.1	底部 同軸糸切り。	ヨコナデ	ナデ	褐色 茶褐色	新褐色 ○	新褐色 新褐色	SP207
12	上部 直	口径 (5.4) 高さ 1.0	底部 同軸糸切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 淡茶褐色	新褐色(長1) ○	新褐色 新褐色	SP278
13	土器 直	口径 (6.8) 高さ 1.1	底部 同軸糸切りか。	剥離(ナデ)	ナデ	黄褐色 褐色	新褐色 ○	新褐色 新褐色	SP200
14	土器 直	口径 (6.6) 高さ 1.2	底部 同軸糸切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 茶褐色	新褐色 ○	新褐色 新褐色	SP288
15	上部 直	口径 (6.6) 高さ 1.8	底部 同軸糸切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色 淡褐色	新褐色(長1) ○	新褐色 新褐色	SP224
16	上部 直	口径 (6.0) 高さ 1.7	底部 同軸糸切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	新褐色 ○	新褐色 新褐色	SP267

SP出土遺物観察表 土製品

番号	種類	法量(cm)	形態・施文	調		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
17	土器 环	口径(10.9) 底径(6.0) 残高 2.7	口沿部がやや内傾する。 内側に縦な作りである。	ヨコナダ	④ヨコナダ ⑤ナダ	茶褐色	密(七・長) ○	SP116	
18	上師 环	口径(6.0) 残高 2.4	内傾する口環部か。	ヨコナダ	ナダ	浅褐色 浅褐色	継続(長1)×2 ○	SP206	
19	上師 环	口径(10.4) 底径(5.4) 残高 2.7	口縁部がやや内傾する。	ヨコナダ	④ヨコナダ ⑤ナダ	褐色 茶褐色	密(右・長) ○	SP206	
20	土師 环	口径(7.5) 底径(11.8) 残高 2.9	口縁部は丸く細くなりやや内傾する。	ヨコナダ	ヨコナダ	淡黄褐色 淡黄褐色	密(右) ○	SP139	
21	土師 环	口径(11.0) 底径(6.4) 残高 2.9	外壁に強いナダによる段が見られる。	ヨコナダ	④ヨコナダ ⑤ナダ	茶褐色 茶褐色	密(表) ○	SP116	
22	土師 环	口径 5.2 残高 3.9	口縁部を厚くする。	ヨコナダ	ヨコナダ	乳白色 乳白色	密(台2・長) ○	SP133	4
23	土師 上蓋	残高 6.9	平底になる底部と思われる。	不定方内ナダ	ヨコナダ	暗褐色 羽褐色	石・長(1~4) ○		
24	上師 上蓋	残高 10.6	平底になる底盤と思われる。	直状T次のナダナダ	ヨコナダ	暗茶褐色 明茶褐色	石・長(1~2) ○		
25	上師 茶蓋	口径(22.2) 残高(10.6)	底が四角形の鉢を吊り付ける外側に窓の付着が見られる。	深付窓の為不明	④ヨコナダ+ナダ ⑤ヨコナダ	淡白茶窓内 淡白茶窓内	石・長(1~4) ○	SP200	4
26	大甕	口径(38.0) 残高(12.4)	底部は多キ状堅で強く叩き締められている。	充填灰痕・ナダ ⑤粘子目印	前日煮(不定方印) ナダ(一部焼成)	暗灰褐色 灰褐色	石・長(1~3) ○	SP115	5 龜山流

遺物観察表

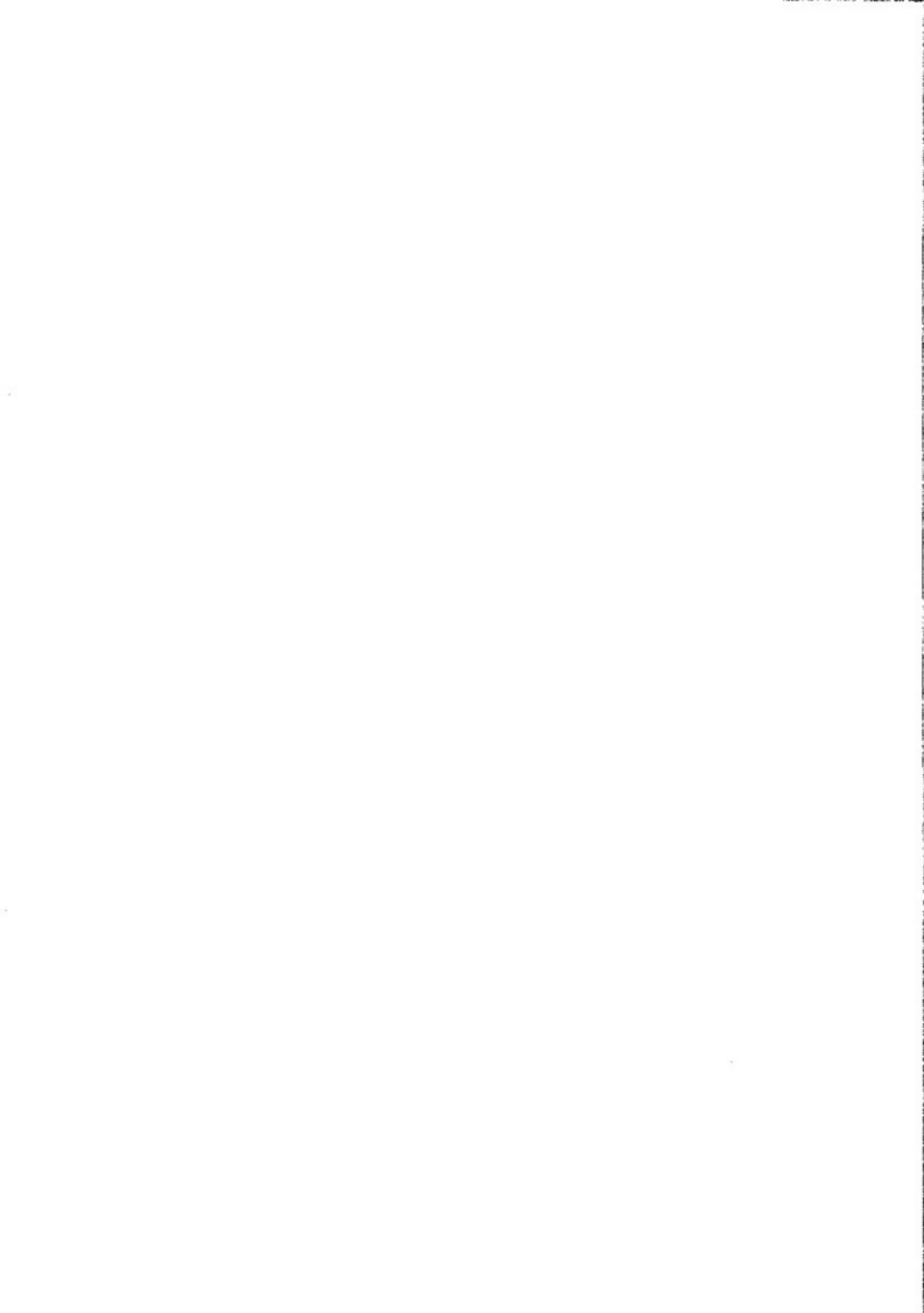
表4 その他出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調査		色調(外面)	胎土成	備考	因縁
				外面	内面				
27	鉢	底径(6.0) 残高 3.8	平底の浅鉢。	ナゲ (一部ハケ)	ナゲ (一部ハケ)	新褐色 黄褐色	石長 (1~4) ○		
28	假想 器種	残高(4.5)	追し窓を有する。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	鉛灰色 灰褐色	長 (1~2) ○		
29	假想 器種	残高(4.8)	腹部より直立気泡に立ち上がり、 わずかに外傾する。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	古灰色 青灰色	相位 (良) ○		
30	瓶	口径(7.0) 底径 4.5 残高 1.5	外側にナゲ施文による紋が記される。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	褐色 褐色	石長 (1~2) ○		
31	瓶	底径(6.8) 残高 1.3	底部 化粧赤切り。	胎成の為不明	胎成の為不明	黒褐色 暗褐色	相位 ○		
32	十脚 器種	底径(5.4) 残高 1.5	わずかに外傾する口縁部。	ヨコナゲ	ナゲ	褐色 褐色	青 ○		
33	十脚 器種	底径(6.5) 残高 1.1	わずかに高い底部。	胎成の為不明	胎成の為不明	桃色 桃色	長 (1~2) ○		
34	十脚 器種	底径 6.0 残高 1.5	底部 化粧赤切り。	ナゲ	ヨコナゲ	黒褐色 明褐色	石長 (1~2) ○		
35	十脚 器種	底径(6.2) 残高 1.0	底部 化粧赤切り。	ナゲ	ナゲ	米淡褐色 乳白色	相較 ○		
36	一輪 器種	口径(20.4) 上部 残高 2.1	口縁端部に直角三角形の縫を 貼り付ける。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	明茶褐色 明茶褐色	石長 (1~2) ○		
37	十脚 器種	口径(19.2) 上部 残高 2.9	口縁端部から垂れるように縫を 貼り付ける。	ヨコナゲ	ナゲ	黒褐色 茶褐色	石長 (1~2) ○		
38	丸質 粘土	口径(13.3) 残高 3.6	内側に環方向の縫目を施す。	タケ綱 + ナゲ 捺押え	ヨコナゲ→模様	墨色 墨褐色	石長 (1~2) ○		
39	碗	口径(11.6) 底径(5.3) 残高 8.2	内外側にモーグル灰色の 縫がかかる。	施文	施文	オリーブ灰 オリーブ灰	青 ○	4	
40	青磁碗	底径(5.2) 残高 2.8	内側にスタンプ文が施されている。	施文	施文	明茶褐色 明茶褐色	青 ○	4	
41	瓦質 器種	口径(11.6) 底径(5.1)	口縁手前でやや内傾する口縁部。	ヨコナゲ + ナゲ 捺壓痕	ヨコナゲ	暗灰褐色 深灰褐色	石長 (1~3) ○		
42	器種	口径(23.0) 残高 6.8	口縁端部が上方に立ち上がる。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	暗茶灰褐色 暗茶灰褐色	石長 (1~5) ○		
43	器種	口径(24.5) 底径(13.4) 残高 10.4	片口部を持つ口縁部、内側に9条の 環方向の縫目を施している。	ヨコナゲ 部ハケ後藤ナゲ	ヨコナゲ 模様を施す	水茶褐色 茶褐色	青 (良) ○	4	
44	壺	底径(15.6) 残高 12.2	底部よりやや内側気泡に立ち上がる。	ヨコナゲ 捺壓痕	ヨコナゲ→ヨコナゲ	暗茶褐色 暗茶褐色	石長 (1~8) ○	4	



第3章

南久米町遺跡



第3章 南久米町遺跡

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

平成3（1991）年9月7日、藤井光子氏より松山市教育委員会文化教育課（以下、市教委）に対し、藤井氏所有の松山市南久米町419-10・420-1における宅地開発にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが提出された。

調査地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「No126 高畠遺物包含地」内にあり、松山平野北東部における平井谷地域を水源とする堀越川の北岸、標高34.8mに立地している。国指定史蹟来住庵寺跡は、当地より南東500mに位置する。

現在までのところ、調査地に隣接する来住台地には、官衙的遺構や古代集落で知られる久米高畠遺跡群、来住遺跡群など有数の遺跡地帯のあることが判明しているが、堀越川北岸の調査地周辺では、僅かに古墳期から中世にかけての遺構・遺物を検出した南久米北野遺跡1・2次調査地を知るのみであったが、近年の調査によって古墳時代後期から古代、さらには中・近世に跨がる遺跡が続々と確認されている。

これらのことから、当該地における埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲やその性格を確認するため、平成3（1991）年10月24日から3日間、市教委指導のもと、財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター（以下 埋蔵文化財センター）が試掘調査を実施した。その結果、黄白色シルト面において掘立柱建物址1棟、柱穴11基、溝状遺構1条を検出、遺物は須恵器、土師器の小片を出土した。これにより、古代から中世にかけての遺構群が存在することが明確となった。この結果を受けて市教



第13図 調査地位位置図 (S = 1 : 4,000)

委と埋蔵文化財センターと申請人の3者により遺跡の取り扱いについて協議を行い、宅地開発によって失われる遺構・遺物について、記録保存のために発掘調査を実施することになった。発掘調査は、古代から中世にかけての当該地及び周辺地域の集落構造解明を主目的とし、埋蔵文化財センターが主体となり、藤井光子氏の協力のもと平成4（1992）年5月28日から開始された。

（2）調査組織

調査地	松山市南久米町419番10,420番1
遺跡名	南久米町遺跡
調査期間	平成4（1992）年5月28日～同年8月20日
調査面積	1,000m ²
調査委託	藤井 光子
調査担当	調査主任 田城 武志 調査員 高尾 和長 調査作業員 岩本 憲・山邊 進也・志賀 夏行・原田 英則・重松 恒彦・ 田中 国広・田中 燕・二宮 和見・西山 竜一・松友 利夫・ 仙波 千秋・仙波ミリ子・金子 育代・高尾 久子・宮田 里美・ 相原 勇・重松 古雄・波多野恭久・宮本 健吉・宮脇 和人・ 宮脇 武勇・森 隆・八木 幸徳

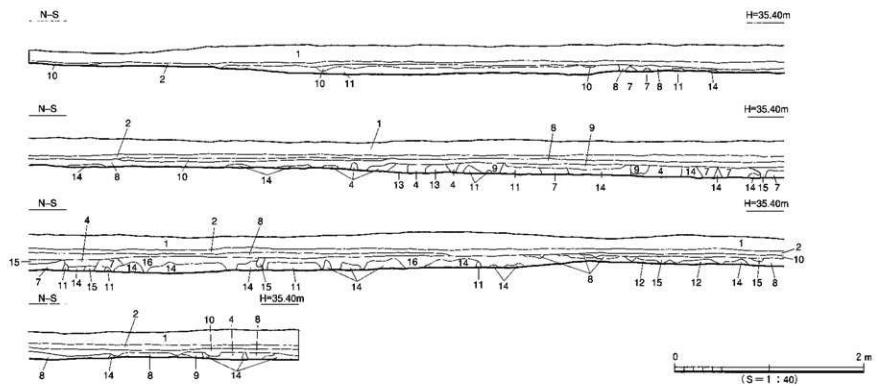
2. 層位（第14・15図）

本遺跡は、松山平野南西部にそびえる後期白亜紀和泉層群に覆われた分岐山塊の南麓にあり、また堀越川右岸の冲積世海浜・川床の堆積物層と洪積世段丘・旧期扇状地堆積物層のほぼ境界線上に立地する。

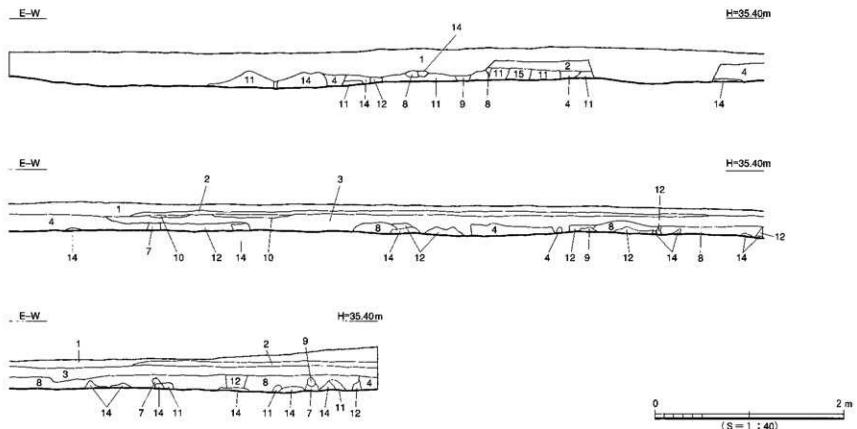
主な層位は、第1層耕作土、第2層灰土、第3層灰褐色土、第4層黒色土、第8層黒褐色土、第11層黄色土（地山）、第14層暗灰褐色土等で16層に分層される。表土の第1層から2層は20～25cmの厚さを測る。第3層は旧水田の耕作土である。第4層はほとんどが遺構内の覆土で調査区南東部において、15～20cmの厚さの層で部分的な広がりをみせ、土師器、須恵器片等を包含している。第8層も4層同様の遺物を包含しており、西面で20～25cm、東面で5～10cmの厚さを持つ。また、同層は南面で15～20cmを測るのに対し、北面では2～5cmしか遺存しておらず、東北部から西南部に向けて緩傾斜していることが解る。調査区は、全体的に近現代の開墾行為によって削平・擾乱されており、特に北部地区は耕作土直下が地山面であった。南部については、北部に比較して下層の7層は比較的安定した遺存状態であった。

検出された遺構は、掘立柱建物址7棟、土壤状遺構1基、溝状遺構3条、ピット状遺構15基、倒木痕6基であり、これらはすべて第11層黄色シルト上面での検出である。

なお、調査にあたり調査区内を3m四方のグリッドに分け、西方から東方へA・B・C・・・・H・I・北方から南方へ1・2・3・・・・8・9・10とし、第16図に示すようにA1・A2・A3・・・・とグリッド名を呼称した。調査は、廃土置場の都合上、南部の10区から順次北方へと調査を実施した。



第14図 東壁土層断面図

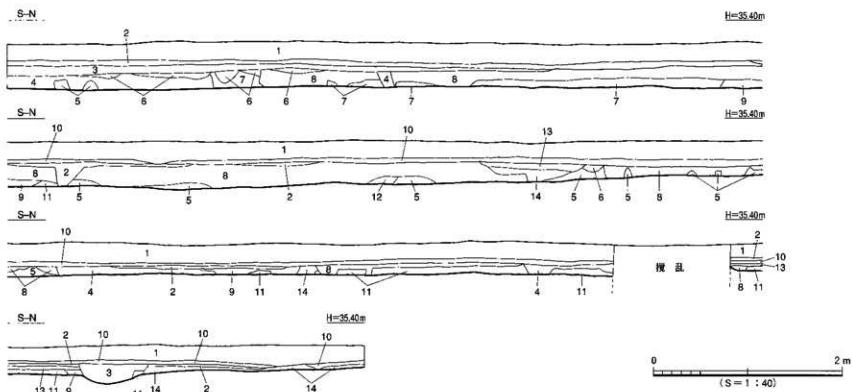


第15図 南壁土層断面図

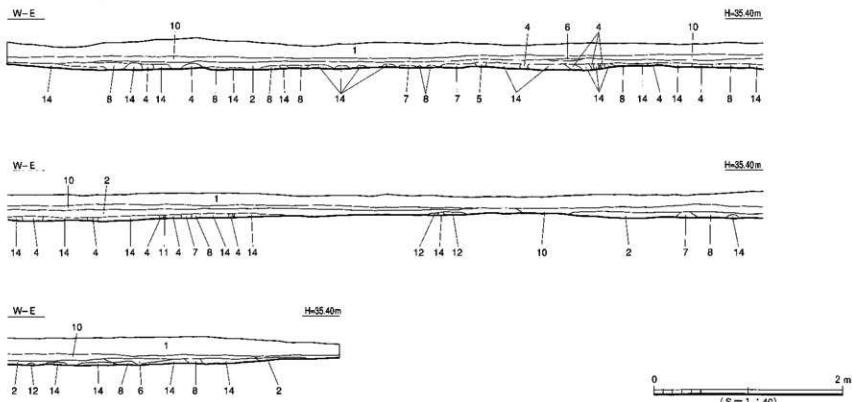
土層表

第1層	耕作土	
第2層	床土	
第3層	灰黃褐色土	(10YR 6/2)
第4層	黑色土	(10YR 2/1)
第5層	黃褐色土	(10YR 5/2)
第6層	灰黃褐色土	(10YR 5/1)
第7層	黃褐色土	[灰黃褐色土混] (10YR 5/6+10YR 4/2)
第8層	黑褐色土	(10YR 3/2)
第9層	暗黃褐色土	(5YR 3/2)
第10層	褐色土	(7.5YR 4/4)
第11層	黃色土	(2.5Y 8/6)
第12層	黑色土	[黃褐色土混] (10YR 2/1+10YR 5/6)
第13層	淡黃色砂質土	(10YR 5/3)
第14層	暗灰色土	(2.5Y 5/3)
第15層	灰オリーブ色土	(5Y 5/2)
第16層	黑色土	[灰オリーブ色土混] (10YR 2/1+5Y 5/2)

(())内は「標準土色誌」(財団法人日本色彩研究所監修)によるものである。

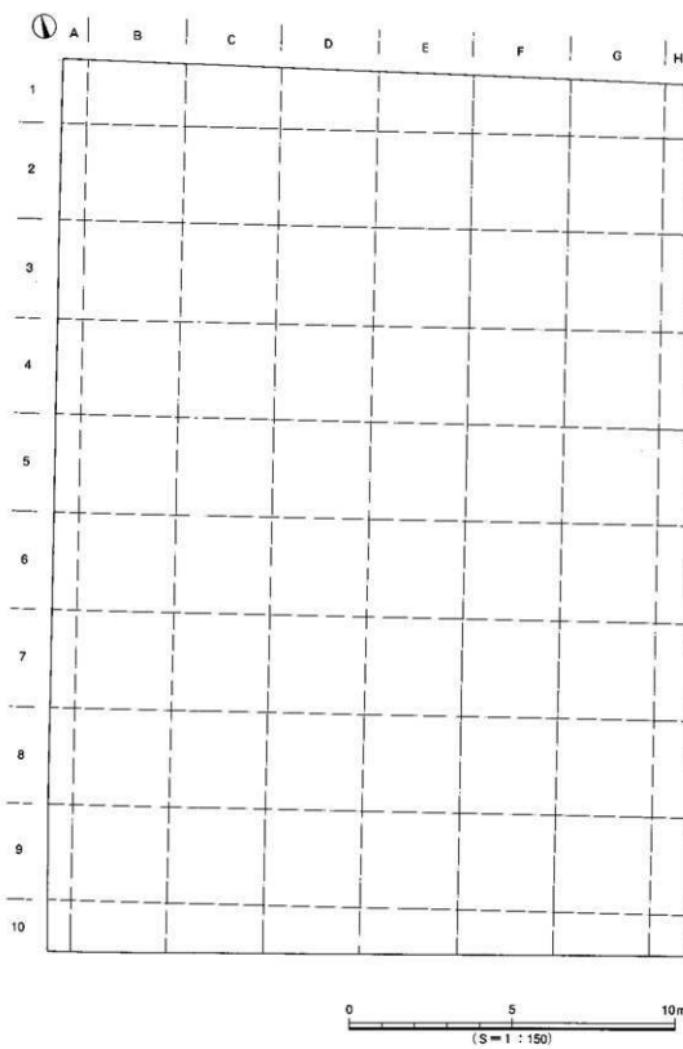


第16図 西盤土層断面図



第17図 北壁土層断面図

層 位



第18図 調査地区割図

3. 調査の概要 (遺構と遺物)

本調査では、古代から中世にかけての遺構及び遺物を検出した。中世の遺構については、近年の耕作等の影響によって明確に確認されなかったものの、土師器、瓦器等の碎片を数点表探している。また、古代の遺構は掘立柱建物跡 7 棟、土坑状遺構 1 基、溝状遺構 3 条、ビット状遺構数基を検出した。

(1) 古代の遺構と遺物

本調査における古代の遺構として、掘立柱建物跡 7 棟、土坑状遺構 1 基、溝状遺構 3 条、ビット状遺構数基を確認した。

掘立 1 (第17・18図)

調査区中央部東端において検出した。平面形は南北軸により N 8°30' E 振っており、東西軸を長軸とする長方形である。梁行 3 間 (448cm)、桁行 4 間 (500cm) 以上の規模を持つ東西棟掘立柱建物で、梁部の柱痕間隔は 1 間 145~155cm、桁部は 170~175cm を測る。柱穴の掘方プランは一辺約 50~70cm の隅丸方形と直径約 70cm の円形の 2 種によって形成し、柱痕の直径 15cm、深さ 30~55cm を測る。覆土は、柱痕部が黒褐色土で、その周りには黄色土をブロック状に混在する黒褐色土と黒色土を配していた。

建物跡の時期については、柱穴 (S P 4) 内柱痕部上面より底部に「時」と書かれた墨書き土器が出土しており、8 世紀後半に比定されるものと考えられる。

【出土遺物】(第24図 図版10)

上師器坏(1)：口径 14.0cm、底径 6.0cm、器高 3.4cm を測る。やや丸みを持つ底部と、口縁部手前で外反する口縁部を持つ。底部に「時」の文字を持つ。

掘立 2 (第17・19図)

調査区北部中央において検出した。平面形は南北軸により N 8°30' E 振っており、東西軸を長軸とする長方形である。梁行 2 間 (474cm)、桁行 3 間 (642cm) の規模を持つ東西棟掘立柱建物で、梁部の柱痕間隔は 1 間 237cm、桁部は 214cm を測る。柱穴の掘方プランは一辺約 70~85cm の隅丸方形と直径約 60~70cm の円形の 2 種によって形成し、柱痕の直径 20cm、深さ 20~36cm を測る。覆土は、柱痕部が黒色土で、その周りには黄色土をブロック状に混在する黒褐色土を配していたが、遺構上面は近現代の開墾行為によって削平されていたため、柱穴の深度は浅かった。また、そのために遺物もほとんど遺存しておらず、僅かに須恵器坏身片を 1 点出土したのみであった。

【出土遺物】(第24図 図版10)

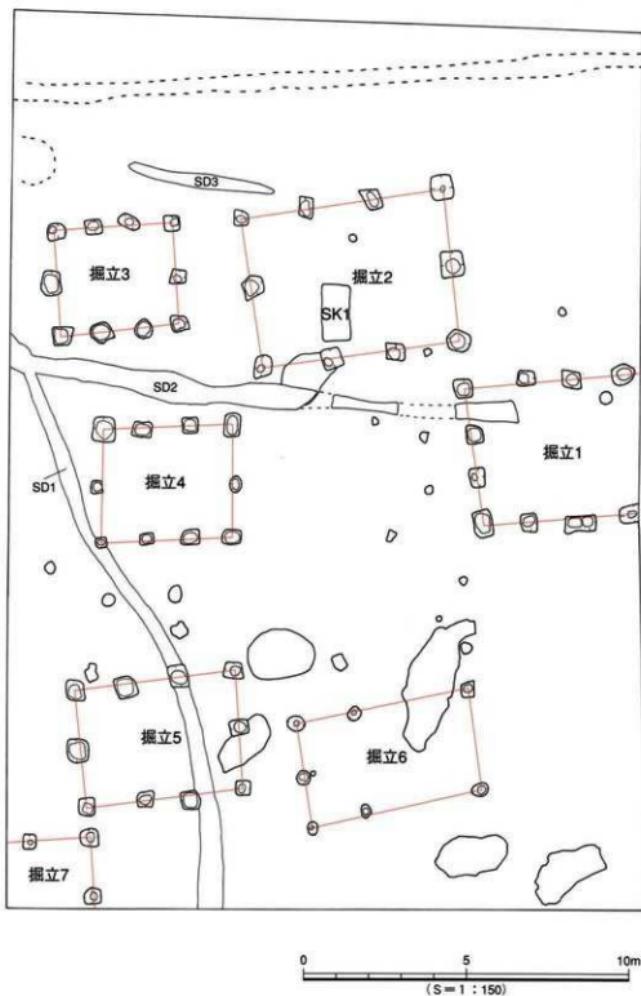
須恵器坏身(2)：外傾する立ち上がりを持つ底部である。外面にナデ、内面に回転ナデが施されたのち、継方向のナデが施されている。

掘立 3 (第17・20図)

調査区北東部において検出した。平面形は南北軸により N 9°00' E 振っており、東西軸を長軸とする長方形である。梁行 2 間 (318cm)、桁行 3 間 (384cm) の規模を持つ東西棟掘立柱建物で、梁部の柱痕間隔は 1 間 160cm、桁部は 128cm を測る。柱穴の掘方プランは一辺約 50~70cm の隅丸方形と直径約 50~60cm の円形の 2 種によって形成し、柱痕の直径 16cm、深さ 20~50cm を測る。覆土は、柱痕部が黒

調査の概要

①



第19図 遺構配置図

色土で、その周りには黄色土をブロック状に混在する黒褐色土を配していた。北列の柱穴上面は、近現代の開墾行為によって削平されていたため、柱穴の深度は浅く、そのため遺物もほとんど遺存しておらず、須恵器坏蓋を出土したのみであった。

【出土遺物】(第24図 図版10)

須恵器坏蓋(3)：口縁端部は下方に折れ曲がり、端部は丸い。外面に薄い緑黄色の釉がかかっている。

掘立 4 (第17・21図)

調査区中央西端において検出した。平面形は南北軸により N 14° 30' E 振っており、東西軸を長軸とする長方形である。梁行 2 間 (346cm)、桁行 3 間 (414cm) の規模を持ち、梁部の柱痕間隔は 1 間 173cm、桁部は 138cm を測る。柱穴の掘方プランは一辺約 50～70cm の隅丸方形を主とし直径約 40～60cm の円形の 2 種によって形成し、柱痕の直径 15cm、深さ 15～30cm を測る。覆土は、柱痕部が黒色土で、その周りには黄色土をブロック状に混在する黒褐色土を配していた。柱穴上面は、全体的に近現代の開墾行為によって削平されていたため、柱穴の深度は浅く、そのため遺物もほとんど検出されなかった。

掘立 5 (第17・22図)

調査区南西部において検出した。平面形は南北軸により N 7° 30' E 振っており、東西軸を長軸とする長方形である。梁行 2 間 (366cm)、桁行 3 間 (498cm) の規模を持つ東西棟掘立柱建物で、梁部の柱痕間隔は 1 間 183cm、桁部は 166cm を測る。柱穴の掘方プランは一辺約 50～60cm の隅丸方形と直径約 50～70cm の円形の 2 種によって形成し、柱痕の直径 16cm、深さ 20～40cm を測る。覆土は、柱痕部が黒色土で、その周りには黄色土をブロック状に混在する黒褐色土を配していた。北・西列の柱穴上面は、近現代の開墾行為によって削平されていたため、柱穴の深度は浅く、そのため遺物もほとんど遺存しておらず、須恵器坏蓋を出土したのみであった。

【出土遺物】(第24図 図版10)

須恵器坏蓋(4)：口縁部は端部手前で下方に折れ曲がり、尖り気味に丸い。

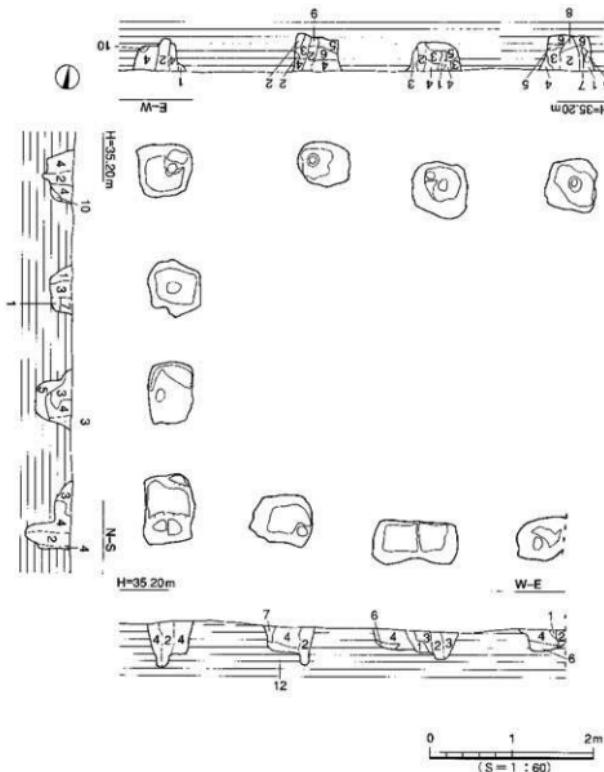
掘立 6 (第17・23図)

調査区南部中央において検出した。平面形は南北軸により N 7° 30' E 振っており、東西軸を長軸とする長方形である。梁行 2 間 (328cm)、桁行 2 間 (540cm) の規模を持つ不整形な東西棟掘立柱建物で、東列と南・北列のそれぞれ柱穴 1 基は確認されなかった。梁部の柱痕間隔は 1 間 164cm、桁部は 180cm を測る。柱穴の掘方プランは直径約 40～50cm の円形によって形成され、柱痕の直径 14cm、深さ 20～30cm を測る。覆土は、柱痕部が黒色土で、その周りには黄色土をブロック状に混在する黒褐色土を配していた。全体的に柱穴上面は、近現代の開墾行為によって削平されていたため、柱穴の深度は浅く、そのため遺物もほとんど検出されなかった。

掘立 7 (第17図)

調査区南西部隅において検出した。平面形は南北軸により N 7° 30' E 振っており、梁行・桁行とも調査区外へと延びているため不明であるが、3 基の柱穴から成る方形の掘立柱建物である。東西を袖とする柱痕の間隔は 1 間 190cm、南北は 180cm を測る。柱穴の掘方プランは直径 50～60cm の円形を呈し、柱痕の直径 14cm、深さ 20～35cm を測る。覆土は、柱痕部が黒色土で、その周りには黄色土をブロック状に混在する黒褐色土を配していた。遺物については、他の建物同様、柱穴の深度は浅く、ほとんど遺存しておらず、須恵器坏身を出土したのみであった。

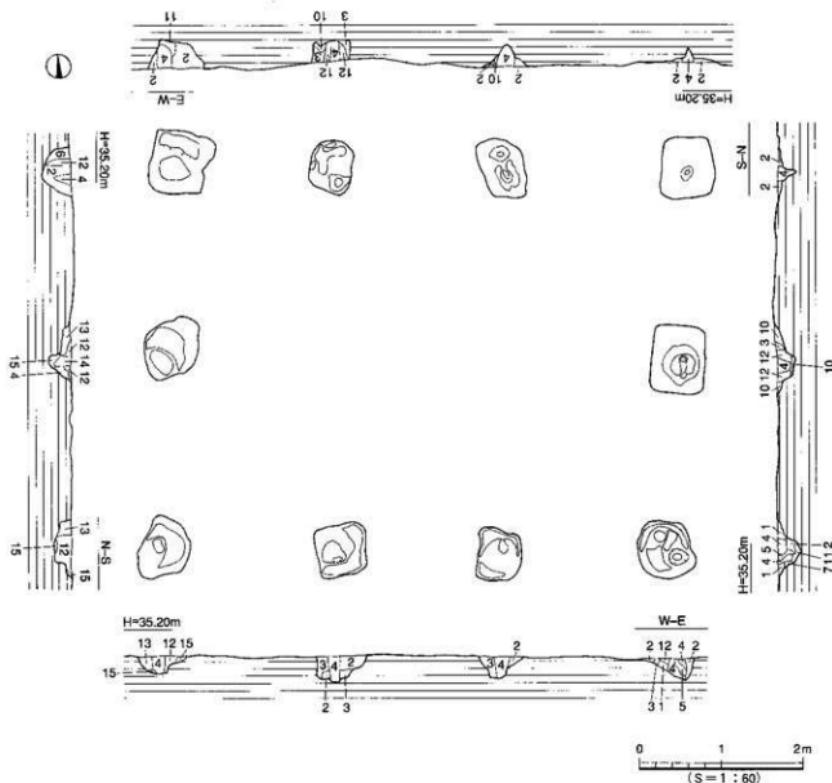
調査の概要



第1層	暗褐色土	[黄色土混]	(10YR 3/3)	第9層	褐色土	(10YR 4/4)
第2層	黒褐色土		(10YR 3/2)	第10層	浅黄色土	(2.5YR 7/4)
第3層	黒褐色土	[黄色土混]	(10YR 3/2)	第11層	黄褐色土	(10YR 5/6)
第4層	黑色土		(10YR 2/1)	第12層	黒褐色土	[灰黄色粒混] (10YR 3/1)
第5層	淡黄色土		(5 YR 8/4)	第13層	灰黃褐色土	(10YR 4/3)
第6層	黒褐色土	[黄色粒混]	(10YR 3/1)	第14層	黑色土	[褐色土混] (10YR 3/2)
第7層	褐色土		(5 YR 4/1)	第15層	灰黄色土	(2.5YR 6/2)
第8層	暗褐色土	[黄色粒混]	(10YR 3/4)			

〔()内は「標準土色誌」(財団法人日本色彩研究所監修)によるものである〕

第20図 挖立1平面断面図

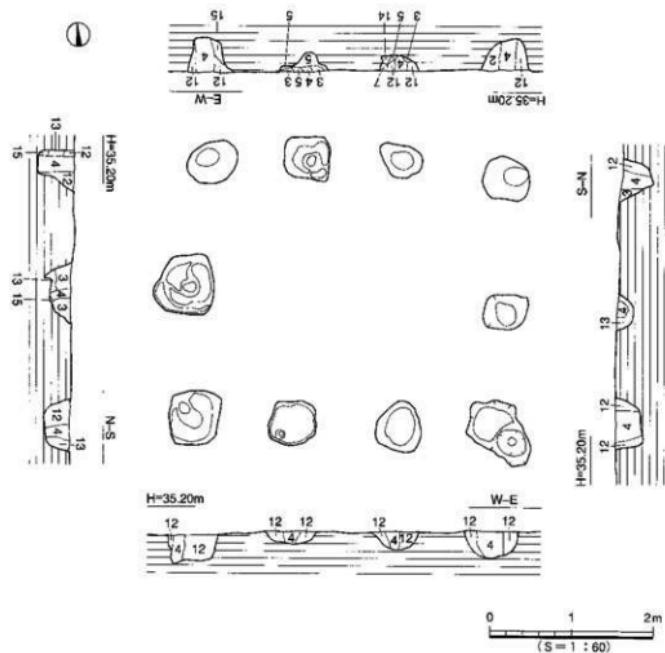


第1層	暗褐色土〔黄色土混〕	(10YR 3/3)	第9層	褐色土	(10YR 4/4)
第2層	黒褐色土	(10YR 3/2)	第10層	浅黄色土	(2.5YR 7/4)
第3層	黒褐色土〔黄色土混〕	(10YR 3/2)	第11層	黄褐色土	(10YR 5/6)
第4層	黑色土	(10YR 2/1)	第12層	黒褐色土〔灰黄色粒混〕	(10YR 3/1)
第5層	淡黄色土	(5YR 8/4)	第13層	灰黄褐色土	(10YR 4/3)
第6層	黒褐色土〔黄色粒混〕	(10YR 3/1)	第14層	黑色土〔褐灰色土混〕	(10YR 3/2)
第7層	褐灰色土	(5YR 4/1)	第15層	灰黄色土	(2.5YR 6/2)
第8層	暗褐色土〔黄色粒混〕	(10YR 3/4)			

〔()内は『標準土色誌』(財団法人日本色彩研究所監修)によるものである。〕

第21図 振立2平面断面図

調査の概要

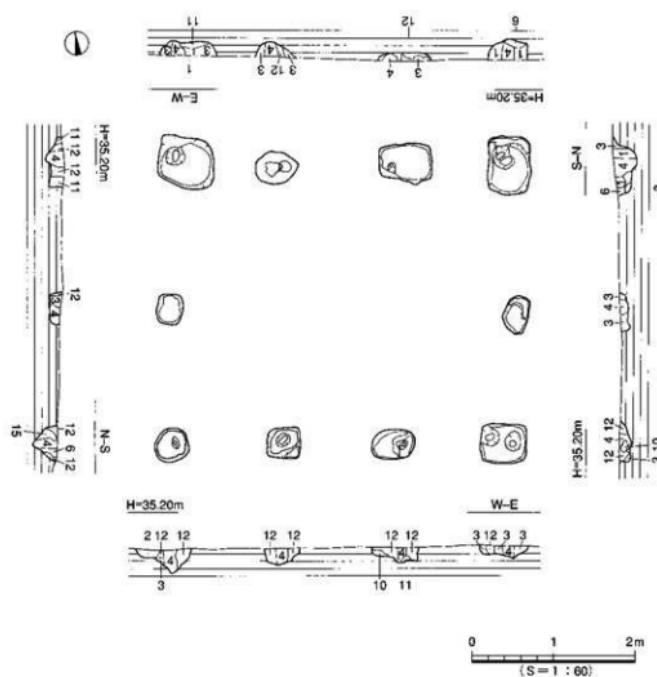


第1層	暗褐色土 [黄色土混] (10YR 3/3)	第9層	褐色土 (10YR 4/4)
第2層	黒褐色土 (10YR 3/2)	第10層	浅黄色土 (2.5YR 7/4)
第3層	黒褐色土 [黄色土混] (10YR 3/2)	第11層	黄褐色土 (10YR 5/6)
第4層	黑色土 (10YR 2/1)	第12層	黒褐色土 [灰黄色粒混] (10YR 3/1)
第5層	淡黄色土 (5YR 8/4)	第13層	灰黄褐色土 (10YR 4/3)
第6層	黒褐色土 [黄色粒混] (10YR 3/1)	第14層	黑色土 [褐色灰色土混] (10YR 3/2)
第7層	褐色土 (5YR 4/1)	第15層	灰黄色土 (2.5YR 6/2)
第8層	暗褐色土 [黄色粒混] (10YR 3/4)		

〔()内は「標準土色帖」(財団法人日本色彩研究所監修)によるものである]

第22図 据立3平面面図

南久木町遺跡

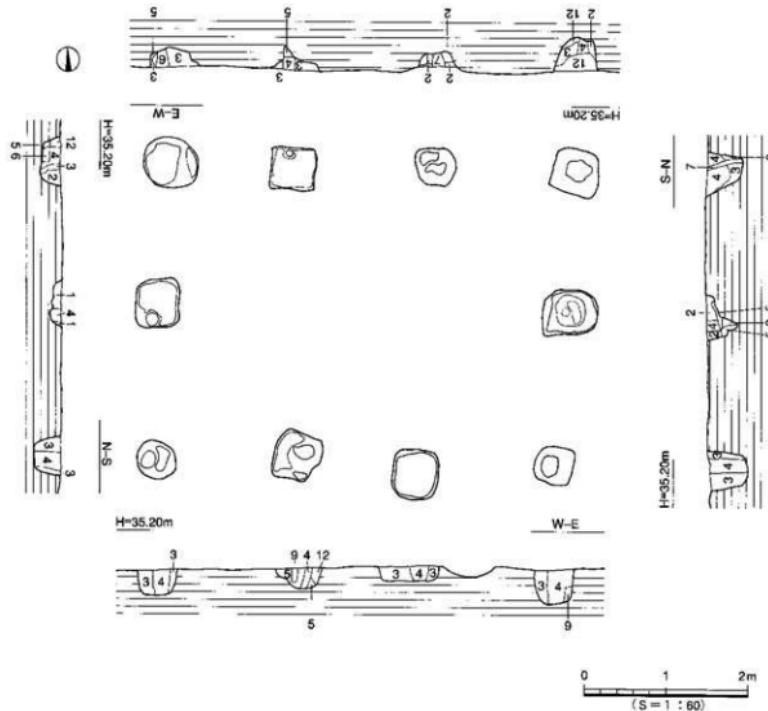


第1層	暗褐色土〔黄色土混〕	(10YR 3/3)	第9層	褐色土	(10YR 4/4)
第2層	黒褐色土	(10YR 3/2)	第10層	浅黄色土	(2.5YR 7/4)
第3層	黒褐色土〔黄色土混〕	(10YR 3/2)	第11層	黄褐色土	(10YR 5/6)
第4層	黒色土	(10YR 2/1)	第12層	黒褐色土〔灰黄色粒混〕	(10YR 3/1)
第5層	淡黄色土	(5 YR 8/4)	第13層	灰黄褐色土	(10YR 4/3)
第6層	黒褐色土〔黄色粒混〕	(10YR 3/1)	第14層	黒色土〔褐灰色土混〕	(10YR 3/2)
第7層	褐灰色土	(5 YR 4/1)	第15層	灰黄色土	(2.5YR 6/2)
第8層	暗褐色土〔黄色粒混〕	(10YR 3/4)			

()内は「標準土色帖」(財團法人日本色彩研究所監修)によるものである。

第23図 挖立4平衡面図

調査の概要

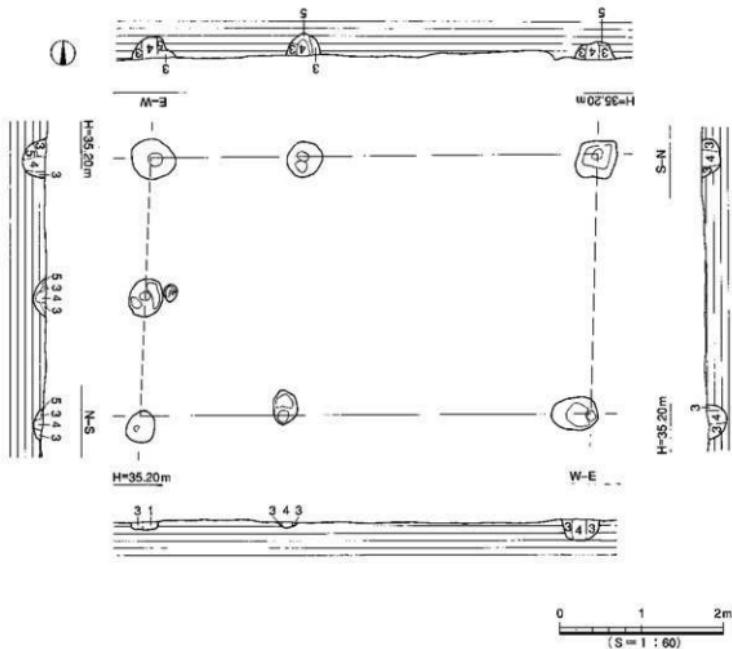


第1層	暗褐色土 [黄色土混] (10YR 3/3)	第9層	褐色土 (10YR 4/4)
第2層	黒褐色土 (10YR 3/2)	第10層	浅黄色土 (2.5YR 7/4)
第3層	黒褐色土 [黄色土混] (10YR 3/2)	第11層	黄褐色土 (10YR 5/6)
第4層	黒色土 (10YR 2/1)	第12層	黒褐色土 [灰黄色粒混] (10YR 3/1)
第5層	淡黄色土 (5YR 8/4)	第13層	灰黄褐色土 (10YR 4/3)
第6層	黒褐色土 [黄色粒混] (10YR 3/1)	第14層	黒色土 [褐灰色土混] (10YR 3/2)
第7層	褐灰色土 (5YR 4/1)	第15層	灰黄色土 (2.5YR 6/2)
第8層	暗褐色土 [黄色粒混] (10YR 3/4)		

〔()内は「標準土色名」(財団法人日本色彩研究所監修)によるものである〕

第24図 捜索5平面図

南久米町遺跡



第1層	暗褐色土 [黄色土混]	(10YR 3/3)	第9層	褐色土	(10YR 4/4)
第2層	黒褐色土	(10YR 3/2)	第10層	浅黄色土	(2.5YR 7/4)
第3層	黒褐色土 [黄色土混]	(10YR 3/2)	第11層	黄褐色土	(10YR 5/6)
第4層	黒色土	(10YR 2/1)	第12層	黒褐色土 [灰黄色粒混]	(10YR 3/1)
第5層	淡黄色土	(5 YR 8/4)	第13層	灰黄褐色土	(10YR 4/3)
第6層	黒褐色土 [黄色粒混]	(10YR 3/1)	第14層	黒色土 [褐灰色土混]	(10YR 3/2)
第7層	褐灰色土	(5 YR 4/1)	第15層	灰黄色土	(2.5YR 6/2)
第8層	暗褐色土 [黄色粒混]	(10YR 3/4)			

[()内は「標準土色帖」(財団法人日本色彩研究所監修)によるものである]

第25図 据立6平面面図

〔出土遺物〕(第24図 図版10)

須恵器坏身(5)：断面「コ」字状の高台は、やや外方向にふんばり内端部が接する。

(2) その他の遺構と遺物

溝状遺構

SD1 (第17図)

調査区のはば中央西縁より南南東に延びる幅約80cm、深さ10~20cmを測り、断面が「U」字状を呈する溝である。埋土は、やや灰色を帯びた黒褐色である。基底面は、北から南に向かって緩やかな傾斜をなし、その比高差は20cmである。北に行くに従って溝は浅く南端で25cm、北端で5cmの埋土となっている。また、溝は掘立3の西からSD2を切り、掘立4の南西隅から掘立5のはば中央を横切っている。時期については出土した土師皿からしておよそ半世紀掘立柱建物群に先行するものと考えられる。

遺物は、ごく僅かであるが、掘立5より南へ1mの溝基底面より、土師皿6.(第24図,図版10)のほぼ完形品を検出している。底部に回転糸切りと板状痕が見られ、口縁部は外傾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くなっている。

SD2 (第17図)

調査区中央よりやや北方を東西に延びる幅約1~1.5m、深さ5~10cmを測り、断面が皿状を呈する溝である。埋土は黒褐色であるが、開墾による削平が激しく遺存状況は良くなかった。基底面は、東から西に向かって緩やかな傾斜をなし、その比高差は約5cmである。溝は掘立1・2の南側を通り、掘立3・4の間を経て、SD1に切られ西流している。

遺物は、土師器の碎片がごく僅か出土しただけであり、時期設定は困難であるが、SD1との埋土の比較などから推して、SD1より多少遅るもの、ほぼ同時期のものと考えられる。

土坑状遺構

SK1 (第17図)

調査区のはば中央よりやや北方寄りに位置し、掘立2内に存在する。平面形は南北幅195cm(床面160cm)、東西幅104cm(床面90cm)を測る。断面は皿状を呈し、深さ12~14cmで上部は削平されている。埋土は灰褐色土の中に黄色土及び黒褐色土がブロック状に混在していた。

遺物は、出土していない。

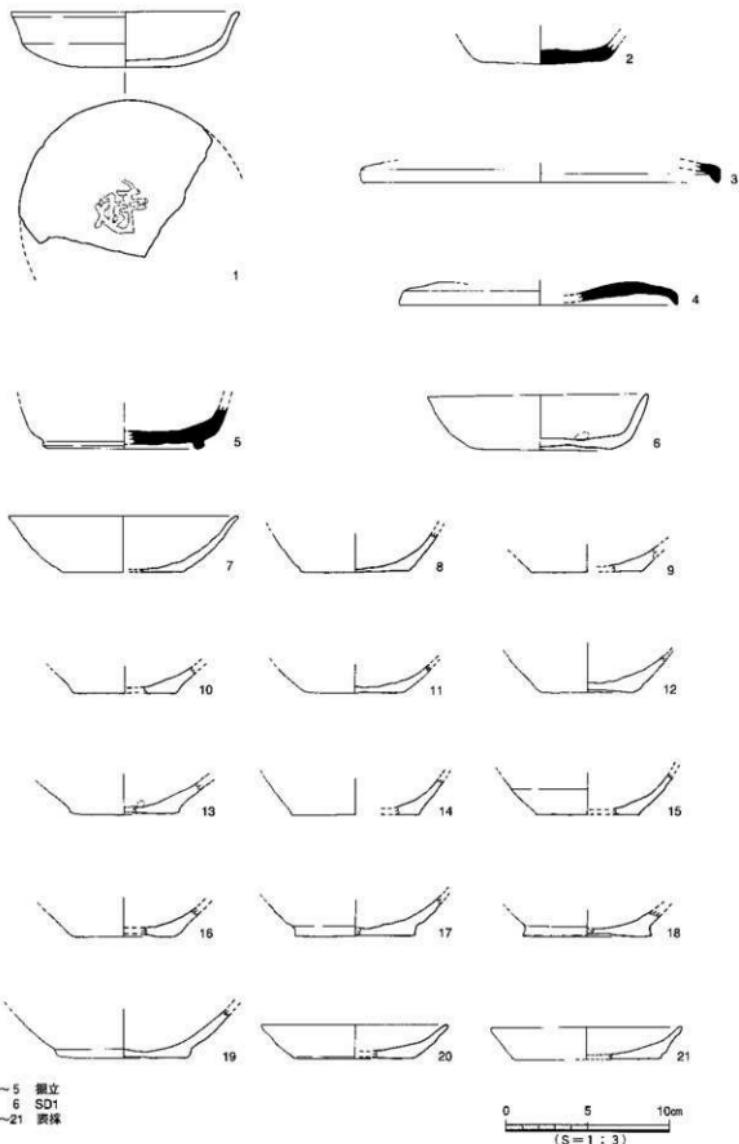
* SK1以外にも数基、土坑状遺構を確認したが、すべて倒木痕と思われる。

表掲の出土遺物

土師器 (第24・25図 図版10)

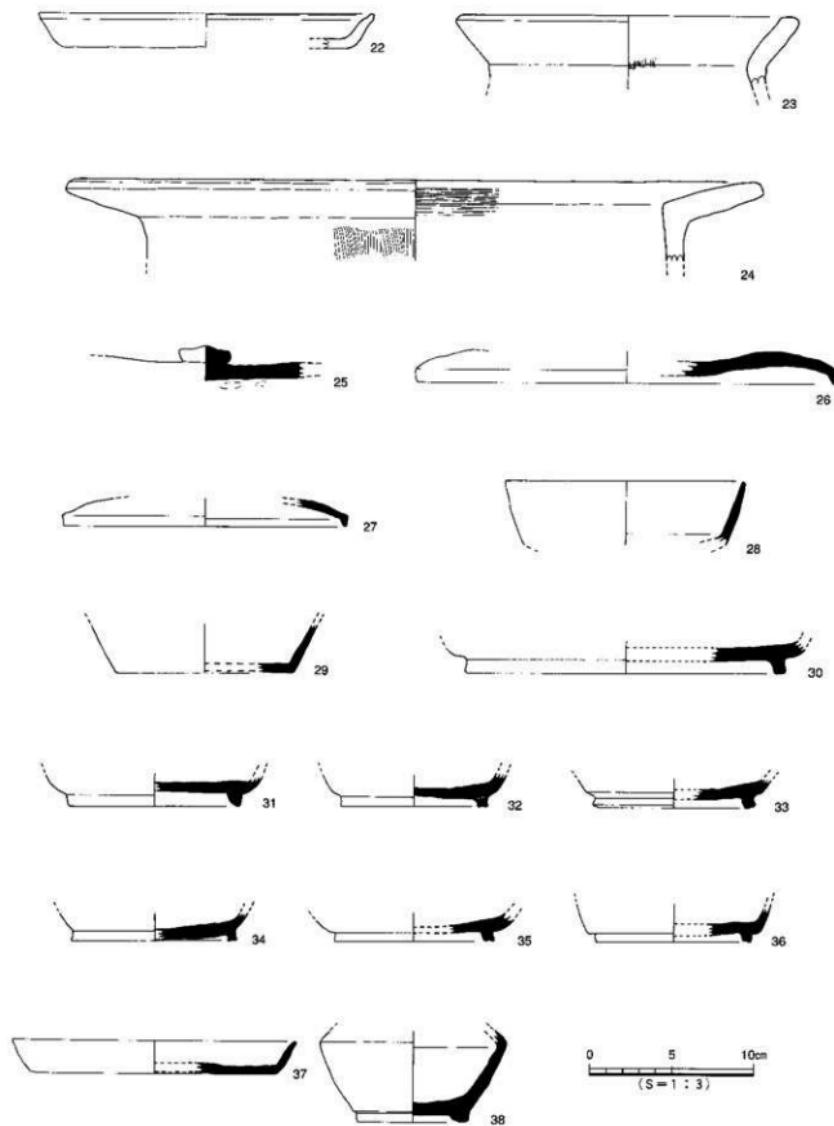
7~19は坏である。7は口縁端部を外反させ細くなっている。8は内傾気味に立ち上がり、底部に板状痕が見られる。9は外傾する立ち上がりと思われる。10、11は内面に強いナデ調整が行われている。12~16は5.7cm~6.8cmを測る底部で、内傾する立ち上がりと思われる。17~18は円盤高台の底部片である。19は底径8.0cmを測る。円盤高台の底部より、内傾しながら立ち上がる口縁部と思われる。

南久米町遺跡



第26図 挖立・SD1・表採出土遺物実測図

調査の概要



第27図 表探出土遺物実測図

20~22は皿である。20は外面に強いナデにより稜が見られ、口縁端部は丸く仕上げられている。21の口縁部はナデが行われ、僅かに外反し端部は丸い。22の口縁部は外傾し口縁端部手前で外反する。口縁部内面に段が見られる。

23、24は堺の口頸部片である。23の口端面は上方を向く。内外面に横ナデからナデの調整が施されている。24は口縁部が水平気味に折れ曲がり、頸部内面に稜が見られ、口縁端部はやや丸みを持つ「コ」の字状である。

須恵器（第25図 図版11）

25~27は壺蓋である。25は水平な天井部に扁平な擬宝珠状の摘みを持つ。26は口径25.2cmを測る大型品である。天井部は歪み、口縁端部は短く屈曲し尖り気味である。27の口縁部は短く屈曲し、端部は丸く、口縁部外面に凹面が見られる。

28~36は壺身である。28は外傾する立ち上がりの口縁部片である。口縁部は尖り気味に丸く仕上げられている。29は水平な底部より外傾する立ち上がりを持つ。30は底径19.4cmを測る大型品である。高台付の端面は水平に接し、凹面を有する。31は高台付の脚端面が内傾する。32、35は高台付の脚端面が水平に接し、やや凹面を成す。33は高台付の底部で、脚部が外傾し、やや凹む面を持つ。34は高台が壺部の端部付近に付き、端面は水平に接する。36は高台付の脚端面が内傾し、凹面を持つ。

37は皿である。口縁部は外傾して外反し、端部は尖り気味に丸い。

38は壺の底部から胴部にかけての残存である。削り出しの底部より、外傾して立ち上がり、胴部中位で最大径を測り、稜を持ち、内側に屈曲する。

4. 小 結

本調査では、古代から中世にかけての遺構と遺物を確認した。

本遺跡は、來住台地に広がる久米官衙遺跡群の北約500mの距離にあり、これまで調査例の希薄な地域に所在している。今回検出された掘立柱建物群は、2間×3間の建物を基本として、ほぼ東西平行に並んで建てられており、規則性を持った建物群である。特に、久米高畠遺跡群から確認されている官衙遺跡との関連性を示唆する墨書き器「時」の発見は、役所関連の遺跡が堀越川北岸にも及んでいることを知る好資料として捉えることができよう。柱痕内上面から出土した「時」と記された土師器壺は、8世紀後半に位置付けることができる。「時」という文字から、この遺跡には時刻を司る役所があったことが想像されるが、それはこれからの調査を待たなければならない。

今後の調査においても、当地域の重要性を再確認し、慎重なる調査をする必要があると思われる。

[文献]

- | | | |
|----------|------|--|
| 西尾 幸剛 | 1986 | 「北久米淨蓮寺遺跡」『愛媛県史 資料編』 愛媛県史編纂委員会 |
| 森 光晴(ほか) | | 『松山市史料集 第2巻』 松山市史編纂委員会 |
| 森 光晴(ほか) | 1986 | 『愛媛県史 資料編 考古』 愛媛県史編纂委員会 |
| 小笠原好彦 | 1979 | 『來住廃寺』 松山市教育委員会 |
| 栗田 茂敏 | 1987 | 『南久米片廻り遺跡』
(松山市埋蔵文化財調査年報1) 松山市教育委員会 |

遺物観察表

表5 遺構内出土遺物観察表 土製品

番号	基準	法量(cm)	形態・施文	調査		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	土師 皿	口径(14.0) 底径(6.0) 残高 3.4	口縁部下端で外反する。 底部に時の文字。	①ヨコナデ ②ナゲ	③ヨコナデ ④ナゲ	褐色 にぶい黄褐色	長 (1~3) ○	掘立 1	10
2	环身	底径(8.4) 残高 1.6	外輪する立ち上がりか。	ナデ	当軸ナデーナデ	淡青 灰白	密 (長) ○	掘立 2	10
3	环蓋	底径(21.8) 残高 1.2	口縁端部は下方に折れ曲がる。	回転ナデ	回転ナデ	淡黄 灰白	密 (長) ○	掘立 3 自然乾	10
4	环蓋	口径(17.0) 残高 1.4	口縁端部は尖り気味に丸い。	①回転ヘラケズリ ②回転ナデ	回転ナデーナデ	灰色 灰色	長 (1~2) ○	掘立 5	10
5	本身	底径(9.9) 残高 2.7	やや外方向にふんばる高台。	回転ナデ	回転ナデ	灰白 灰白	相模 (長) ○	掘立 7	10
6	土師 皿	口径 13.5 底径 8.8 残高 3.5	底部より外側気味に立ち上がる。	ヨコナデ	③ヨコナデ ④ナゲ	褐色 灰白	相模 (長) ○	SD 1	10

表6 表探出土遺物観察表 土製品

番号	基準	法量(cm)	形態・施文	調査		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
7	土師 片	口径(14.0) 底径(7.4) 残高 3.4	口縁端部を外反させ底くする。	①ヨコナデーナデ ②ナゲ	ヨコナデーナデ	褐色 淡青灰	密 (長) ○		
8	土師 片	底径 6.7 残高 2.4	内輪気味に立ち上がる。	①ヨコナデ ②ヨコナデーナデ	ヨコナデーナデ	にぶい青 色	密 ○		
9	土師 片	底径(6.8) 残高 1.7	外輪する立ち上がりか。	①ヨコナデ ②ナゲ	ヨコナデ	褐 赤橙	密 ○		
10	土師 片	底径(6.3) 残高 1.7	内外面に強いナデ。	①ヨコナデ ②ヨコナデ(一部ハケ)	ヨコナデ	褐色 明赤橙	密 (長) ○		
11	土師 片	底径(6.3) 残高 1.8	内面に強いナデあり。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄褐 淡黄褐	密 (長) ○		10
12	土師 片	底径(5.7) 残高 2.3	内輪気味に立ち上がる。	ヨコナデ (一部ナゲ)	ヨコナデ	にぶい青 にぶい青	密 (長) ○		
13	土師 片	底径(6.4) 残高(2.0)	底部が肥厚される。	①ヨコナデ ②ナゲ	ヨコナデ 指摩え	にぶい青 淡黄褐	密 (長) ○		
14	土師 片	底径(6.8) 残高 2.2	内輪気味に立ち上がる。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐 褐	密 ○		
15	土師 片	底径(6.3) 残高 2.6	内輪する立ち上がりか。	①ヨコナデ ②ナゲ(一部ハケ)	ヨコナデーナデ	褐 淡黄褐	密 (長) ○		10
16	土師 片	底径(6.2) 残高 1.8	内輪する立ち上がりか。	ヨコナデ	ナデ	褐 褐	相模 (長) ○		
17	土師 片	底径(6.4) 残高 2.5	円盤高台の裏板。	①ヨコナデ ②ナゲ	ヨコナデーナデ	淡黄褐 淡黄褐	密 ○		10
18	土師 片	底径(6.9) 残高 1.6	内輪高台の裏板。	ナデ	腐渋の有無	にぶい青 淡黄褐	密 ○		10

表探出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調査型		色調(外面)	釉土焼成	備考	図版
				外面	内面				
19	土師杯	底径 8.0 残高 1.6	円盤高台の底部より内側しながら立ち上がる口縁部。	調査の為不剖	唇端の為不剖 (ココナデ)	黄褐色 青褐色	青 (長)○		
20	土師皿	L-皿(11.4) 底径(7.6) 残高 2.1	外周に鋸いナデによる棱が見られる。	②ココナデ→ナデ ③ココナデ	②ココナデ ③ナデ	刷毛茶 褐色	青 (長)○		
21	土師皿	L-皿(11.7) 底径(8.0) 残高 1.9	口縁部はナデによりわざかに外反する。	①ココナデ→ナデ ②ナデ	ココナデ→ナデ	青 青	青 (1~2) ○	10	
22	土師皿	L-皿(20.1) 底径(17.2) 残高 2.1	口縁部は外傾し、端部手前で外反する。 縁部内面に窪みが見られる。	①ココナデ→ナデ ②ナデ	ココナデ→ナデ	明赤褐色 明赤褐色	青 (長)○		
23	甕	口徑(20.4) 残高 4.5	口縁傾向は上方に向く。	ココナデ→ナデ	①ココナデ・ナデ ②ココナデ→ハナケ	に赤い赤褐色 無色	石長 (1~3) ○		
24	甕	口徑(42.4) 残高 4.9	縁部内面に鋸い棱を持つ。	③ココナデ ④翼ハケ(7本cm)	①ホキ・ミンテ ②ココナデ	青 に赤い柱	石長 (1~3) ○		
25	壺蓋	2.6 残高 2.1	扇平な擬て球状のつさみ。	⑤底板ナデ・ナデ ⑥ナデ	ナデ	灰色 灰色	青 (1~3) ○	11	
26	壺蓋	口徑(26.2) 残高 2.6	口縁周部は尖り気味に丸い。	⑦回転ナデ ⑧回転ナデ・ナデ	②ナデ ⑨回転ナデ	灰色 灰色	藍度 (長)○	11	
27	壺蓋	口徑(17.0) 残高 1.7	L1係外側に凹痕が見られる。	回転ココナデ	回転ナデ	灰白 青灰	長石 (1) ○	11	
28	壺身	口徑(11.5) 残高 3.9	外傾する立ち上がりの口縁部は尖り氣味に丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	青 (石長) ○	11	
29	壺身	底径(10.6) 残高 2.6	外傾する立ち上がりがりか。	唇端の為不剖	唇端の為不明	淡黃 淡黃	青 (長) ○	11	
30	壺身	底径(18.4) 残高 2.0	高台付。脚端部は水平に接しやや内む。	唇端の為不剖	唇端の為不明	灰白 淡黃	青 ○	11	
31	壺身	底径(10.1) 残高 1.9	高台付。脚端部は内傾する。	回転ナデ・ナデ 回転ナデ→ナデ	回転ナデ	青灰 青灰	藍度 (長) ○	11	
32	壺身	底径(8.9) 残高 2.0	高台付。脚端部は水平に接しやや内む。	回転ナデ	回転ナデ	灰白 オリーブ灰	青 (長) ○	11	
33	环身	底径(10.0) 残高 1.8	脚端部外傾しやや内む。	④回転ナデ ⑤回転ナデ・ナデ	回転ナデ	淡黃 淡黃	青 (長) ○	11	
34	环身	底径(9.9) 残高 1.7	高台付。脚端部は水平。	回転ナデ	回転ナデ	青灰 青灰	青 (長) ○	12	
35	环身	底径(9.6) 残高 1.7	高台付。脚端部は水平で、凹みをもつ。	回転ナデ	回転ナデ	モリーブ灰 灰白	青 (長) ○	11	
36	环身	底径(9.5) 残高 2.3	高台付。脚端部は内傾し、凹みをもつ。	①回転ナデ ②ナデ	回転ナデ	に赤い赤褐色 赤褐色	青 (長) ○	11	
37	皿	口徑(20.1) 底径(17.2) 残高 2.1	外傾し外反する口縁部の腹部は、尖り気味に丸い。	③回転ナデ ④回転ナデ→ナデ	③回転ナデ ④ナデ	灰白 灰白	青 (長) ○	11	
38	森	底径 6.6 残高 5.5	高台付。脚部中位で棱を持ち強く屈曲する。	回転ナデ	回転ナデ	灰白 灰白	青 (長) ○	11	

第4章

南久米町遺跡

—2・3次調査地—

第4章 南久米町遺跡2・3次調査地

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

平成3（1991）年10月29日、武智春江氏より松山市教育委員会文化教育課（以下、市教委）に対し、武智氏所有の松山市南久米町408-4・5・6における宅地開発にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが提出された。

調査地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「No126 高畠遺物包含地」内にあり、松山平野北東部における平井谷地域を水源とする堀越川の北岸、標高34.8mに立地している。国指定史蹟来住廃寺跡は、当地より南南東600mに位置する。

調査地に隣接する来住台地には、官衙関連遺構や古代集落で知られる久米高畠遺跡群、来住遺跡群など有数の遺跡地帯のあることが判明しているが、堀越川北岸の調査地周辺では、僅かに古墳期から中世にかけての遺構・遺物を検出した南久米北野遺跡1・2次調査地を知るのみであった。しかし、近年の調査によって古墳時代後期から古代、さらには中・近世に跨がる遺跡がぞくぞくと報告されている。

これらのことから、当該地における埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲やその性格を確認するため、平成3年11月26日から4日間、市教委指導のもと、財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センター）が試掘調査を実施した。その結果、耕作土直下より遺物包含層を



第28図 調査地位置図 (S = 1 : 4,000)

検出、3層に分層できる包含層からは古代から中世の遺物（須恵器片、瓦、土師器片）を出土した。遺構については、黄白色シルト面において柱穴16基、土坑1基を検出した。これにより、古代から中世にかけての遺構群が存在することが明確となった。この結果を受けて市教委と埋蔵文化財センターと申請人の3者により遺跡の取り扱いについて協議を行い、宅地開発によって失われる遺構・遺物について、記録保存のために発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、古代から中世にかけての当該地及び周辺地域の集落構造解明を主目的とし、埋蔵文化財センターが主体となり、武智春江氏の協力のもと平成4（1992）年8月1日に開始した。

なお、今回の調査は市教委の指導により、国庫補助事業と地権者負担による事業の二分割による調査を実施することとなった。調査地の北側部分288m²を2次調査地として、南側部分416m²を3次調査地（国庫補助）として調査を実施した。

本報告書では2・3次調査において検出した遺構・遺物等が重複する場合があるため、ふたつの調査結果をまとめて報告する。

（2）調査組織

調査地 松山市南久米町408番4・5・6

遺跡名 南久米町遺跡 2・3次調査地

調査期間 平成4（1992）年5月28日～同年8月7日

調査面積 704m²

調査委託 武智 春江

調査担当 調査主任 田城 武志

調査員 高尾 和長

調査作業員 岩本 憲・山邊 進也・志賀 夏行・原田 英則・重松 恒彦・

田中 国広・田中 熊・二宮 和見・西田 竜一・松友 利夫・

仙波 千秋・仙波ミリ子・金子 育代・高尾 久子・宮田 里美・

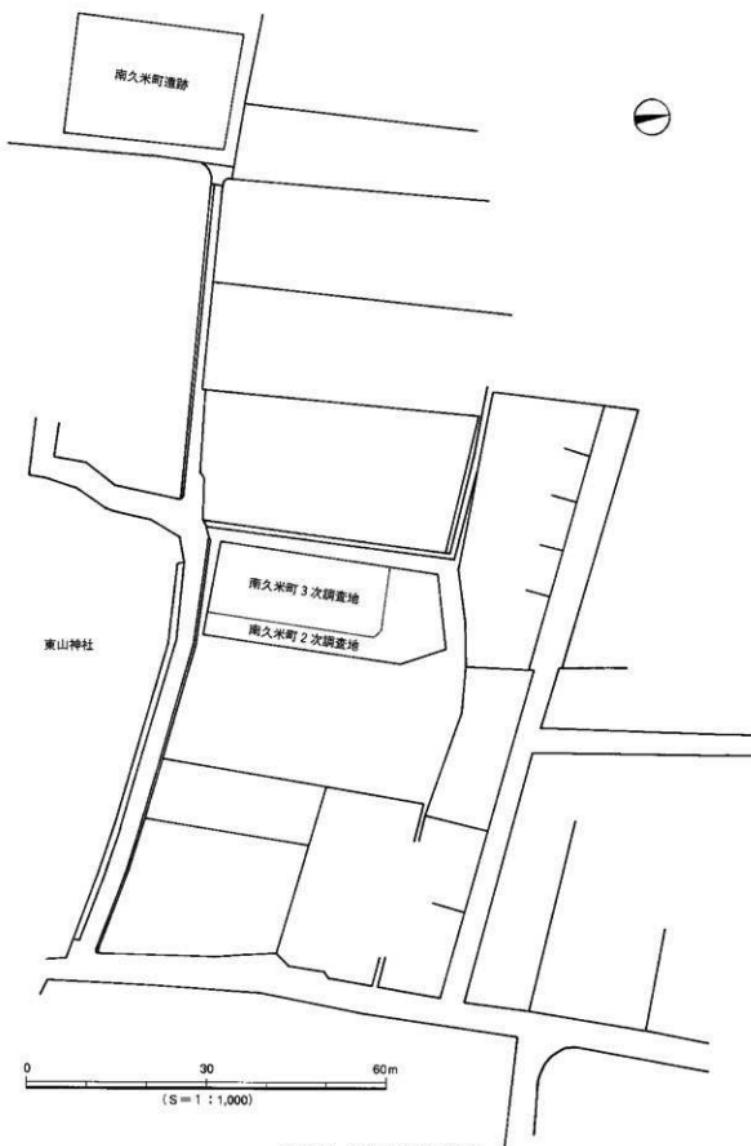
相原 勇・重松 吉雄・波多野恭久・宮本 健吉・宮脇 和人・

宮脇 武勇・森 隆・八木 幸徳



発掘作業風景（南東より）

調査の経過



2. 層位 (第29・30・31図)

本遺跡は、松山平野南西部にそびえる後期白亜紀和泉層群に覆われた分岐山塊の南麓にあり、また堀越川右岸の冲積世海浜・川床の堆積物層と洪積世段丘・旧期扇状地堆積物層のほぼ境界線上に立地する。

本調査地の主な基本層位は、第1層耕作土、第2層灰白色土（床土）、第3層暗褐色土、第4層黒褐色土、第5層淡黄色土（地山）である。調査地の全層位は、27層に分割され、第29・30・31図に示すとおりである。以下、主たる土層について記述する。

第1層—近現代の農耕に伴う客土で、地表下15~20cmまで開墾が行われている。

第2層—農耕に伴う床土である。陶磁器片が数点出土している。

第3層—暗褐色土で調査区のほぼ全域で見られる。

第4層—調査区のほぼ全域で見られる黒褐色土である。南北両壁では30~50cm、中央部においては5~10cmを残し、土師器、須恵器の細片を多数包含している。

第5層—淡黄色土の地山と呼ばれる層である。上面比高差は、調査区北東部が最も高く、漸次南部に向けて緩傾斜している。

第10層—遺構埋土、黒色土である。

第13層—灰黄色の粘土塊をブロック状に包含する硬質の黒褐色土である。

第16層—灰黄色の粘土塊をブロック状に包含する硬質の暗褐色土である。

第18層—明褐色の粘土塊をブロック状に包含する硬質の褐灰色土である。

第22層—浅黄色の粘土塊をブロック状に包含する灰褐色土である。

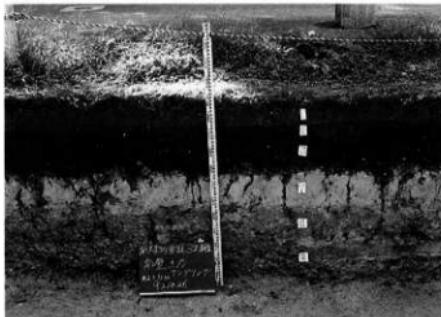
第23層—浅黄色の粘土塊をブロック状に包含し、硬質で粘質の黒褐色土である。

第27層—直径3~5cmの大いじりと細砂を含む灰白色土である。

遺構は、第5層上面にて検出された。掘立柱建物跡2棟、溝状遺構4条、柱穴状遺構143基、土坑状遺構2基、性格不明遺構1基等である。

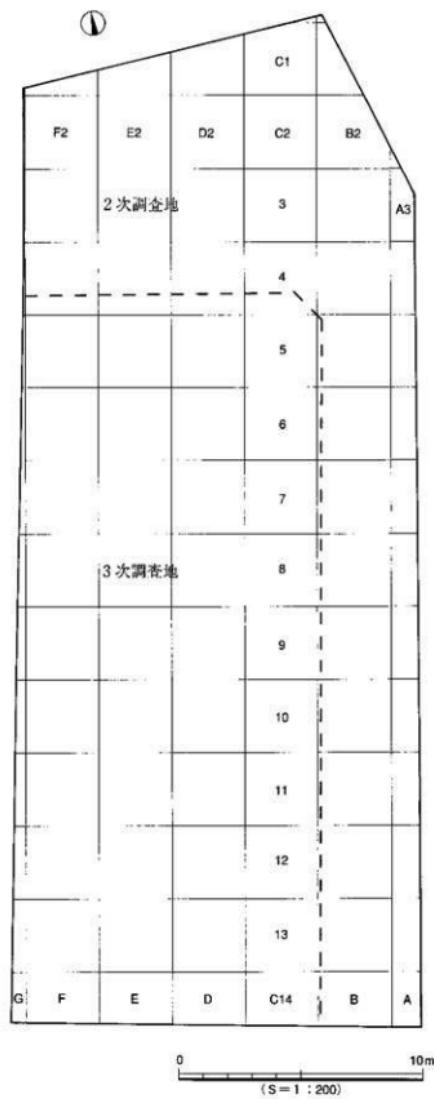
出土遺物、検出遺構の特徴から判断して、第4層は古代から中世にかけて堆積した遺物包含層、また第13・16・18・22・23層は9世紀以降に何らかの目的で造成されたものと思われる。

なお、調査にあたり調査区内を4m四方のグリットに分けた。呼称名は第28図に記す。



発掘作業風景（南東より）

層 位

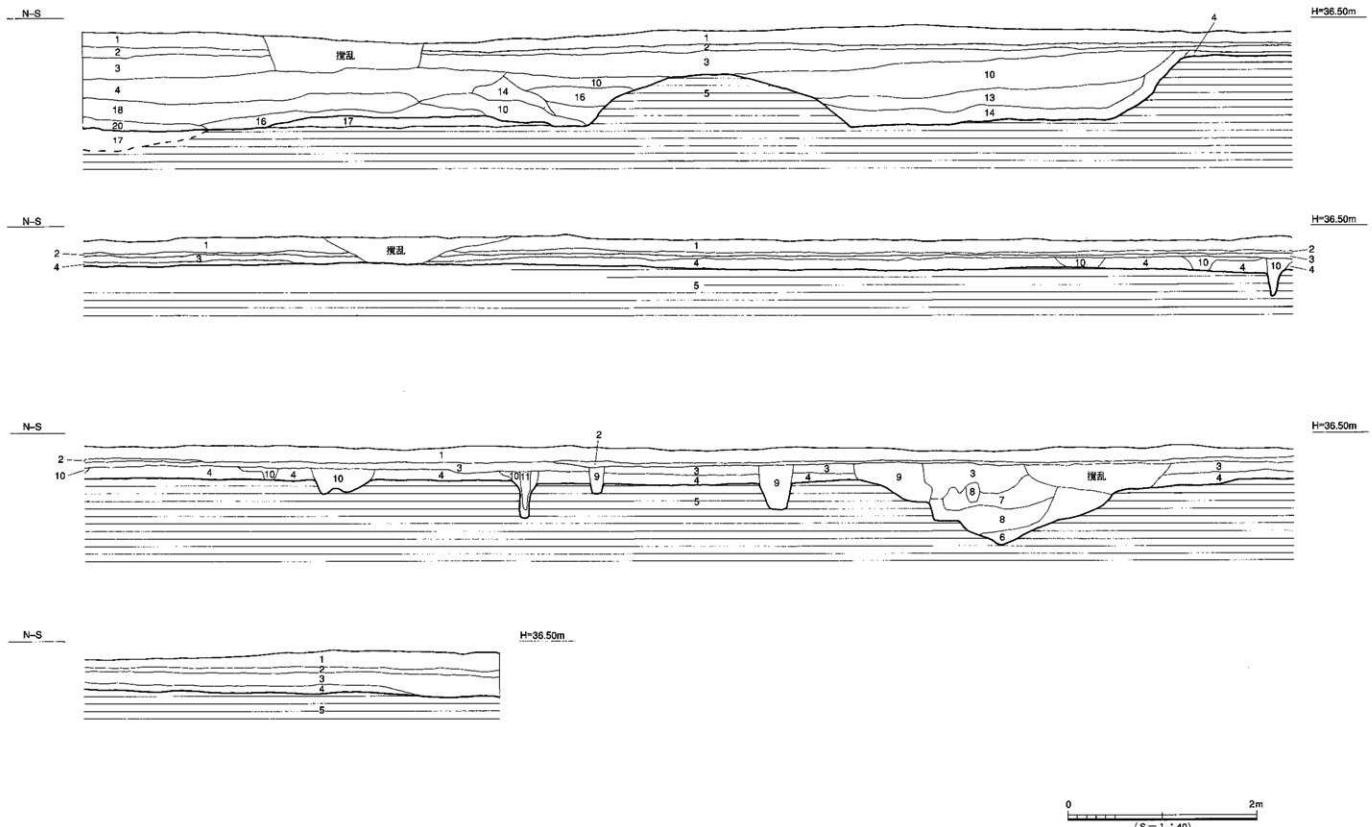


第30図 調査地区割図

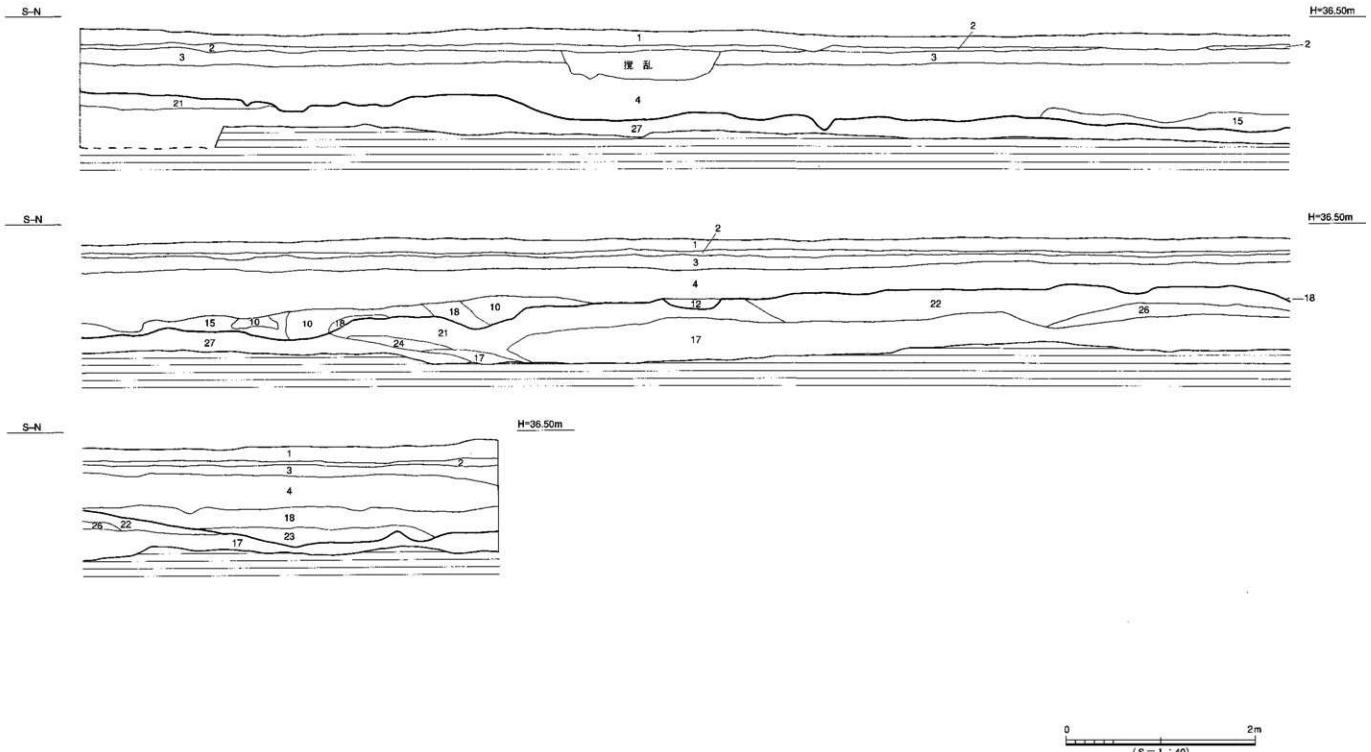
〈 基 本 層 位 〉

第1層	耕作土	
第2層	灰白色土	〔床土〕
第3層	暗褐色土	(10YR 3/4)
第4層	黑褐色土	(10YR 2/2)
第5層	淡黄色土	(2.5Y 8/4)
第6層	浅黄色土	(2.5Y 7/3)
第7層	灰黄褐色土	(10YR 5/2)
第8層	明黄褐色土	(2.5Y 6/6)
第9層	黄灰色土	(2.5Y 4/1)
第10層	黑色土	(10YR 2/1)
第11層	赤黑色土	(2.5YR 2/1)
第12層	黑褐色土	(10YR 3/2)
第13層	黑褐色土	〔灰黄色粒混〕 (2.5Y3/1+2.5Y6/2)
第14層	暗黄灰色土	〔灰黄色粒混〕 (2.5Y5/2+2.5Y6/2)
第15層	暗褐色土	(7.5YR 3/3)
第16層	暗褐色土	〔灰黄色粒混〕 (2.5Y5/2+2.5Y6/2)
第17層	褐灰色土	(7.5YR 6/1)
第18層	褐灰色土	〔明褐色粒混〕 (7.5YR4/1+7.5YR5/8)
第19層	褐灰色土	〔砾混〕 (7.5YR 5/1)
第20層	暗青灰色土	(5Y 3/1)
第21層	明褐色砂	(7.5YR 7/1)
第22層	灰褐色土	〔浅黄色粒混〕 (7.5YR 4/2+2.5Y7/3)
第23層	黑褐色土	〔浅黄色粒混〕 (5YR 2/1+2.5Y7/4)
第24層	黄色土	(2.5Y 7/8)
第25層	赤灰色土	(7.5R 6/1)
第26層	灰白色土	〔砂質〕 (5Y 8/2)
第27層	灰白色土	〔砂砾混〕 (5Y 8/2)

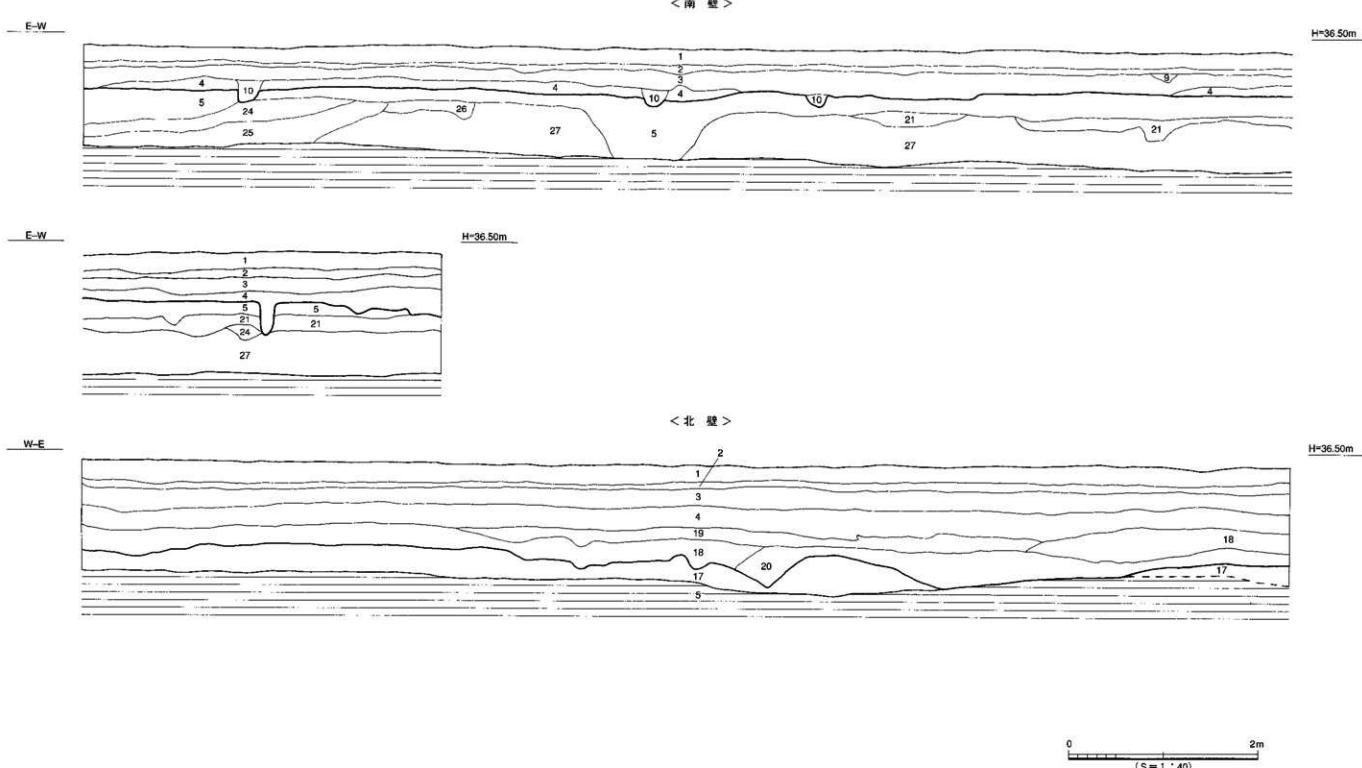
〔() 内は「標準十色帖」(財団法人日本色彩研究所監修)によるものである〕



第31図 東壁土層断面図

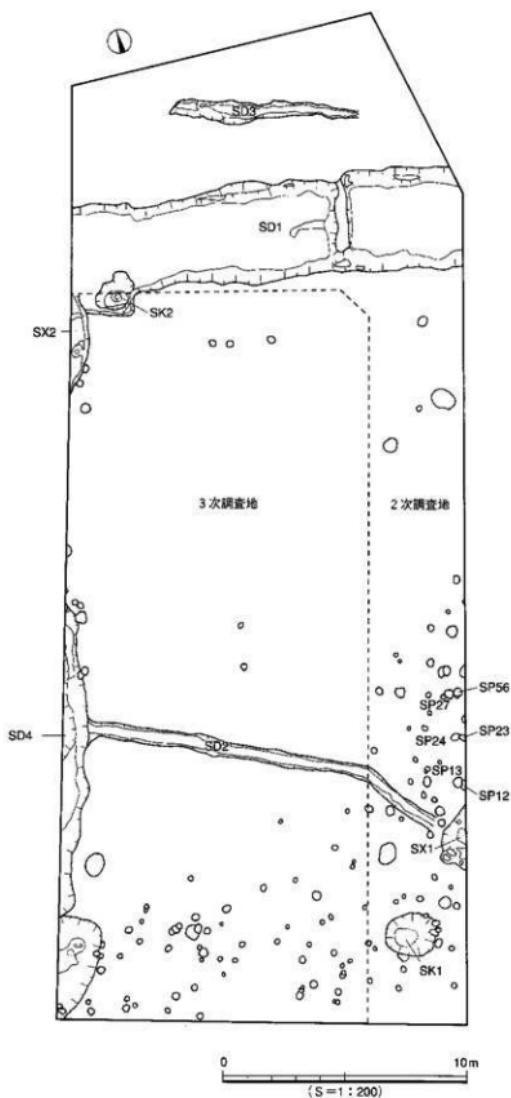


第32図 西壁土層断面図



第33図 南・北壁土層断面図

調査の概要



第34図 造構配置図

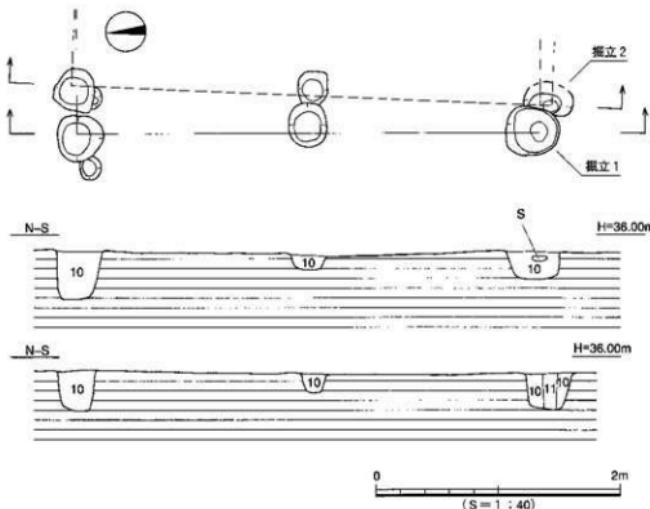
3. 調査の概要 (遺構と遺物)

本調査では、古墳時代から中世にかけての遺構及び遺物を検出した。今回確認された遺構は、掘立柱建物址2棟、溝状遺構4条、ピット状遺構143基、土坑状遺構3基、性格不明遺構1基、遺物は土師器皿8点、鉢3点、土師質器台脚部1点、須恵器宝珠つまみ付き蓋坏1点等であった。検出された遺構は、表掲された遺物を含め、遺構中から出土した遺物の特徴から、9世紀から13世紀のものである。なお、遺物番号は調査の都合上、2次調査が1~39・58、3次調査が40~57をそれぞれ付記した。

(1) 掘立柱建物址 (第32・33図)

本調査において確認された建物址は2棟である。掘立1は、掘立2の建て替えによるものと考えられるが、部分検出のため詳細は不明である。

掘立1 調査区南東部端において検出した。平面形は、南北軸によりN 12°30' E 扱っており、東西軸を長軸とする長方形と考えられる。梁行2間(380cm)、桁行は東側調査区外へと延びているため不明である。梁部の柱痕間隔は1間190~195cmを測る。柱穴の掘方プランは直径約30~45cmの円形を呈し、柱痕の直径12cm、深さ30~40cmを測る。埋土は、柱痕部が赤褐色土、その周りには黒色土を配していた。建物南東隅の柱穴には、柱痕部中央部に直径25cmの円柱形の基底石が敷かれている。建物址の時期については、建物南西隅の柱穴より唐銭「開元通寶」(第43図・図版16)と土師器皿片が出土しており、その特徴から9~11世紀頃の遺宮と考えられる。



第35図 掘立1・2 平断面図

掘立 2 調査区南東部端において検出した。平面形は、南北軸により N13°30'E 振っており、東西軸を長軸とする長方形と考えられる。梁行 2 間 (385cm)、桁行は東側調査区外へと延びているため不明である。梁部の柱痕間隔は 1 間 190~195cm を測る。柱穴の掘方プランは直径約 25~45cm の円形を呈し、柱痕の直径 12cm、深さ 30~40cm を測る。覆土は、柱痕部が赤黒色上で、その周りには黒褐色土を配していた。

建物址の時期については、出土遺物はみられないものの、柱穴検出の切り合い状況から掘立 1 は掘立 2 の建替えによるものと推察され、掘立 1 に先行する建物と考えられる。



(2) 溝状遺構 (第32図)

本調査において確認された溝は 4 条である。2 次調査地において 3 条、3 次調査地においては 2 次調査で検出された溝 S D 2 の延長部を含め 2 条を検出した。

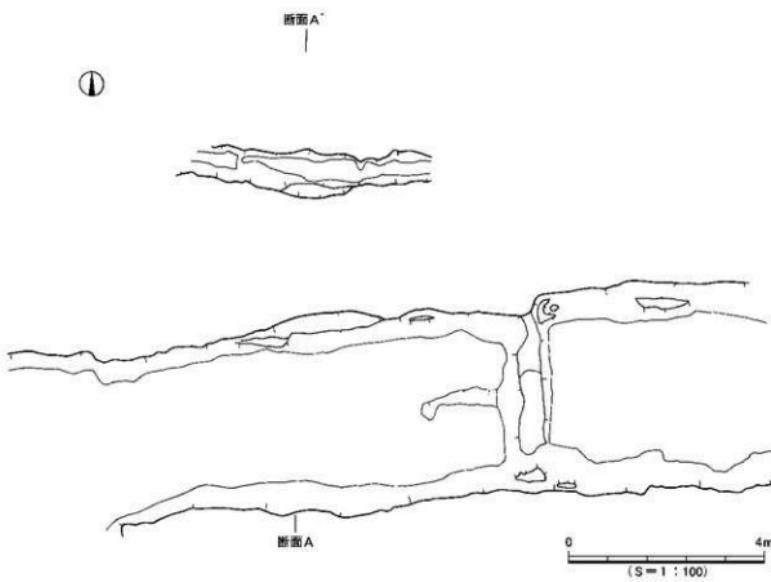
S D 1 (第34・35図)

調査区北部において、東西方向に延び、調査区外へと続いている。幅約 450cm、深さ 60~90cm、延長 16m を測り、断面形は概してレンズ状を呈する溝である。埋土は、上層にて黒褐色土に灰黄色粘土塊を、下層には暗黃灰色土に灰黄色粘土塊を粒状に包含している。溝底面は、東から西に向かって緩やかな傾斜をなし、その比高差は 2.5cm、西流する溝と考えられる。

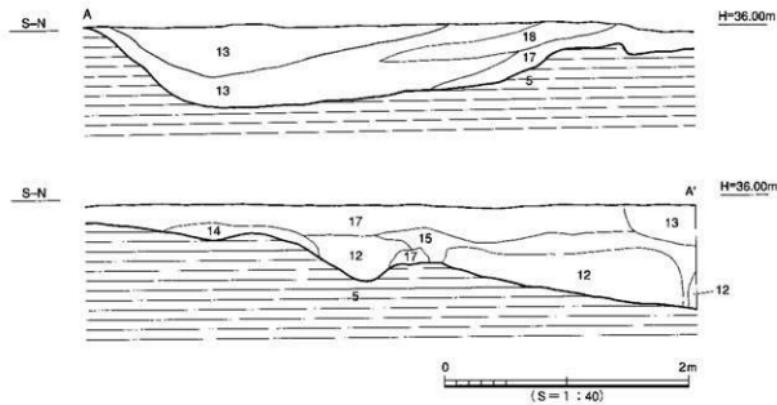
遺物は、埋土上層より備前焼の大甕底部片、東播系須恵器の鉢口縁部片等を、下層からは須恵器坏蓋の摘み部や土師器の皿等の破片が出土している。

時期については、最下層から 9~10 世紀代の特徴を持つ須恵器壺や土師器皿等を検出しており、この時期、乃至は多少遡る時期の造営と考えられる。

性格は、掘立 1・2 を含む集落との関連、或いは南側に隣接する古墳があったと伝えられる東山神社との関連性も考えられるため、今後の調査成果を待ちたい。



第36図 SD 1 平面図



第37図 SD1土層断面図

調査の概要

【出土遺物】(第37図 図版15)

1～7は土師器の皿。1～5の底部に回転糸切り痕が残る。6は底部から口縁部にかけて遺存しており、底部より内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられている。7は口径6.5cm、底径3.8cm、器高1.1cmを測る小型品で、回転糸切り痕の残る底部より内湾気味に立ち上がり、口縁部は丸味を帯びている。8は須恵器壺蓋の中央部が凹む滴み部である。9は高台付の須恵器壺と思われ、脚端部は「コ」字状を呈し、外方向にふんばり内側が接している。10は東播系のこね鉢口縁部片である。口縁端部の断面は三角形で、内外面に横ナデ調整が施されている。11は備前焼の大甕底部片である。

S D 2 (第32図)

調査区南部において、東西方向に延びている。幅約60cm、深さ12～15cm、延長15mを測り、断面形はレンズ状を呈する溝である。埋土は黒褐色土を基調とするが、底面及び壁体に灰黄色土がブロック状に混在する。溝底面は、東から西に向かって緩やかな傾斜をなし、その比高差はおよそ10cm、西流する溝と考えられる。

時期は、7～8世紀後半の高坏の脚部を出土しているが、土師器の小片や埋土状況から掘立1・2に近い時期と考えられる。

【出土遺物】(第40図 図版19)

40は土師質の高坏脚部である。外面の一部にハケ目がみられる。

S D 3 (第32図)

調査区北端において、東西方向に延びている。幅100～50cm、深さ20～40cm、延長7.8mを測り、断面形は「V」字状を呈する溝である。埋土は黒褐色土を基調とし、溝底面は、東から西に向かって緩やかな傾斜をなし、その比高差はおよそ15cm、西流する溝と考えられる。

時期や性格についての詳細は、不明である。



S D 1 埋土検出状況（東より）

S D 4 (第32図)

調査区南西端において、南北方向に走り、両端はそれぞれ調査区外へと延びている。幅不明、深さ30cm以上、延長14m以上を測る。埋土は第15層暗褐色土を基調とする。溝底面は、北から南に向かって緩やかな傾斜をなし、その比高差はおよそ10cm、南流する溝と考えられる。溝は中央の東岸においてSD 2と合流する。2条の溝の切り合い関係から、SD 2がSD 4に先行するものと考えられる。時期や性格についての詳細は不明である。

(3) 土坑状遺構

本調査において確認された土坑は2基である。

S K 1 (第32・36図)

調査区南東隅に位置する。平面形は、不正形な楕円形を呈し、第4層黄褐色土上面にて検出した。規模は、南北幅262cm、東西幅202cm、深さ35cmを測る。断面形はレンズ状を呈し、埋土は黒色土を基調とし黒褐色土を混在する。

遺物は、須恵器坏身、土師器の坏のほか多数の土師器片が出土した。

[出土遺物] (第37図)

12は土師器の坏である。外傾する立ち上がりの口縁部は丸く、底部に回転糸切り痕と板状圧痕が見られる。13は須恵器の高台付坏身の小片で、脚端面は水平に接する。

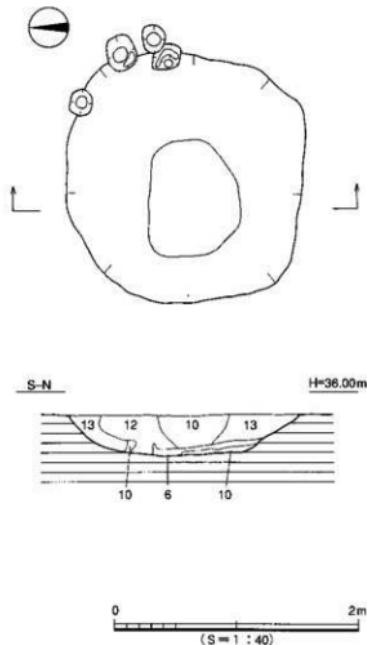
S K 2 (第32図)

調査区北西部に位置する。平面形は、不正形な楕円形を呈する。SD 1の埋土灰黄色土を粒状に混在する黒褐色土の下層にある第5層淡黄色土上面にて検出した。規模は、上層部をSD 1によって切られているため不鮮明な遺存状況ではあるが、南北幅約150cm、東西幅約140cm、深さ約70cmを測る。断面形は摺鉢状である。

遺物は、土師器の坏片を埋土上面にて検出している。

[出土遺物] (第40図・図版19)

41は土師器の坏である。粗雑な作りの底部より内溝すると思われる立ち上がりがある。



第38図 SK1平面面図

(4) その他の遺構と遺物

本調査において性格不明遺構（S X）2基と138基の柱穴状遺構を確認した。柱穴状遺構には、黒色土、黒褐色土、黒褐色土と黄色土の混合土、暗褐色土、灰褐色土の埋土を持つ5種類がある。ほとんどの柱穴から土師器の小片を出土している。性格不明遺構については、いずれも調査区外へと延びているため全体のプランが判明していない。また、遺構に伴わない遺物、表採された遺物は、古代から中世のものが中心であった。

S X 1 (第32図)

調査区南東隅に位置する。第3層黒褐色土上面にて検出した。平面形、規模、断面形ともに遺構が調査区外に延びているため不明である。埋土は第6層浅黄色土、第7層灰黄褐色土、第8層明黄褐色土、第9層黄灰色土を混在する。

遺物は、小片の土師器が出土したのみである。

S X 2 (第32図)

調査区北西隅に位置する。平面形、規模、断面形ともに、遺構が調査区外に延びているため不明であるが、遺構内の埋土が西壁上層で見る限り南方向へと統いており、SD 4に合流する可能性も考えられる。北側においては SD 1と接している。遺構は第5層淡黄色土上面にて検出した。埋土は第18層褐灰色土（明褐色粒混）、第23層黒褐色土（浅黄色粒混）である。

遺物は、土師器の皿及び須恵器片を検出している。

時期は、遺物の特徴から11～13世紀頃と考えられる。

[出土遺物] (第40図・図版19)

42は土師器の皿、底部に回転糸切り痕と板状圧痕が見られ、口縁部は短く外傾して立ち上がり、端部は丸みを帯びている。43は回転糸切り痕の残る底部片である。

2次調査地からの表採出土遺物 (第37図 図版15・16)

14～18は土師器の坏。14は底部に回転糸切り痕と板状圧痕が残り、内面はナデによる凹凸が見られる。15は口縁部の端部がやや内湾気味に立ち上がり、尖り気味に丸い。16は底部に回転糸切り痕と板状圧痕が残る。17と18は円盤高台である。17の底部に回転糸切り痕、18の底部にヘラ切り痕が残る。

19～25は土師器の皿である。19は内湾気味に立ち上がる口縁端部は丸く、底部に回転糸切り痕が残る。20の底部に回転糸切り痕と板状圧痕が残る。21は内湾気味に立ち上がる口縁部と思われる。22は口径5.9cm、底径4.5cm、器高1.0cmを測る小型品である。底部に回転糸切り痕を残し、外傾する短い立ち上がりの端部は丸い。23は外傾する口縁端部は丸く、底部に回転糸切り痕を残す。24は回転糸切りの底部より、短く外傾する口縁端部は尖っている。25の口縁部は尖り気味である。

26は土釜である。口縁端部より垂れるように断面三角形の鉗を貼り付ける。

27～39は、須恵器である。(第38図・図版16)

27・28は坏蓋である。扁平な天井部より、短く屈曲する口縁部の端部は丸い。27の天井部に緑色の自然釉がかかる。29は高台付の坏身である。やや外側にふんばり脚端面は水平に接する。

30～33は壺の口縁部片である。30は緩やかに外反する口縁部の端部は、上方に肥厚され尖り気味で

ある。31は大きく外反する口縁部の端面に凹が見られ、内面に自然釉がかかる。32・33の口縁部の端面にも凹が見て取れる。

34～36は壺である。34は丸底の底部片で、外面に回転ヘラ削りが見られる。35は脚付壺の脚部片で、端部は下方に丸くのびる。36は口縁部片、頸部に稜を持ち、口縁部は外傾気味に立ち上がり、端部は水平でやや凹む。

37は水平気味に短く外反する壺の口縁部片で、口縁端面はやや凹む面を持つ。外面に格子目叩きが見られ、亀山焼と思われる。

38は摺鉢の口縁部片、口縁部は水平で内面に10本の条線が見られる。

39は瓦質の壺で、短く外傾する口縁部の端部を内側に摘み出している。

3次調査地からの表探出土遺物（第39図・図版15・19）

44～49は土師器の皿である。44の口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸く、底部に回転糸切りが残る。45は外傾する立ち上がりと思われる。46～48の底部に回転糸切り痕が残る。

49は底部片で、外傾する立ち上がりと思われる。

50～53は須恵器である。50は返りを持つ坏身の小片で、受部は水平気味に短く伸び、端部は尖り、立ち上がりはやや内傾し長く伸びる。51は壺蓋、口縁部手前で短く屈曲する口縁部は丸く、内外面に回転ナデが施されている。52は高台付の坏身で、脚端面は水平に接し、凹を持つ。53も高台付の坏身で、脚部は「ハ」字状にふんばり、脚内端部が接している。

54は、備前焼系の鉢と思われ、外面に櫛描きによる波状文を施す。

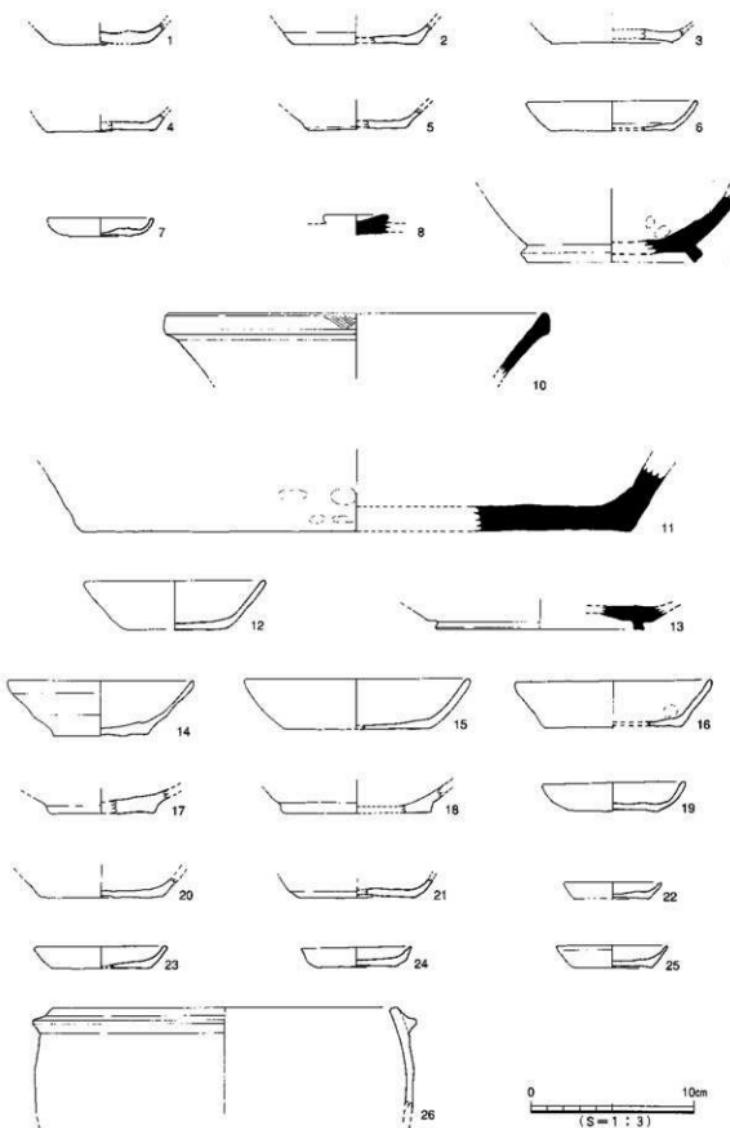
55は、備前焼の壺の底部片である。底部と胴下部にハケによる調整が顕著に見られる。

56・57は、土釜である。ともに口縁部より垂れるように断面三角形の錫を貼り付ける。57の外面に煤の付着が見られる。



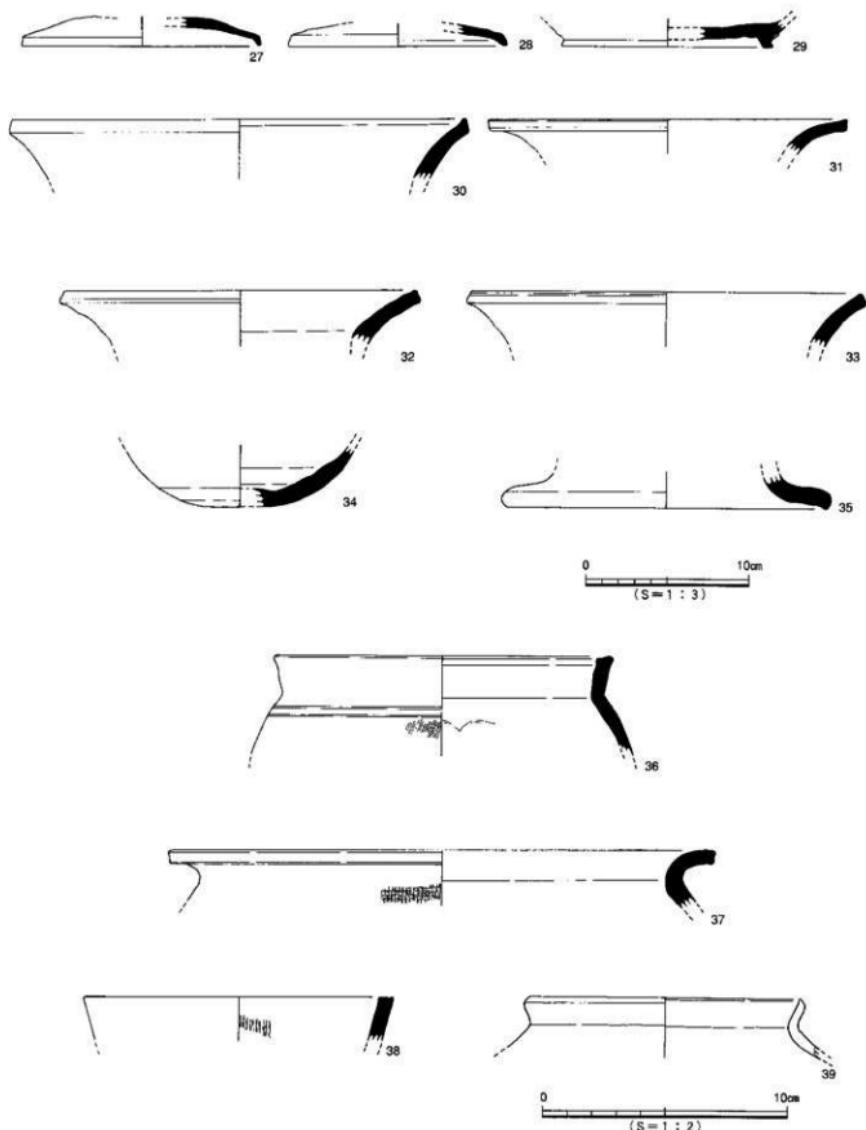
S D 2 内 遺物出土状況（東より）

調査の概要



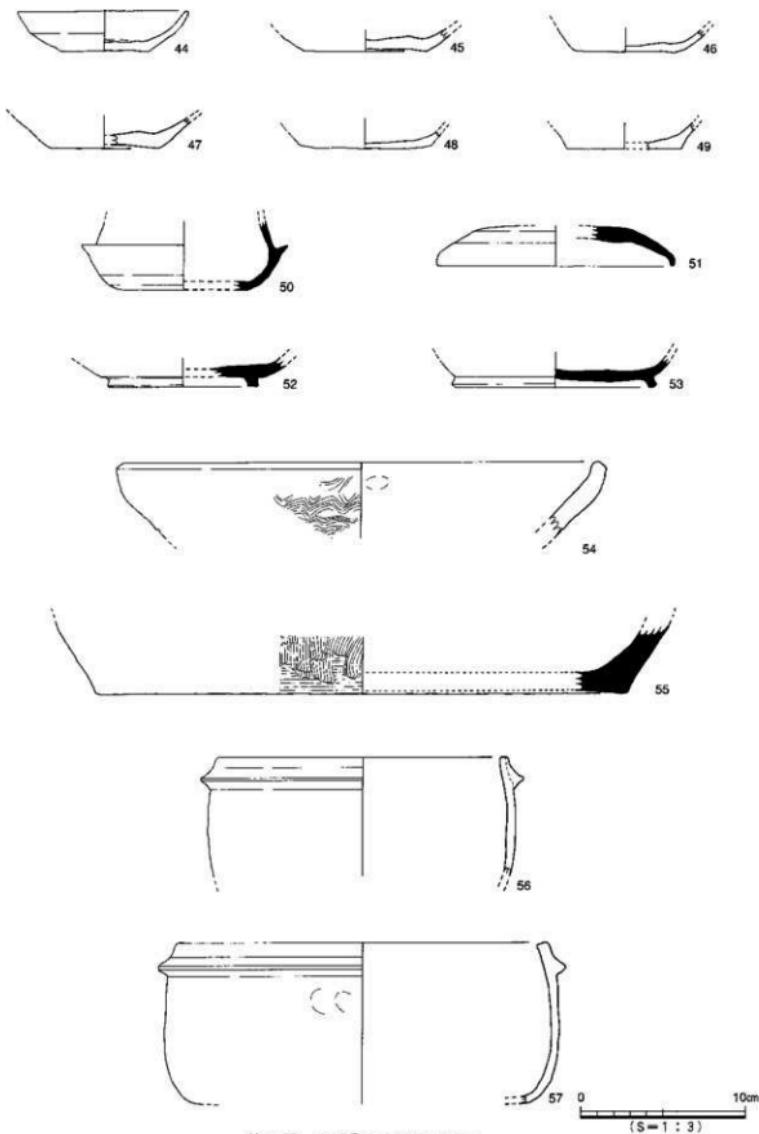
第39図 SK. SD. 碑採①出土遺物実測図

南久米町遺跡 2・3次調査地

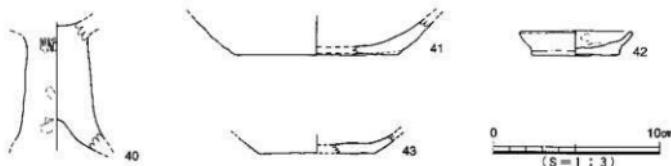


第40図 考探②出土遺物実測図

調査の概要



第41図 考採③出土遺物実測図



第42図 SD.SK 出土遺物実測図

4. 小 結

本調査で検出した遺構や遺物は、古代から中世にかけてのものが主体である。遺構は、掘立柱建物址 2 棟、溝状遺構 4 条、土坑状遺構 3 基等を確認した。

(1) 掘立柱建物址

本調査地内で検出した住居址は、2 棟であるが、検出状況から掘立 2 は掘立 1 の建替えになるものと思われる。南西壁面近くで確認された掘立 1 の南西角の柱穴からは、8 世紀代から唐代に鉄造された「開元通寶」が 1 枚、根石の下層基底部より出土している。プランは、東西棟と思われ、梁行 2 間の柱穴から東方に延びるものと考えられる。規模、方位等から前章で報告した本遺跡の東方約 100 m のところに位置する「南久米町遺跡」より検出された掘立柱建物群と非常に酷似しているため、官衙に関連する建物の可能性もあり、更には調査区東部に広がる建物群が想定されるが、調査対象外であり、今後の調査による展開が待たれる。

時期については、それを判断する明確な資料が確認されておらず、僅かな土師器の皿片から類推するしかなかった。結果、9 世紀後半以降から 13 世紀までの建物と判断される。

「南久米町遺跡」との関連性からして住居址は複数存在すると考えられ、来往台地北辺の当該期における掘立柱建物址の確認作業が興味深い。

(2) 溝状遺構

東西に流れる SD 1 は、8 世紀代の須恵器、9~11 世紀の土師器、更には 12 世紀の東播系のこね鉢等、広範囲に渡る時期の遺物が出土しており、溝構築後に造成されたことが埋土の層位からも観て採れる。溝の性格については、周辺の調査が進んでいないために詳細は不明であるが、溝の方位・規模から推察して次のことが考えられる。ひとつは、南に隣接する東山神社が伝承によれば、占墳であったといわれていることからその周溝ではないか。二つには、100m 西方に所在する「南久米町遺跡」で確認された官衙に関連する区画溝ではないか。どちらにしても、これを解明する明確な資料は得られていない。後の 9~12 世紀の間にこの溝は埋め戻されている。

なお、SD 4 は調査区南西端を南北に走る溝で、恐らくは北部において SD 1 と合流するものと考

えられるが、時期・性格とも遺物の検出にいたっていない。調査区西部の今後の調査に期待したい。

本調査において、確認された遺構はすべて断片的で各遺構との関連性を明確に把握することはできなかった。それら多くの遺構に伴って出土した土師器が、本遺跡の年代を推定する資料とはなったが、ほとんどが小片のため、詳細な時期比定は困難を極めた。総じて、掘立柱建物址を中心とする時代を設けるならば、9~12世紀頃に官衙的性格を持つ集落が、この南久米地区に存在していたことが考えられる。

また、調査区からは古墳時代の遺構や遺物のはかに、わずかではあるが弥生時代の遺物が出土している。明確に時期比定し得る遺構は未検出であるが、これらの遺物は当地を含め周辺地域に当該期の集落の存在を示唆する資料である。

今回の調査結果は、南久米地区と周辺地域の古代から中世に移行する転換期の集落の構造や変遷を考える上で貴重な資料となるものである。今後、未調査地の多いこの地区にあって、古代の役所施設の構造や変遷は、久米官衙との関連性を含め検討していかなければならないであろう。

[文献]

- | | | |
|------------|------|---|
| 栗田 康敏 | 1987 | 「南久米片廻り遺跡」
〔松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ〕松山市教育委員会) |
| 森 光晴ほか | | 『松山市史料集 第2巻』 松山市史編纂委員会 |
| 森 光晴ほか | 1986 | 『愛媛県史 資料編 考古』 愛媛県史編纂委員会 |
| 宮本 一夫 | 1990 | 『櫛味・鷹子遺跡の調査』 愛媛大学埋蔵文化財調査室 |
| 西尾 幸則・池田 学 | 1979 | 『来住磨寺跡寺域調査』
〔松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ〕松山市教育委員会) |
| 西尾 幸則・池田 学 | 1991 | 『久米官衙跡群』
〔松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ〕松山市教育委員会) |
| 西尾 幸則 | 1986 | 「北久米淨蓮寺遺跡」「愛媛県史 資料編」愛媛県史編纂委員会 |
| 小笠原好彦 | 1979 | 『来住磨寺』 松山市教育委員会 |



調査地上空より西方を望む（左電柱先左に南久米町遺跡）

表7 SD1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎 土 燃 成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	土師 盔	底径(5.8) 残存 13	底部に圓軸糸切り。	ヨコナデ	ヨコナデ 灰白 灰白	黄(2) ○	SD1	15	
2	土師 盔	底径(7.6) 残存 13	底部に圓軸糸切り。	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	淡黄 淡黄	褐色(石) ○	SD1	15
3	土師 盔	底径(7.6) 残存 9.9	底部に圓軸糸切り。	ナデ	ナデ	浅灰 黑灰	褐色 ○	SD1	15
4	土師 盔	底径(6.6) 残存 1.0	外模する立ち上がりか。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡绿 淡绿	褐色 ○	SD1	
5	土師 盔	底径(6.0) 残存 1.2	底部に圓軸糸切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白 灰白	褐色 ○	SD1	
6	土師 盔	口径(10.6) 底径(7.4) 残高 1.8	底部から内湾気味に立ち上がり口縁部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	後 後	青(石・長) ○	SD1	
7	土師 盔	11径 6.5 底径 3.8 残高 1.1	圆軸糸切りの底部より内湾気味に立ち上がり腹部は丸い。	ナデ	ナデ	灰白 灰白	褐色(石・黄) ○	SD1	15
8	環蓋	つまき(4.0) 残高 1.2	中央部が凹むつまみ。	回転ナデ	ナデ	明褐色 明褐色	青(長) ○	SD1	
9	蓋	直径(10.4) 残高 4.3	高台付。脚部は外方向にふんばる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白 灰白	黄(1~4) ○	SD1	
10	鉢	口径(23.2) 底径 4.0	東播系のこね鉢と思われる。	ヨコナデ (口一部ハケ)	ヨコナデ	灰色 灰色	褐色 ○	SD1	15
11	甕	底径(34.0) 残高 4.2	偏底段の人面の表部片。	ヨコナデ→ナデ ナデ	ヨコナデ	赤褐色 灰赤	石・青(1~6) ○	SD1	

表8 SK1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎 土 燃 成	備考	図版
				外 面	内 面				
12	土師 壺	口径(11.2) 底径(6.0) 残高 3.0	回転糸切りの底部より外傾して立ち上がり端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ 灰白 灰白	褐色 ○	褐色 ○	SK1	
13	壺	底径(12.8) 残高 1.4	高台付身か、脚窓面は水平。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	青(灰) ○	SK1	

表9 2次調査地表探出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎 土 燃 成	備考	図版
				外 面	内 面				
14	土師 壺	口径 11.4 底径 5.8 残高 3.4	底部に圓軸糸切りと板口腹あり。 底部内面は凸凹状。	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	灰白 灰白	青	○	15
15	土師 壺	口径(13.9) 底径(9.1) 残高 3.1	やや内湾気味に立ち上がる。 口縁部分は尖り気味に丸い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	淡黄褐 淡黄褐	褐色 ○		15
16	土師 壺	口径(12.2) 底径(8.4) 残高 2.8	底部に圓軸糸切りと板口腹あり。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	灰白 灰白	石・青(1~4) ○		

遺物観察表

2次調査地表出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調査		色調(外面) (内面)	崩土 焼成	備考	回収
				外面	内面				
17	土器 壺	底径(6.4) 残高 1.5	円盤窓の底部と同軸系切り底。	ヨコナデ	回転ナデ・ナデ	淡黄色 淡黄色	石・長(1~2) ○		
18	土器 壺	底径(9.3) 残高 1.7	円盤窓付。	ヨコナデ	ナデ	橙色 橙色	繊粒 ○		
19	土器 皿	口径 8.8 底径 5.5 残高 1.8	内済気孔に立ち上がる口縁部の端部は丸い。	②ヨコナデ ⑤ナデ	②ヨコナデ ⑤ナデ	褐灰色 褐灰色	繊粒 ○		16
20	土器 皿	底径 7.4 残高 1.3	底部に回転系切り底と板目底あり。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰白 灰白	石・長(1~3) ○		
21	土器 皿	底径(7.2) 残高 1.2	内済気孔に立ち上がる口縁部が丸い。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰白 灰白	繊粒 ○		
22	土器 皿	口径 5.9 底径 4.5 残高 1.0	外縁する立ち上がりの口縁端部は丸い。	ナデ	ナデ	浅黄緑 浅黄緑	青 ○		16
23	土器 皿	口径(8.2) 底径(6.2) 残高 1.3	底部に回転系切り底。 口縁端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白 灰白	青 ○		
24	土器 皿	口径(6.8) 底径(4.8) 残高 1.2	底部に回転系切り底。 口縁部は丸く尖る。	ヨコナデ	ナデ	灰白 灰白	石・長(1) ○		
25	土器 皿	口径 6.9 底径 4.8 残高 1.4	回転系切りの底部より外縁し口縁端部は尖り気味である。	ヨコナデ	ナデ	にぶい青 淡青	繊粒 ○		
26	土器	口径(21.0) 底径 6.4	口縁部から乗れるように断面三角形の脚を貼り付けた。	②ヨコナデ ⑤ナデ	ヨコナデ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	石・長(1~2) ○		16
27	壺	口径(14.6) 残高 1.8	扁平な大井戸より短く屈曲する口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	灰白 灰色	繊粒(長) ○	自然堆	
28	壺	底径(13.6) 残高 1.3	扁平な大井戸。 口縁端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰白 灰白	石・長(1~2) ○		
29	壺	底径(13.0) 残高 1.7	高台の脚端面は水平に接する。	ナデ	ナデ	暗赤灰 赤灰	繊粒 ○		
30	壺	口径(27.9) 残高 1.7	歩るやかに外反する口縁部。 口縁端部は上方に肥厚される。	回転ナデ	回転ナデ	灰白 灰色	繊粒(長) ○		16
31	壺	口径(22.0) 残高 2.1	大きく述べる口縁部。 口縁端部は歩るやかに凹凸を有する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	繊粒 ○	自然堆	
32	壺	口径(21.5) 残高 3.3	外反する口縁部。 口縁部にナデによる凹面が見られる。	回転ナデ	回転ナデ	にぶい赤 赤灰	長(1~2) ○		
33	壺	口径(24.1) 残高 3.3	口縁部に強いた面が見られる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白 灰色	繊粒(長) ○		
34	壺	口径 3.7	丸底の底端片。	④回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ	赤褐色 赤灰	長(1~3) ○		
35	壺(溝)	口径(19.8) 残高 2.2	脚端部は丸く下方に伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白 黄灰	長(1) ○	自然堆	16
36	壺	口径(28.0) 残高 8.0	頭部に脚を持ち、口縁部は外縁気孔に立ち上がり端部は水平でやや凹む。	回転ナデ 平行印き	回転ナデ	灰白 灰白	繊粒(長) ○		16

南久米町遺跡2・3次調査地

表10 2次調査地表探出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
37	人頭	口径(45.0) 残高 4.8	大きくなぞらうに縁部の端面はやや凹む。	①凹輪ナダ ②格子目叩き	④回転ナダ ⑤ナダ	青灰 灰色	粗粒(長) ○		16
38	擂杵	口径(25.6) 残高 3.6	口縁部は木底、内面に10本の条様。	回転ナダ	回転ナダ	黑色 灰色	長(1~5) ○		
39	火	口径(22.3) 残高 4.9	口縁端面を内面につまみ出す。	回転ナダ	回転ナダ	淡黄 淡黄	石・長(1~2) ○		

表10 SD2・SK2・SX2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
40	陶坏	残高 8.0	陶坏の柱状。	ナダ 輪郭部にハナ	ナダ	明水緑 明灰白	粗粒 ○	SD2	19
41	土坏 坏	底径(9.8) 残高 2.2	内側する立ち上がりか。	①ヨコナダ ②工具によるナダ	ナダ	に赤い黄緑 に赤い白	長(1~2) ○	SK2	19
42	土坏 皿	口径 (6.8) 底径 (5.3) 残高 1.6	底部に回転めり痕と板口痕。口縁端部 は丸い。	ナダ	ナダ	淡黄白 淡黄白	粗粒(石・長) ○	SX2	19
43	土坏 皿	底径 (7.0) 残高 1.2	外側する口沿部か。	摩滅の為不明	ナダ	灰白 灰白	粗粒 ○	SX2	19

表11 3次調査地表探出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
44	上脚 坏	口径 10.4 底径 5.4 残高 2.6	内側気泡に立ち上がる。 口縁部の端部は丸い。	ヨコナダ ナダ	ヨコナダ ナダ	浅黄緑 明灰白	石・長(1~2) ○		
45	上脚 坏	底径 7.4 残高 1.4	外側する立ち上がりか。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰黄 灰黄	長(1~2) ○		
46	土脚 坏	底径 6.0 残高 1.4	内側気泡に立ち上がるに隕るか。 底部に回転系切痕。	ナダ	ヨコナダ ナダ	灰白 灰白	石・長(1~2) ○		
47	土脚 皿	底径 (6.8) 残高 1.9	底部に回転系切痕。	ヨコナダ	ナダ	褐色 に赤い黄緑	粗粒 ○		
48	土脚 皿	底径 (7.5) 残高 1.1	底部に回転系切痕と底口痕あり。	摩滅の為不明	ヨコナダ ナダ	灰白 淡黄白	石・長(1~2) ○		
49	土脚 皿	底径 (7.0) 残高 1.6	外側する立ち上がりか。	ナダ	ナダ	に赤い根 皮	粗粒(長) ○		
50	小舟	底径 (7.7) 残高 4.2	受詰は水平気味で尖る。 立ち上がりは、やや内傾し高い。	回転ナダ ④回転ヘラケズ	ヨコナダ	暗青灰 青灰	石・長(1~3) ○		19

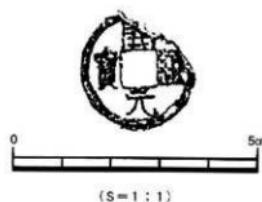
遺物観察表

3次調査地表出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	施土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
S1	环壺	口径(14.2) 残高 2.4	短く屈曲する鋸部の梢部に丸い。	圓転ナデ	圓転ナデ	明赤灰 にぶい液	青(長) ○		19
S2	环身	直径(9.0) 残高 1.8	高台付。側縁面は水平に接し把みをもつ。	圓転ナデ	ナデ	青灰 青灰	緑(長) ○		15
S3	环身	直径(12.0) 残高 2.0	高台付。側内縁部が接する。	圓転ナデ	圓転ナデ ナデ	灰白 にぶい青灰	石・長(1~2) ○		
S4	环	口径(29.8) 残高 4.6	外面に捲描書きによる波状文を施す。	圓転ナデ	圓転ナデ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	羅粒(長) ○	薄削系	19
S5	筒	底径(32.5) 残高 4.5	内溝気孔に立ち上がる。大妻の底部	窓テハケ(6/1cm) ②ナデ	ナデ	緑灰色 緑灰色	長(1~2) ○	削削系	19
S6	土釜	口径(17.7) 残高 7.3	口縁部より垂れるように前面三角形の鉤を吊り付ける。	①ヨコナデ ②ナデ	ナデ	橙 にぶい橙	石・長(1~2) ○		19
S7	土釜	口径(22.6) 残高 9.6	前面三角形の鉤を吊り付ける。 外壁は焼けている。	①ヨコナデ ②ナデ	ナデ	にぶい橙 にぶい橙	長(1~2) ○	様	19

表12 掘立1出土遺物観察表 錢貨

番号	錢名	初鑄年	銘文(mm)	孔径(mm)	外縁厚(mm)	内側厚(mm)	重量(g)	備考	図版
S8	開元通寶	621	開元通寶	24.0	6.70	1.40	0.7	1.110	薄・対版 15



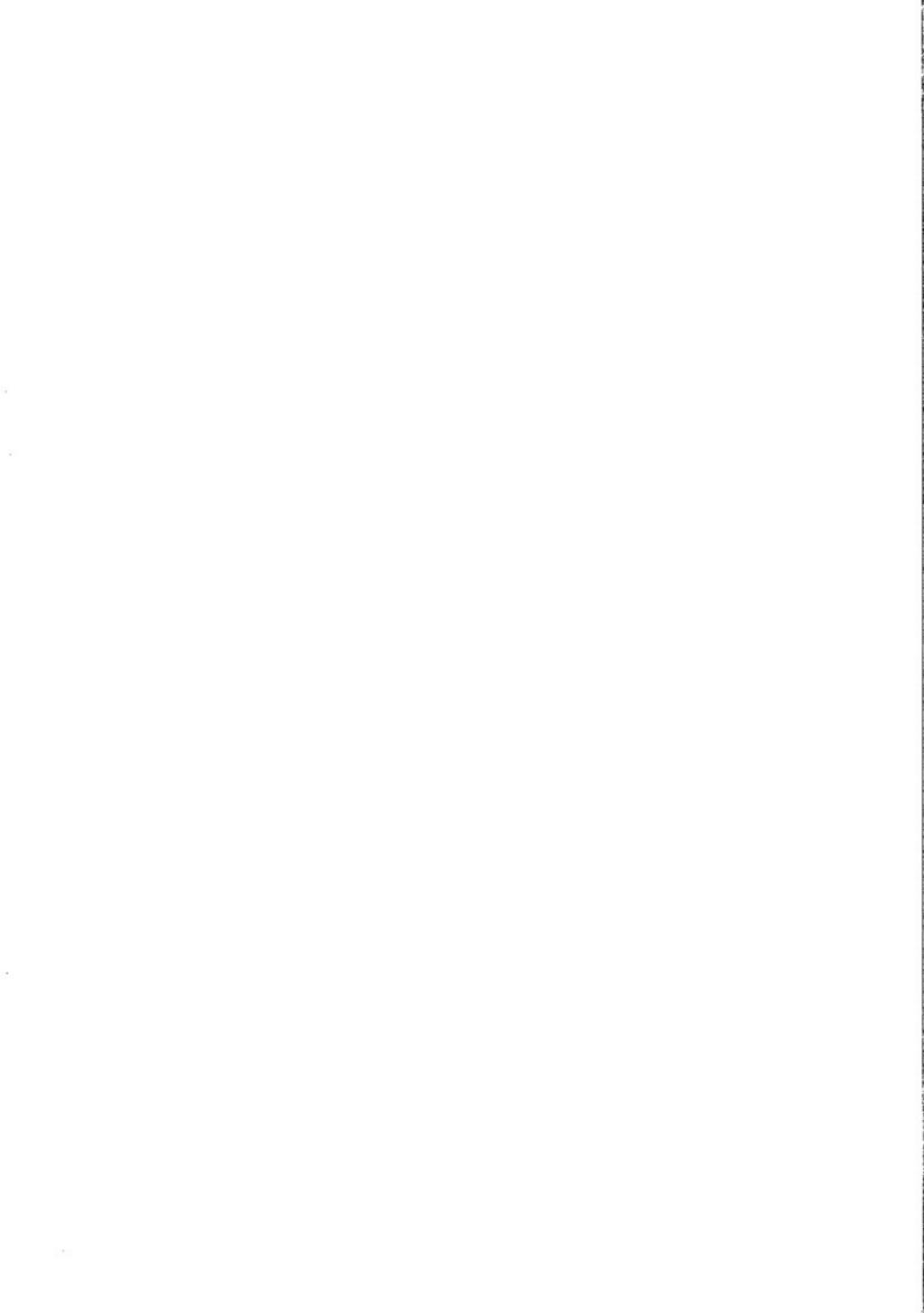
第43図 掘立1出土遺物実測図



第5章

来住町遺跡

—4次調査地—



第5章 来住町遺跡4次調査地

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

平成4（1992）年1月27日、三好英則氏より松山市教育委員会文化教育課（以下 市教委）に対し、三好氏所有の松山市来住町524-1における宅地開発にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが提出された。

調査地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「No127 来住廃寺跡」内にあり、松山平野北東部における平井谷地域を水源とする堀越川と小野谷地区を水源とする小野川によって形成された来住台地上、標高38.5mに立地している。国指定史蹟来住廃寺跡は、当該地より南東320mに位置する。

同包蔵地内には、白鳳期の創建として知られる来住廃寺、官衙関連遺構が近年の調査で多数発見されている久米高畠遺跡群等がある。そのほかにも縄文時代後期から中世に至る集落関連遺構がぞくぞくと確認されている。

これらのことから、当該地における埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲やその性格を確認するため、平成4（1992）年3月4日から2日間、市教委指導のもと、財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター（以下 埋蔵文化財センター）が試掘調査を実施した。その結果、調査区北東部において黒色土を埋土とする溝状遺構を検出し、その中から多数の須恵器片を出土した。なお、それ以外の調査地は、かつての粘土採掘によって擾乱されており、遺構、遺物ともに確認されなかった。

これにより、古墳時代の溝状遺構に須恵器が遺存することが明確となった。この結果を受けて市教委と埋蔵文化財センターと申請人の3者により遺跡の取り扱いについて協議を行い、宅地開発によっ



第44図 調査地位置図 (S = 1 : 4,000)

米住町遺跡4次調査地

て失われる遺構・遺物について、記録保存のために発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、古墳時代の周辺地域を含めた集落構造の解明を主目的とし、埋蔵文化財センターが主体となって、三好英則氏の協力のもと平成4（1992）年4月15日に開始された。

（2）調査組織

調査地 松山市米住町524-1

遺跡名 米住町遺跡 4次調査地

調査期間 平成4（1992）年4月15日～同年4月30日

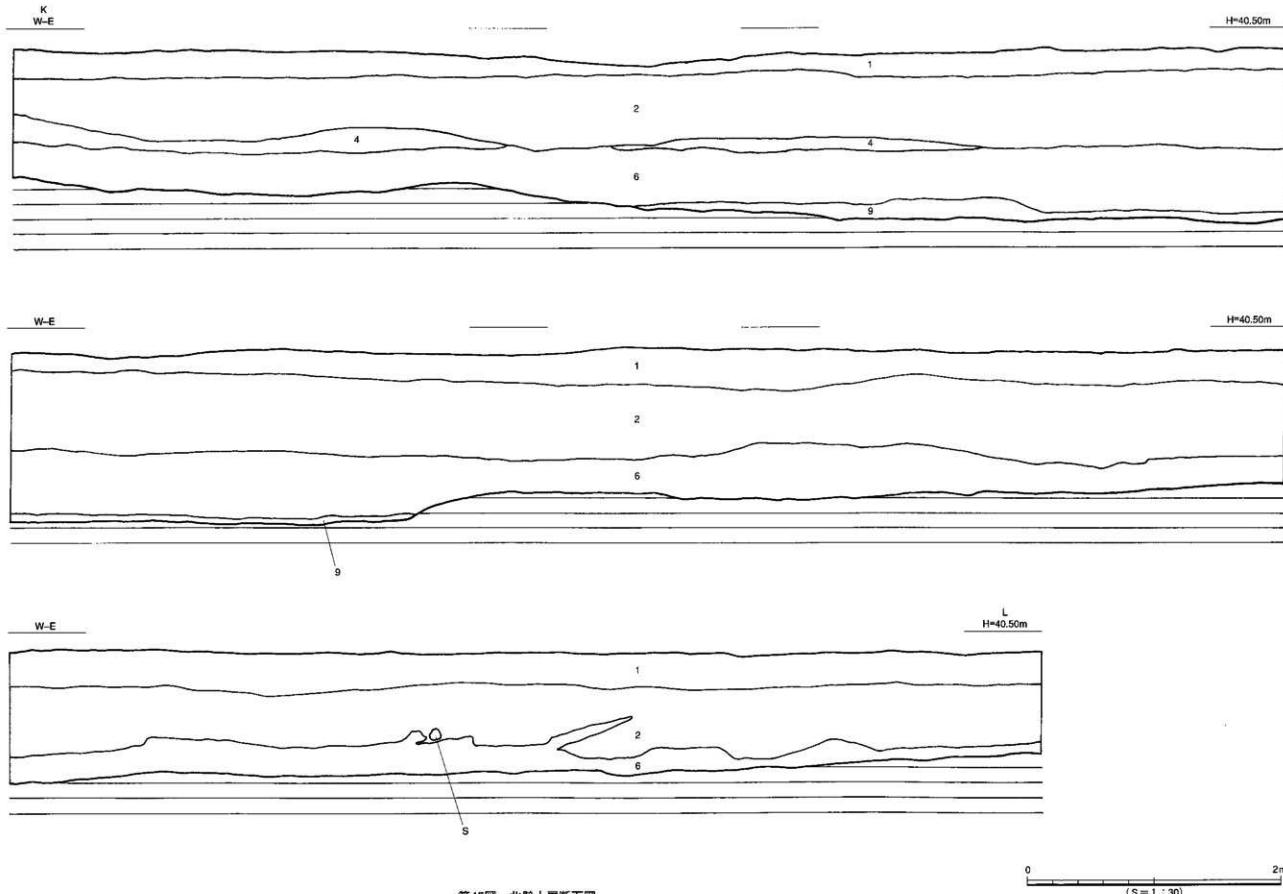
調査面積 988m²

調査委託 三好 英則

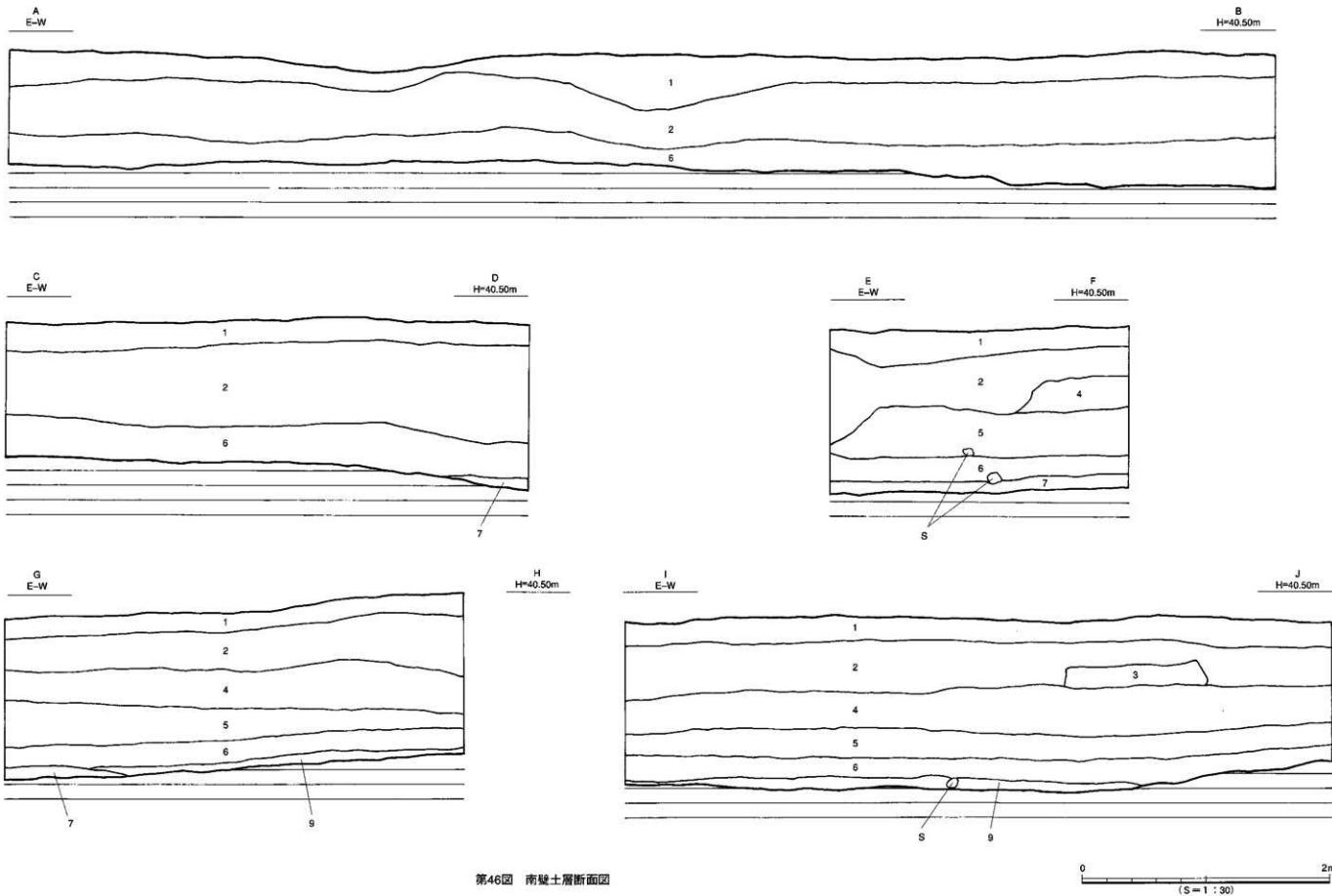
調査担当 調査主任 田城 武志

調査作業員 岩本 憲・山邊 進也・志賀 夏行・原田 英則・重松 恒彦・
田中 国広・田中 煜・二宮 和見・西田 寛一・松友 利夫・
相原 勇・重松 吉雄・波多野恭久・宮本 健吉・宮脇 和人・
宮脇 武勇・森 隆





第45図 北盤土層断面図



第46図 南壁土層断面図

2. 層位 (第43・44図)

本遺跡は、段丘堆積物層で形成される洪積世段丘に、小野川から流れ出た扇状地堆積物層が覆いかぶさるような形で形成された来住台地上に立地している。

本調査地の主な基本層位は、第1層 耕作土、第2層 粘土採取した後に搬入された真砂土による造成土、第3層 一部にしか残っていない床土、第4層 土師器を含み調査区西部南面壁において20~30cm厚を遺存する黒褐色土の包含層、第5層 調査区南西部にしか見られない粘土質の褐灰色土、第6層 全域に15~30cm厚残り須恵器を含む粘土質の黒色土、第8層 浅黄橙色土の地山と呼ばれる層、上面の比高差は調査区中央部において最も深く、東部と比較して40~50cm差を測る。遺構・遺物は第6層上面にて検出された。

層位は、次のとおりである。

第1層	耕作土	
第2層	造成土	
第3層	床土	
第4層	黒褐色土	(10YR 2/3)
第5層	褐灰色土	[粘質] (10YR 6/1)
第6層	黒色土	[粘質] (10YR 2/1)
第7層	暗灰黄色土	[砂質] (10YR 4/1)
第8層	浅黄橙色土	[地山] (10YR 8/4)
第9層	灰白色土	[砂礫混] (10YR 7/1)

〔() 内は『標準土色帖』(財團法人日本色彩研究所監修)による]

検出された遺構は、溝状遺構1条である。出土遺物の特徴から判断して、第4層は古代から中世にかけて堆積した遺物包含層、第6層は古墳時代の遺物包含層である。



南壁土層断面（北より）

3. 調査の概要 (遺構と遺物)

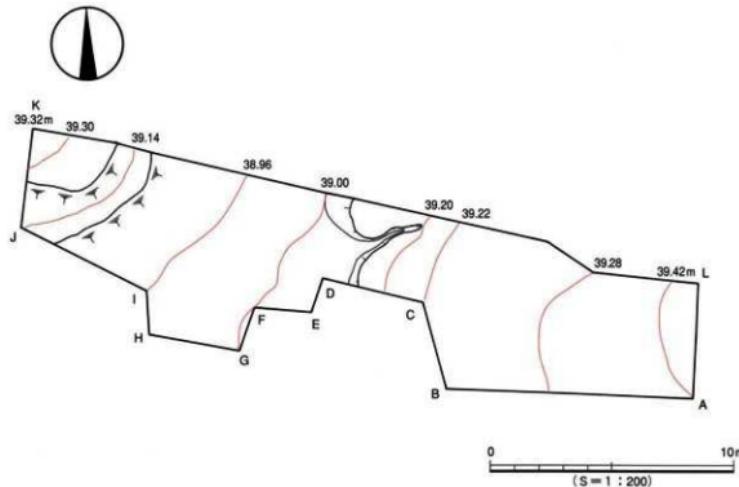
本調査では、弥生時代から古代にかけての遺構及び遺物を検出した。遺構は古墳時代後期の溝状遺構 1 条を検出し、遺物は第 4 層から瓦片・土師器片等の古代の遺物、第 5 層から須恵器、第 6 層から須恵器、弥生土器片を出土している。

(1) 溝状遺構

S D 1 (第45図)

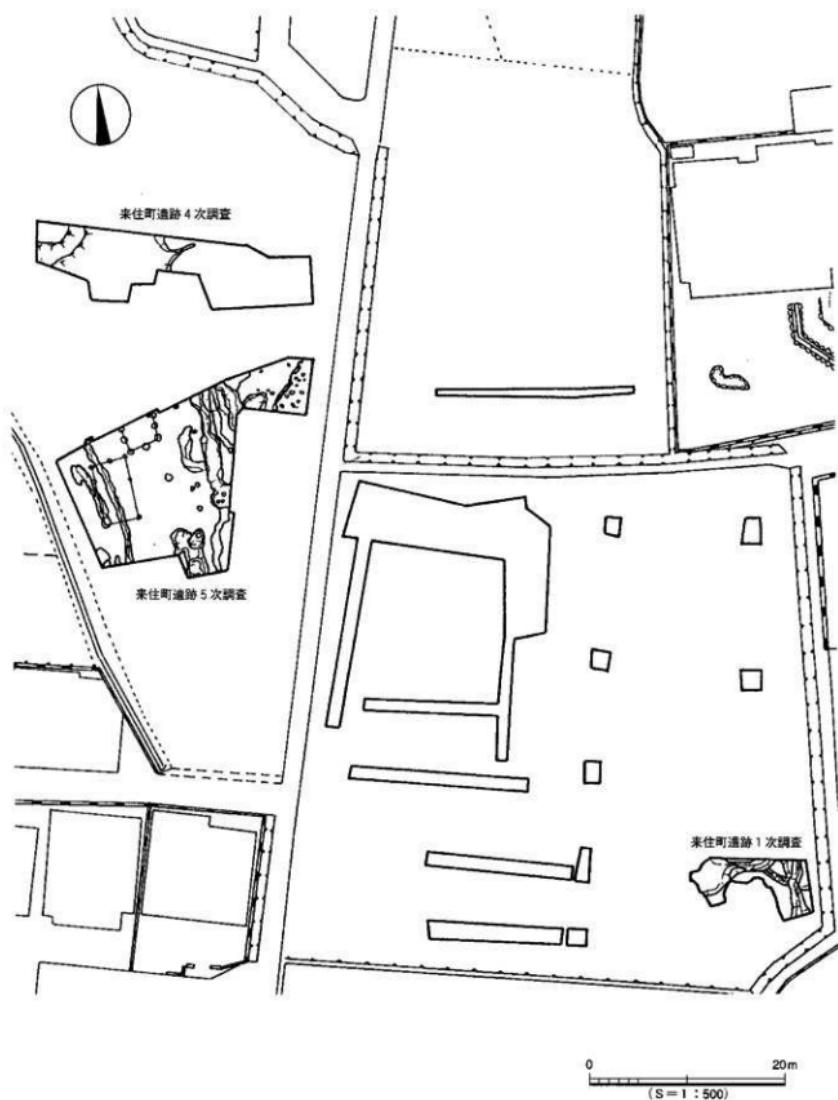
調査区のほぼ全域が本溝の中に位置している。溝は、南端から北北西に延び、幅約 20~24m 以上、深さ約 80cm を測り、断面形は東部から緩やかに落ち込んでおり、西部で急斜面の土手を形成している。基底面は調査区中央で平坦であるが、北方へわずかに傾斜しており、南北壁の比高差は 2~5 cm である。埋土は、第 4・5・6・7・9 層である。第 4 層黒褐色土は須恵質の瓦片や土師器の包含する奈良時代の包含層、第 5 層粘質の褐灰色土は多数の須恵器と土師器を含む古墳時代の包含層、第 6 層粘質の黒色土は須恵器と弥生土器を含む包含層である。

遺物は、溝のほぼ中央の平坦面において第 5・6 層中より出土した。出土状況は、半径約 2 m 内に須恵器の壺蓋・壺身・高壺・壺・甕等の破片がまとまった状態で検出された。



第47図 S D 1 測量・コンタ図

南立の概要



第48図 周辺遺跡配置図

(2) 出土遺物

第5層出土遺物①〔須恵器〕(第47図 図版23・24)

1. 壺蓋 天井部と口縁部を分ける箇所に、強いナデが行われた様を持ち、口縁部は尖り気味に仕上げられている。稜が失われ、凹線を巡らす傾向の特色を持つ高藏10型式、光明池124型式に比定される。
2. 壺蓋 丸い口縁部は直立気味に接する。1同様の時期に比定される。
3. 壺蓋 口縁部は外反気味に接し、端部は尖り気味である。焼け痕でいる。高藏209型式と同時期と考えられる。
4. 壺蓋 丸みを持つ天井部より、緩やかに口縁部に続き、端部は丸い仕上である。高藏217型式に比定する。
5. 壺蓋 天井部は水平気味で、口縁部はやや開き気味に接し、端部はやや丸味を帯びている。口縁端部の状況から高藏209型式に近い時期と思われる。
6. 壺身 短く外上方に向かって伸びる受部に、内傾する短い立ち上がりを持つ。立ち上がりを持つ壺身の終末に近い形態で高藏217型式に比定される。
7. 壺身 丸味を持つ底部、受部の下部に強いナデが施され、受部が屈曲するように見え、立ち上がりは短く内傾する。焼成が甘く灰白色を呈する。6同様の型式である。
8. 壺身 焼成時に他の遺物との接触による剥離と歪みを生じている。短く水平に伸びる受部と、直立気味に短く立ち上がる口縁部の端部は、尖り気味である。高藏209~217型式の範疇と思われる。
9. 壺身 扁平な底部より短く上方に伸びる受部に、内傾して立ち上がる口縁部は、尖り気味である。6と同時期と考えられる。
10. 壺身 平底状の底部より水平に伸びる受部に続き、立ち上がりは内傾する。浅く扁平で、立ち上がりは短い特徴を持つ高藏209型式に比定する。
11. 壺身 扁平な底部より短く水平に伸びる受部の立ち上がりは、9・10よりも長く伸びる。内傾する立ち上がりの度合が強い高藏43型式に類似する。
12. 壺身 受部は、立ち上がりが内傾し、外上方に短く伸びる端部も丸く仕上げられており、高藏10型式に比定される。
13. 壺身 受部は、水平に伸び尖り気味である。立ち上がりは外反気味に内傾する。高藏10・光明池124型式の同時期と考えられる。
14. 壺身 扁平な底部はハラ切りがなされ、未調整である。受部は水平に短く伸び、内傾気味に立ち上がり、端部は尖り気味である。底部にはナデ或いはハラ記号と思われる沈線が見られ、高藏10・光明池124型式の同時期と考えられる。
15. 壺身 高台付。脚部は「ハ」字状に付し、内端部が接地し、端面は凹む。7世紀後半~8世紀前半の特徴を持つ。
16. 壺身 平底の底部より外傾しながら立ち上がり、口縁部手前で僅かに外反し、端部は尖り気味に丸い。高藏217型式前後の時期と考える。

17. 高坏 坏部から柱部にかけての残存である。坏部は浅く外傾し、口縁端部は丸い。坏底部に柱部との接合時の段が見られる。

18. 高坏 脚部片。脚中位に浅い凹線が2条巡る。高蔵209型式に近い時期に比定すると思われる。

19. 高坏 脚部片。緩やかに聞く脚部の端部は、外上方を向き、端面は凹面を成す。7世紀中頃の特徴を示す。

20. 高坏 脚部片。脚端部を僅かに上下に拡張し、段を持つ。7世紀初期から中頃の特徴を持つ。

第5層出土遺物②〔須恵器〕(第48図 図版24~26)

21. 壺 口縁部は細い頸部より外傾しながら開き、胴中位に刺突列点文有り。6世紀中頃から7世紀初頭の型式に酷似する。

22. 壺 直立する短い口縁部片で、口縁端面は内傾し、段を持つ。

23. 壺 扁球形の胴部より短く直立する口縁部は丸く、頸部下部に1条の凹線が巡る。高蔵15型式に類似する。

24. 壺 口径19.8cmを測る口頸部である。口縁部は、坏身と同様に受部と立ち上がりを持つ形態である。受部は水平気味に短く丸く伸び、立ち上がりは内傾しやや尖り気味に丸い。光明池113・高蔵74型式に比定する。

25. 壺 脇部から口縁部にかけて焼け歪みが激しいために、型は不確定である。短く外反する口縁部は、肥厚し丸くおさめられ、内外面ともに頸部下まで同心円文と平行叩きが施されている。高蔵41型式に比定する。

26. 壺 口縁部は外反し、口縁部手前で外上方に屈曲し、端面は外傾し、僅かに凹面を成す。高蔵74型式に比定する。

27. 壺 口径51.2cmを測る大壺の口縁部から脇部かけての残存である。外反する口縁部は端部で肥厚され、上下に張り出し凹線が1条巡る。口縁下部の外面には、カキ目調整からナデによる調整が行われた後に、右上がりのヘラ書き文を2条に施し、ヘラ書き文を挟むように凹線が3ヶ所に巡る。高蔵312型式の範疇と考えられる。



須恵器壺出土状況



須恵器壺出土状況

28. 壺 底部から胴部にかけての残存で、残高52.6cmを測る大壺である。底部外面にタタキ調整後にカキ目調整を施し、内面は同心円文を磨き消している。

第5層出土遺物③〔須恵器〕(第49図 図版27)

29. 鹿 口縁部に自然釉の付着が見られる。高藏46型式に比定する。

30. 鹿 口縁部から胴部にかけての残存である。口端部は欠損しているが、大きく開く口縁部と思われる。高藏46型式に比定する。

31. 平瓶 口頸部は、半球形の体部に片寄って付され、僅かに外反し、端部は肥厚され下方に伸びる。高藏217型式前後の時期の特徴と類似する。

32. 小壺 手捏ね品。底部内面に指頭痕が顕著である。

33. 平瓦 外面に格子タタキ、内面に布目痕が見られる。

第6層出土遺物 〔須恵器〕(第50図 図版27)

34. 坯身 短く水平に伸びる受部に、内傾する立ち上がりを持ち、端部は尖り気味に丸い。高藏209・30-I型式に比定される。

35. 坯身 形態については34と同様。時期は高藏10型式と酷似する。

36. 坯身 短く外上方に伸びる受部に内傾する立ち上がりを持つ。34と同様の時期と考える。

37. 坯身 水平に伸びる受部に、内傾する立ち上がりを持つ。34と同様の時期と考える。

38. 壺 底部から胴部にかけての残存である。胴部中位で最大径を測り、その上部に2条の凹線を巡らす。底部は回転ヘラ切り後未調整である。

第9層出土遺物 〔須恵器〕(第50図 図版28)

39. 坯身 受部は短く水平に伸び、端部は尖り気味に丸く、立ち上がりは短く直立気味の小片である。内面の口縁下部に沈線状の線が1条巡る。

40. 坯身 扁平な底部より短く水平に伸びる受部に、内傾して直立気味に立ち上がる。高藏10形式に比定される。

41. 瓢 脚付碗の脚部と底部である。「ハ」字状に広がる脚部の端部は丸く、底部にヘラ削りが施されている。高蔵109型式に比定される。
42. 高坏 脚部片。長脚の2段透かしの上下間に2条の凹線を巡らし、内面にはしおり痕が見られる。
その他の出土遺物 〔須恵器〕(第50図 図版28)
43. 壺 口縁部片。口縁部は外反し、端部付近で凹面をなす。外面に平行叩き、内面に同心円文がみられ。高蔵209型式に比定される。
44. 壺 刷部片。扁球形の体部中位で最大径を測り、上部に幅広の櫛歯状工具による右上がりの刺突列点文を施し、その上部に1条、下部に2条の凹線が巡る。
45. 壺 高台付き。「ハ」字状に開き、内端部が接し、端面はやや凹む。梅43形式、6世紀後半の特徴を示す。

第5層出土遺物 〔弥生土器〕(第51図)

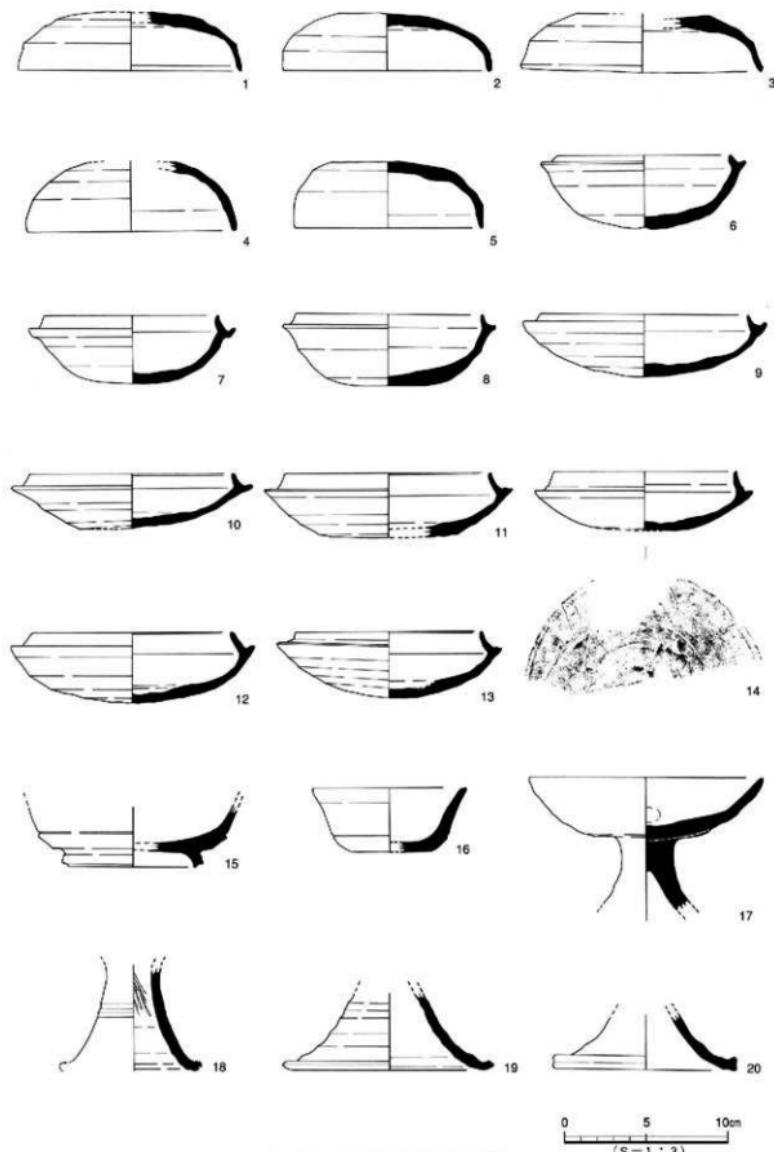
47. 壺 口縁部片。短く外反し、口縁部の器壁を厚くし端部は丸く仕上げる。
48. 壺 47と同様。
49. 壺 くびれの上げ底を呈する。
50. 壺 直立気味に僅かに外反する口縁部片である。器壁の厚い口縁部の端面は、上方を向き丸味を持ち、刻み目を施す。
51. 壺 平底の厚みのある底部片。
52. 壺 平底の底部片。
53. 壺 平底の底部片。
54. 高坏 柱部で摩滅が著しい。
55. 高坏 柱部で摩滅が著しい。
56. 高坏 柱部で摩滅が著しい。

第6層出土遺物 〔弥生土器〕(第51図 図版28)

57. 壺 「く」字状に折れ曲がる口縁部は、上方に僅かに突出する。
58. 壺 大きくくびれる上げ底の底部片。外面にヘラ磨きとナデ、内面にナデ調整が施されている。
59. 壺 底部片。上げ底の大型品である。
60. 壺 平底の底部片である。

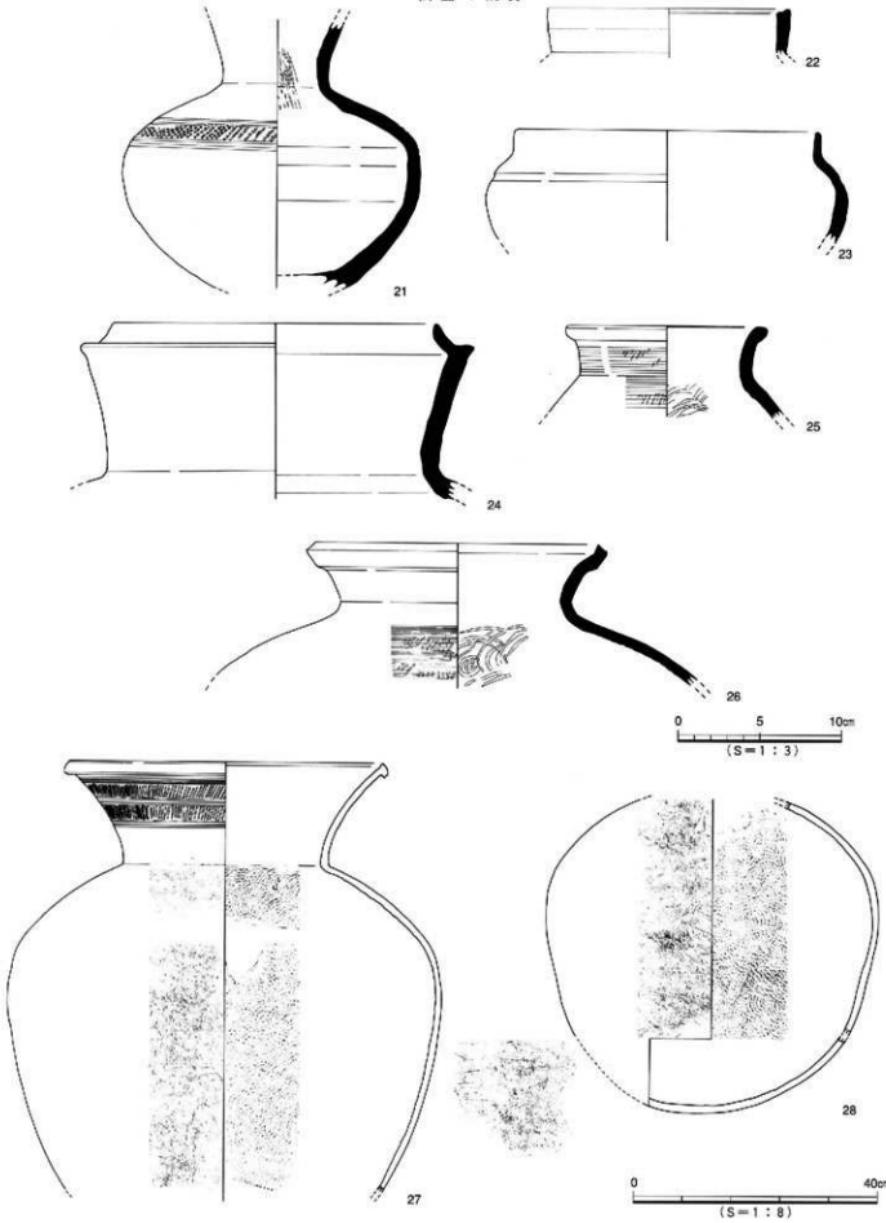
第9層出土遺物 〔弥生土器〕(第51図 図版28)

61. 壺 底部片。くびれのある上げ底である。
62. 壺 平底の底部片である。
63. 壺 平底の底部片である。
64. 壺 平底の底部片である。
65. 壺 僅かに上げ底の底部片である。
66. 壺 平底の底部片である。
67. 壺 平底の底部片である。

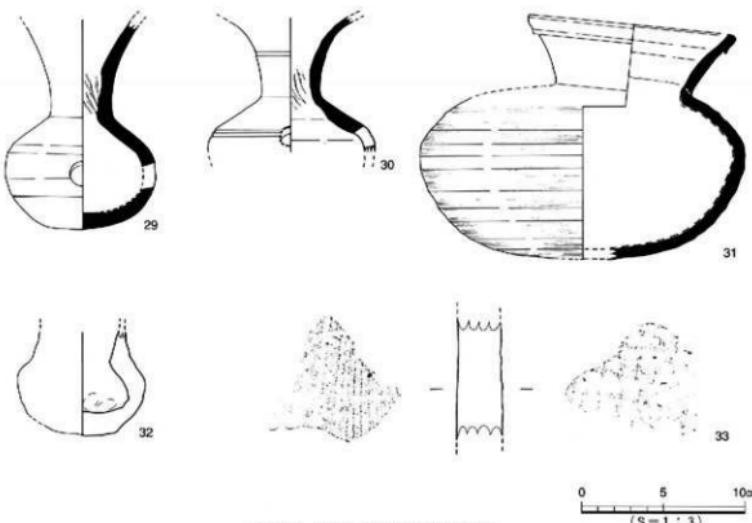


第49図 第5層①出土遺物実測図

調査の概要

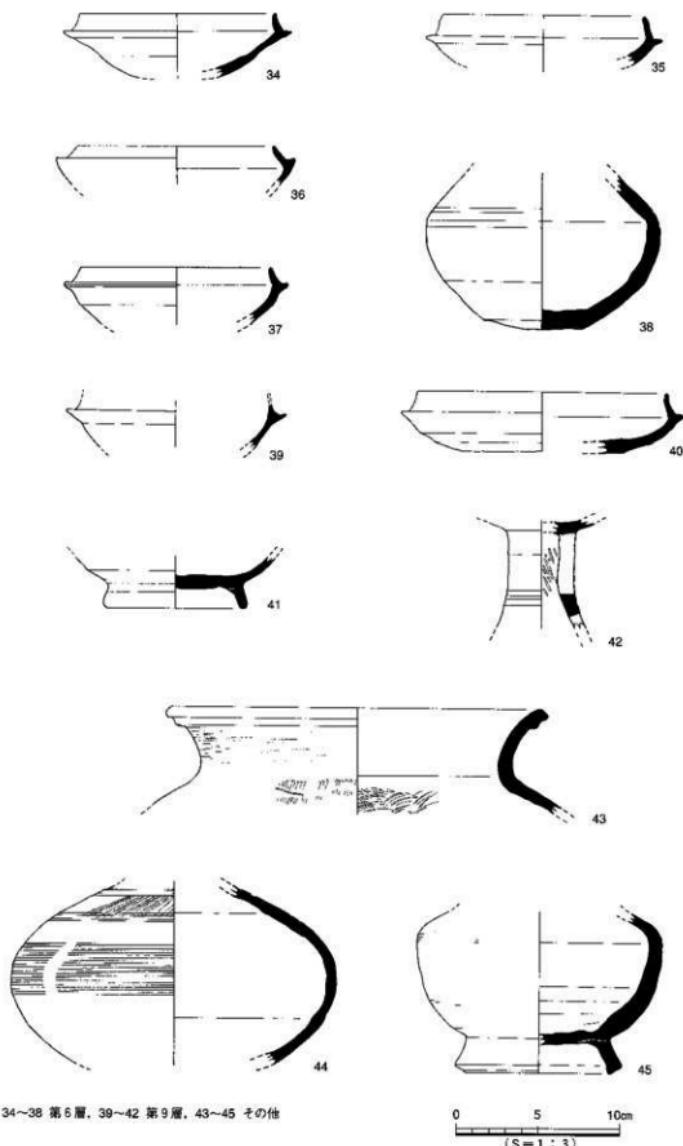


第50図 第5層②出土遺物実測図



第51図 第5層③出土遺物実測図

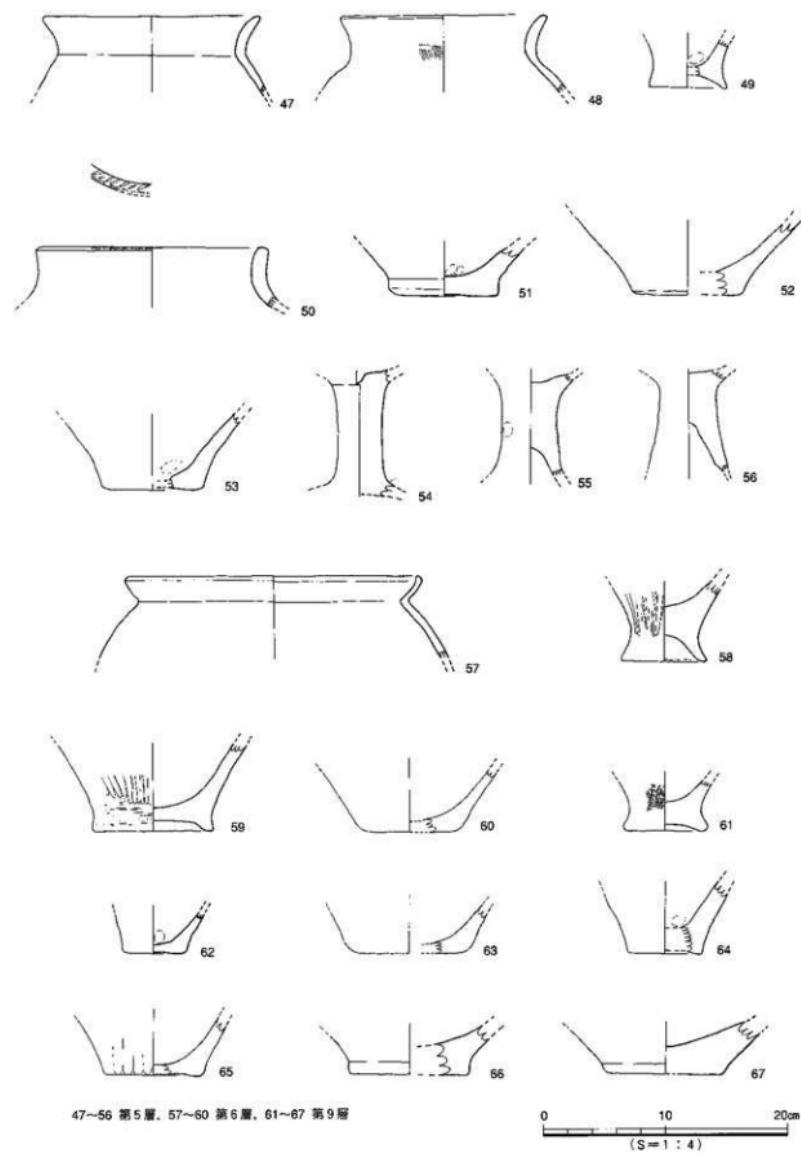
調査の概要



34~38 第6層、39~42 第9層、43~45 その他

0 5 10cm
(S = 1 : 3)

第52図 第6・9層・その他出土遺物実測図



第53図 第5・6・9層出土遺物実測図

4. 小 結

本調査では、弥生時代から古代にかけての須恵器を中心とした遺物と遺構を確認した。

本遺跡は、来住台地に広がる米住廃寺遺跡群の西約300mの距離にあり、これまでの調査で古墳時代、古代を中心とした重要な遺跡の広がる地域である。今回検出された溝状遺構（SD 1）は、1988年に調査された米住町遺跡1次調査で検出された西流する2本（幅2mと3m以上）の溝との関連が深いものと考えられる。また、近年調査された本調査区の南に隣接する来住町遺跡5次調査からは、7世紀半ば頃と推定される掘立柱建物跡が検出され、附随する施設として溝・土坑等も確認されている。特に、5次調査から出土した須恵器壊身・壊蓋・甕等は、本調査出土遺物とはほぼ同型式を保っている。1次調査地内の東端に位置し北流するSD 3・4は、本調査の結果からして本調査のSD 1と合流し北方或いは北西方向へと流れると推測される。

本調査で出土した須恵器は、7世紀を中心とした器種が主流を成し、新しいもので8世紀中期、古式のもので6世紀前半となっている。SD 1内の遺物堆積状況から、この溝は7世紀中頃から後期にかけて利用されたものと考えられる。ただ、本調査区が小面積であるために、SD 1の全貌を見ることが不可能であり、溝の性格を自然流路にするのか、人為的に掘られた水路にするのか、詳細は不明である。しかしながら、5次調査により確認された居住空間の存在、またSD 1内からの須恵器及びその検出状態から、自然流路とは考えがたく、南方20mに広がる住居址に伴う水路と考えておきたい。

【文献】

- | | | |
|------------|------|--|
| 西尾 幸則 | 1986 | 「北久米淨薙寺遺跡」『愛媛県史 資料編』愛媛県史編纂委員会 |
| 森 光晴ほか | | 『松山市史料集 第2巻』松山市史編纂委員会 |
| 森 光晴ほか | 1986 | 『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編纂委員会 |
| 小笠原好彦 | 1979 | 『米住廃寺』松山市教育委員会 |
| 西尾 幸則・池田 学 | 1979 | 「米住廃寺跡寺域調査」
（『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会） |
| 西尾 幸則・池田 学 | 1991 | 「久米官衙遺跡群」
（『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会） |
| 栗田 茂敏 | 1987 | 「南久米片廻り遺跡」
（『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市教育委員会） |
| 梅木 謙一 | 1989 | 「米住町遺跡（1次）」
（『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市教育委員会） |
| 梅木謙一編 | 1994 | 「米住・久米地区の遺跡Ⅱ」
（『松山市文化財調査報告書44』松山市教育委員会、
財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財埋蔵文化財センター） |
| 橋木 雄一 | 1995 | 「米住町遺跡 5次調査」
（『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』松山市教育委員会、
財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財埋蔵文化財センター） |

表13 第5層出土遺物観察表（須恵器） 土製品

番号	器種	法量(cm)	形・態・施文	調 査 表		色調 (外側) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	坏身	口径(13.7) 残高 3.6	火井部と口縁部を分ける所に強いナデが 行われている。口縁部は尖り気味である。	④回転ヘラケズリ/3 ⑤回転ナデ	同転ナデ	灰色 青色	石・長(1~2) ○		23
2	坏身	口径 12.8 残高 3.5	口縁部は直立気味に施し、施部は丸い。	④直立ヘラケズリ/3 ⑤回転ナデ	⑥ナデ ⑦回転ナデ	暗灰 暗灰	石・長(1~3) ○		23
3	坏身	口径(14.7) 残高 3.4	抜け箇んでいるが、口縁部は外反気味に 施し、施部は尖り気味である。	④直立ヘラケズリ/3 ⑤回転ナデ	回転ナデ	暗灰 灰色	石・長(1~2) ○		
4	坏身	口径(12.7) 残高 4.2	丸みをもつ天井部。 口縁部は丸みをもつ。	⑧ヘラケズリ洗ナデ ⑨回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 明灰色	素(長) ○		
5	坏身	口径 10.5 残高 4.1	火井部は水平気味で口縁部は、やや開き 気味に施し、施部は丸い。	⑩ヘラケズリ/2/3 ⑪回転ナデ	同転ナデ	暗灰色 青灰色	長(1~2) ○		23
6	坏身	口径(10.6) 残高 4.5	強く外方に伸びる受部に、内傾する尖 り気味の立ち上がりを持つ。	⑫回転ナデ ⑬回転ヘラケズリ/3	回転ナデ	黒灰色 暗灰色	青(石・長) ○		23
7	坏身	口径 10.7 残高 4.2	受部下部に強いナデが行われている。 立ち上がりは内傾し斜り。	⑭回転ナデ ⑮回転ヘラケズリ/3	回転ナデ	灰白 灰白	趙枝(長) ○		23
8	坏身	口径(11.5) 残高 4.4	強く水平に伸びる受部と立ち上がり。	⑯回転ナデ ⑰直立ヘラケズリ/3	回転ナデ	灰色 灰白	石・長(1~2) ○		23
9	坏身	口径(12.8) 残高 3.8	扁平な底部に強く下方に伸びる受部。 立ち上がりは内傾し尖部は丸い。	⑱回転ナデ ⑲回転ヘラケズリ/3	回転ナデ	暗紫灰色 明灰色	素 ○		
10	坏身	口径 12.2 残高 3.3	平底底の底部、強く内傾する。 立ち上がりは水平な受部。	⑳回転ナデ ㉑回転ヘラケズリ/3	同転ナデ	灰色 灰色	長(1~2) ○		23
11	坏身	口径(12.5) 残高 3.9	口平な底部、強く水平に伸びる受部。 立ち上がりは内傾する。	㉒回転ナデ ㉓回転ヘラケズリ/3	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1~2) ○		
12	坏身	口径(12.0) 残高 4.3	受部は外方に強く伸び、施部は丸い。 立ち上がりは内傾し施部は丸い。	㉔回転ナデ ㉕回転ヘラケズリ/2	回転ナデ	青灰色 青灰色	素(1~2) ○		
13	坏身	口径 11.3 残高 4.1	受部は水平に強く伸び、施部は尖り気味 に丸い。立ち上がりは内傾する。	㉖回転ナデ ㉗回転ヘラケズリ/3	㉘回転ナデ ㉙ナデ	青灰色 青灰色	素(長) ○		23
14	坏身	口径 11.0 残高 3.6	扁平な底部に強く水平に伸びる受部。 立ち上がりは内傾する。内傾部は尖り気味である。	㉚回転ナデ ㉛回転ヘラケズリ/3	㉜回転ナデ ㉝ナデ	灰色 灰色	長(1) ○		23
15	坏身	口径(7.5) 残高 3.8	高台がハの字形に付き、端面が凹み、内 窓部が壊れる。	㉞回転ナデ	同転ナデ	灰色 灰色	趙枝 ○		24
16	坏身	口径(9.5) 残高 3.9	平底の施部より外反気味に立ち上がり11 経削部は尖り気味に丸い。	㉟回転ナデ ㉟ナデ	同転ナデ	暗紫色 暗青灰色	長(1) ○		24
17	坏身	口径 14.6 残高 8.1	外縁は外傾し、二経削部は丸い。不直面 脚部との接合部にしおこした段が見られる。	㉛回転ナデ ㉜ナデ	㉟回転ナデ ㉞ナデ	暗灰色 暗灰色	長(1) ○		24
18	坏身	残高 6.4	ゆるやかに強く内傾、中位に浅い凹部が 2条。	㉚回転ナデ	㉛回転ナデ ㉞ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1~2) ○		
19	高环	底径(12.0) 残高 4.7	ゆるやかに回る舞部片、舞部面は凹部を なす。	㉜回転ナデ	㉛回転ナデ	青灰 明青灰	石・長(1~2) ○		
20	高环	底径(11.2) 残高 3.2	舞部は外反し、施部は段をもつ。	㉟回転ナデ	㉛回転ナデ	明紫灰 古灰	長(1) ○		

遺物観察表

第5層出土遺物観察表（須恵器） 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	構		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
21	盃	残高 16.3	漏斗形の体部に窓口部より外縁しながら開く口縁部、胴中段に斜対列点文有り。	回転ナデ	①-④回転ナデ ⑤-⑧回転ナデ ⑨ナデ	赤灰 暗赤灰	長(1~4) ○	—	24
22	鏡面	口径(14.8) 残高 2.8	直立する口縁部片。 口縁端部は内側に斜し段をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 深灰色	粗粒 ○	—	24
23	短頭壺	口径(18.7) 残高 6.7	扁球形は肩部より鋭く直立する口縁部の 端部は丸い。頸部下部に凹部が1条。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	長(1~2) ○	—	21
24	盃	口径 19.8 残高 10.7	受部をもつ窓口。受部は水平に伸び、立ち上がりは内傾する。	①回転ナデ ②タキ	①-⑥回転ナデ ⑦同心円文	暗灰色 暗灰色	長(1~2) ○	—	24
25	盃	口径(12.4) 残高 5.6	焼けひびきの為、径は確かでない。 丸味をもつ口縁部。	①ナデ ②耳き抜ナデ	③回転ナデ ④同心円文	暗灰色 暗灰色	長(1~3) ○	—	24
26	盃	口径(17.4) 残高 8.7	口縁部は外反し、口縁部下部で下方に折 れ曲る。	①-④回転ナデ ⑤平行叩き→カキ	①-⑥回転ナデ ⑦同心円文	灰色 灰色	粗粒(長) ○	—	21
27	盃	口径(51.2) 残高 70.5	外反する口縁部は残部で記述され、下に 張り出し、口縁が歪む。	①-④回転ナデ ⑤平行叩き	①-④回転ナデ ⑤同心円文	灰色 灰色	砂(1~3) ○	—	25
28	甕	残高 52.6	底部にタッキ後にカキ目状空洞を廻し、内記 に同心円タッキ後に始めが行なわれている。	⑥平行叩き ⑦叩き→カキ	同心円形開き後 崩消し	灰白色 青灰白	密 ○	—	26
29	瓶	残高 12.8	球形の体部より上方に開く口縁部、外 面に船の付着が見られる。	⑧回転ナデ ⑨回転ナデ	回転ナデ	灰色 暗灰色	石-長(1~3) ○	自然釉	27
30	瓶	残高 8.3	大きく開く口縁部か。 底部中空に凹線1条。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	自然釉	27
31	平底	口径 12.4 残高 15.0	口縁部は、扁球形の体部に片寄って付かれ、 わざかに外反し溝部は記述され下方に伸びる。	⑩回転ナデ ⑪回転ナデ→カキ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1) ○	—	27
32	壺身	口径 6.4	手捏ね足と思われる。 底部内側に指痕痕跡。	舟底の鳥小印 ナデ	ナデ 指痕痕	にぶい衣飾 にぶい質地	石-長(1~4) ○	—	27
33	平瓦	残 8.0×8.0 二角形	平瓦小片。	格子叩き	布目	灰白 灰白	密 ○	—	27

表14 第6層出土遺物観察表（須恵器） 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	構		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
34	环身	口径(12.2) 残高 3.9	幅く水平に伸びる受部と内側する立ち上 がり、口縁溶部は、丸い気泡に丸い。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色 深灰色	密 ○	—	—
35	环身	口径(12.4) 残高 3.0	幅く水平に伸びる受部の溝部は丸い。 立ち上がりはやや内側し溝部は丸い。	①回転ナデ ②ナデ	回転ナデ	明古灰 明古灰	粗粒 ○	—	—
36	环身	口径(12.2) 残高 2.4	やや上方に幅く伸びる受部と内側する立 ち上がり。	③回転ナデ ④ナデ	回転ナデ	灰白 灰白	長(1~2) ○	—	—
37	环身	口径(11.8) 残高 3.5	幅く水平な受部と内側する細い立ち上 がり。	回転 ⑤ナデ	回転ナデ	青灰 明青灰	粗粒 ○	—	27
38	盃	直径 6.0 残高 9.5	扁球中位で最大径を廻りその上部に2点 の凹線を巡らす。	⑥回転ナデ ⑦回転ヘラケズ ⑧回転ヘラ切り ⑨ナデ	回転ナデ ⑩ナデ	灰色 灰白	粗粒 ○	—	27

表15 第9層出土遺物観察表（須恵器） 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
39	环身	残高 2.9	幅く水平に伸びる腹部の端部は尖り気泡に丸い。	同軸ナゲ	直軸ナゲ	青灰 青灰	粗粒○		
40	环身	口径(15.1) 残高 3.7	幅広な腹部より幅く水平に伸びる腹部に内窓と底立耳跡に立ち上がる立ち上がり。	④同軸ナゲ ⑤同軸ヘラケズリ	同軸ナゲ	青灰 青灰	粗粒(長)○		
41	環	底径(8.6) 残高 3.2	八字底に広がる底部。腹部は太い。	同軸ナゲ ④同軸ヘラケズリ	同軸ナゲ ナゲ	灰色 灰色	青(石・長)○	28	
42	高环	残高 6.7	長径2段造しの脚部。下下連し間に2条の凹溝がある。	ミコナゲ	ナゲ しばり底	灰灰色 灰灰色	青(長)○	28	

表16 その他(試掘)出土遺物観察表(須恵器) 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
43	蓋	口径(23.4) 残高 6.4	口縁部は外反して立ち上がり腹部付近で内窓をなす。	①同軸ナゲ ②口縁→ナゲ	③同軸ナゲ ④同心円文	灰色 暗灰色	石・長(1~3)○	28	
44	蓋	残高 11.0	腹上部に右上がりの羽目文を施し、その上部に1条、下部に2条の凹溝をなす。	⑤羽目文羽目文 ⑥口縁→ナゲ	ヨコナゲ ヨコナゲ	明青灰 明赤灰	青○	28	
45	蓋	底径(9.0) 残高 9.8	高台付、「ハ」字状に開き、内底部が接し縫合はやや凹む。	⑦ハタガキ(1.0) ⑧ヨコナゲ ⑨ヨコナゲ	ヨコナゲ ナゲ	加灰白色 暗灰茶色	青(1~2)○	28	

表17 第5層出土遺物観察表(弥生土器) 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
47	更	口径(17.9) 残高 6.6	冠く外反する口縁部の腹端は丸い。	縫滅の為不明	縫滅の為不明	淡青灰 淡青灰	石・長(1)○		
48	环身	口径(16.6) 残高 6.3	外反する程の口縁部、腹端は丸い。	ハケ	縫滅の為不明	青 淡赤橙	長(1~3)○		
49	蓋	底径(6.4) 残高 4.1	くびれの上げ底。	ナゲ	ナゲ	明灰灰 明赤	石・長(1~3)○		
50	蓋	口径(19.0) 残高 5.0	直立気味にわざかに外反する口縁部。 口縁部に縮み有り。	⑩口縁による縮み 縫滅の為不明	縫滅の為不明	にぶり粗 灰白	石・長(1~3)○		
51	蓋	底径 8.5 残高 4.0	厚みのある半底をもつ。	ナゲ	縫滅の為不明	にぶり粗 灰白	石・長(1~4)○		
52	沿	底径(9.0) 残高 6.3	平底の底端部。	縫滅の為不明	縫滅の為小切	灰褐色 灰褐色	ぞ・長(1~3)○		
53	蓋	底径(8.3) 残高 6.3	口底の底端。	縫滅の為不明	縫滅の為不明	灰白 灰白	石・長(1~4)○		
54	高环	残高 10.3	細い柱部。	縫滅の為不明	縫滅の為不明	後 捲	粗粒(長)○		
55	高环	残高 8.4	縫合せ技法か。	縫滅の為不明	縫滅の為小切	粗粒	粗粒(石・長)○		

遺物観察表

第5層出土遺物観察表（弥生土器） 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外側) (内面)	胎 土 焼 成	備考	団版
				外 面	内 面				
56	高杯	残高 8.4	縦み合せ技法か。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	灰 灰白	長(1~2) ○		

表18 第6層出土遺物観察表（弥生土器） 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外側) (内面)	胎 土 焼 成	備考	団版
				外 面	内 面				
57	甕	口径(24.4) 残高 6.9	く字状の口部の口沿部は、上方に小さく突出する。	コナデ	磨滅の為不明 淡青緑	淡青緑 淡青緑	石・長(1~3) ○		
58	甕	底径 7.0 残高 6.7	大きなくびれる上げ底。	⑤ハラミガキ ⑥コナデ	ナデ	淡青緑 淡青緑	石・長(1~6) ○		28
59	甕	底径 (9.8) 残高 7.1	上げ底の底盤で大想思。	⑤ハラミガキ ⑥コナデ	ナデ	にぶい青緑 灰白	石・長(1~3) ○		
60	甕	底径 (7.6) 残高 5.1	平底の底盤。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	灰白 灰白	石・長(1~3) ○		

表19 第9層出土遺物観察表（弥生土器） 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外側) (内面)	胎 土 焼 成	備考	団版
				外 面	内 面				
61	甕	底径 6.1 残高 4.2	くびれの上げ底。	⑤ナタ(1~2回) ⑥ナデ	ナデ	にぶい黒 にぶい黒	石・長(1~5) ○		
62	甕	底径 5.2 残高 3.4	平底。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	にぶい黒 にぶい黒	石・長(1~5)		
63	甕	底径 (8.4) 残高 4.0	平底。器身は薄い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	青灰 明褐色	石・長(1~3) ○		
64	甕	底径 (6.0) 残高 6.0	平底の底盤部。器身は厚い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	赤褐 灰白	石・長(1~3) ○		
65	甕	底径 (7.9) 残高 4.9	わずかに上げ底。	ナデ	磨滅の為不明	にぶい黒 灰白	石・長(1~5) ○		
66	甕	底径 (9.4) 残高 4.1	器蓋の薄い平底の底盤片。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	明褐色 明褐色	石・長(1~7) ○		28
67	甕	底径 (9.4) 残高 4.3	平底。器蓋は薄い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	灰白 明褐色	石・長(1~8) ○		

第6章 調査の成果と課題

本報告書では、来住・久米地区内における5遺跡の調査報告を行った。その遺跡を時代毎に区分すると、西から近世の遺物と中世の鍛冶工房等を検出した北久米町屋敷遺跡、古代の墨書き上器を出土した南久米町遺跡1・2・3次調査地、古墳時代の須恵器を多量に出土した来住町遺跡4次調査地となる。当該包蔵地域における調査例は、近年になって次第に増加傾向にあるが、まだまだ地域の特性を把握するまでは至っていない。それ故今回の報告は、堀越川と小野川によって形成される扇状地に隣接する北部地区の実態と特性を具体的に現す貴重な遺跡として位置付けられるものである。

以下、各時代ごとに注目される資料を取り上げることとする。

古墳時代

来住町遺跡4次調査によって確認された大溝は、来住庵寺設立時期の直前、乃至は同時期の6世紀後半から7世紀前半にかけてのものと思われる。本遺跡は、来住台地に広がる来住庵寺遺跡群・久米高畠遺跡群の中にあって東部に位置する。1988年に調査された来住町遺跡1次調査で検出された2条の溝と1994年に調査した本調査区の南に隣接する来住町遺跡5次調査から検出された3条の溝及び1条の自然流路は、同時期の溝であり、同じ溝の可能性が高いものと考えられる。その中から出土した須恵器・土師器等に伴う生活居住空間として、5次調査によって確認された掘立柱建物址がある。建物址は、数棟であるが今回の調査で出土した多量の遺物から、南方或いは南北方向に広がる集落が想定される。また、5次調査において検出された足跡群によって、本遺跡の東部に水田の広がることも推測でき、官衙関連遺構の東部域の新たな課題として、今後来住庵寺以東の生産構造の検討が必要と思われる。

古代

この地域においては、南久米町遺跡から検出された掘立建物群に代表される。来住台地上に広がる久米官衙遺跡群の北方に隣接し、これまでに調査例の数少ない地域であった。検出された掘立柱建物群は、2間×3間の建物を基本構造として、ほぼ東西並行に建てられており、規則性をもった建物群である。特筆すべき事柄として、久米高畠遺跡群から確認されている官衙遺跡との関連性を示す墨書き土器「時」の発見がある。7~8世紀にかけて隆盛した官衙施設が、8~9世紀には堀越川を越えてこの地域に移動していることを物語っている。この一集団の建物群の施設が、時刻や時代を司っていた役所であるのかはともかくとして、官衙関連の遺構を中心とする久米高畠遺跡群の隆盛のち、堀越川北岸地域にも及んでいることを確認することができたことは、今後の当該地域の調査にとって大変貴重な資料として捉えることができよう。

また、南久米町遺跡の約100m東方に位置する南久米町遺跡2次調査地からも同時期の建物と考えられる梁行2間の掘立建物址が確認されている。桁行は調査区外へ延びているため確認されなかつたが、その東方に同様な建物群のあることは想定される。

ただ、2次調査の建物については、時代を特定する詳細な資料に乏しく、現状では9~13世紀の建

物としか判断できていない。東部に延びる遺跡の調査を待ちたい。

中・近世

本調査地域において、当該期の遺構は北久米町屋敷遺跡にのみ確認された。

それによると、中世では掘立柱建物址、土坑、溝、ピット状遺構等を確認し、久米北西城にこれまで検出例の少ない中世集落の存在を知ることができた。確認した住居址は、わずかに1棟であったが、調査区内に遺存する無数の柱穴からは集落の痕跡をみることができ、調査区以南の地域において関連する遺構が試掘調査等の結果から確認されておらず、調査地より北西部へ延びているものと思われる。

特に、この時期の遺構として注目されるのが、多数の鉄滓と広範囲に広がる焼土を検出し、床面には粘土を貼りつめた痕跡を確認することができた鍛冶工房と考えられる土坑（SK4）である。土坑上面からは、龍泉窯系青磁碗を出土しており、12世紀代に輸入された中国陶磁器と考えられる。ただ、鉄製品や鉄床石、砥石等の鍛冶工房に使われた遺物は検出されていない。これは、近現代の削平が著しく、遺構の遺存状況もあまり良好ではなかったためであり、遺構の詳細を把握することはできなかった。今後、周辺地域の調査が進めば、鍛冶関連遺構を含めた中世の当地域における生産関連遺構の広がりも具体的に明確なものとなるであろう。

近世においては、調査区南端に河原石や石臼の割石等をL字状に敷き詰めた住居址1棟を確認している。この地域での当該期の遺構は、皆無といってよく、この住居址が初例と思われる。この地区的伝承によれば、調査地の東10mの位置に明治時代初期まで涌泉があり、その泉の西には江戸時代のころ泉の護人が住み、代々泉の管理をしていたそうである。涌泉は、明治初期に渴れてしまったために、その跡地には水神を祭る小さな社が建てられている。当地域での数少ない近世遺構の確認は、松山藩政との係わりもあり、当地区に限らず市内東部地区を対象とした慎重なる調査が必要と思われる。

結 び

来住台地における集落の展開は、今回の調査で確認された古墳時代以降において見る限り、堀越川を越え北方、現在の松山市中心部へと進んでいる。殊に、米住台地上で隆盛を極めた「米住庵寺」・「久米評」の時代は、8世紀には終末をむかえ、古代官衙の中心は次第に北へと移動していったのではないかと推測される。7世紀の官衙遺構の発見が「久米評」の発見から始まったように、これまであまり注目されていなかった9世紀以降の古代役所の探索が、墨書き器「時」の出現によって来住・久米地区に新たな課題をもたらしてくれたのである。

堀越川以北に広がる久米平野に、公家社会で榮華を極めた平安朝の痕跡が、今後の調査で解明されることを期待したい。

[文献]

- | | |
|--------|--|
| 栗田 広敏 | 1987「南久米片廻り遺跡」
〔『松山市埋蔵文化財調査年報1』 松山市教育委員会〕 |
| 森 光晴ほか | 1986『愛媛県史 資料編 考古』 愛媛県史編纂委員会 |
| 宮本 一夫 | 1990『樹味／鷹子遺跡の調査』 愛媛大学埋蔵文化財調査室 |

- 西尾 幸則・池田 学 1991「久米官衙遺跡群」
(『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会)
- 小笠原好彦 1979「来住庵寺」 松山市教育委員会
- 梅木 謙一 1989「来住町遺跡（1次）」
(『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市教育委員会)
- 橋本 雄一 1995「来住町遺跡 5次調査地」
(『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅴ』松山市教育委員会、
(財)松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財探査文化財センター)
- 栗田 茂敏はか 1996「小野川流域の遺跡」
(松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財團
埋蔵文化財埋蔵文化財センター)

写 真 図 版

写 真 図 版 例 言

1. 遺構の撮影は、大西朋子と調査担当者が行い、高所作業車を使用した。

2. 遺物の撮影は、大西が行った。

使用機材：

カ メ ラ トヨ／ビューア45G

レ ン ズ ジンマー S240mm F5.6他

ス ト ロ ボ コメット／CA32-2灯・CB2400-2灯（バンク使用）

ス ト ロ ボ トヨ／無影撮影台・ウエイトスタンド101

フ イ ル ム 白黒 プラスXパン4×5 カラー EPP4×5

3. 遺構写真の焼き付け及び遺物写真のフィルム現像・焼き付けは、大西が行った。

(白黒に限る)

使用機材：

引 伸 機 ラッキー-450MD

ラッキー-90MS

レ ン ズ エル・ニッコール135mm F5.6A

エル・ニッコール50mm F2.8A

印 画 紙 イルフォードマルチグレードIVRC

4. 製版 150線

印 刷 オフセット印刷

用紙 マットカラー110kg

【参考】『埋文写真研究』Vol.1~8

(大西朋子)



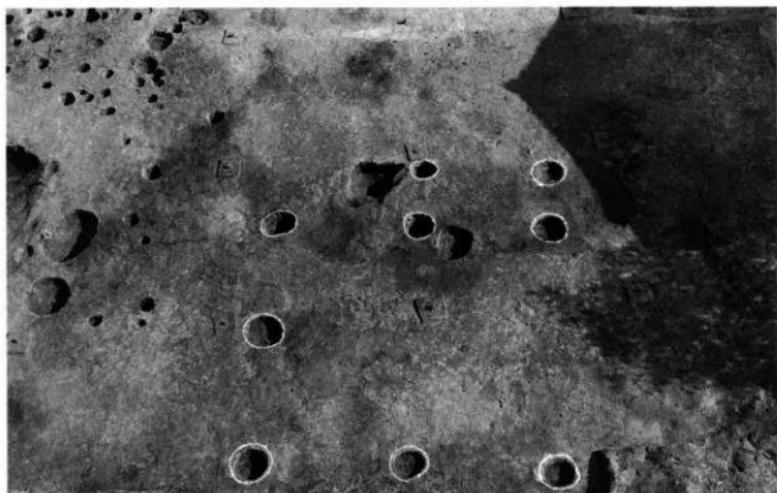
1. 調査地全景（南東より）



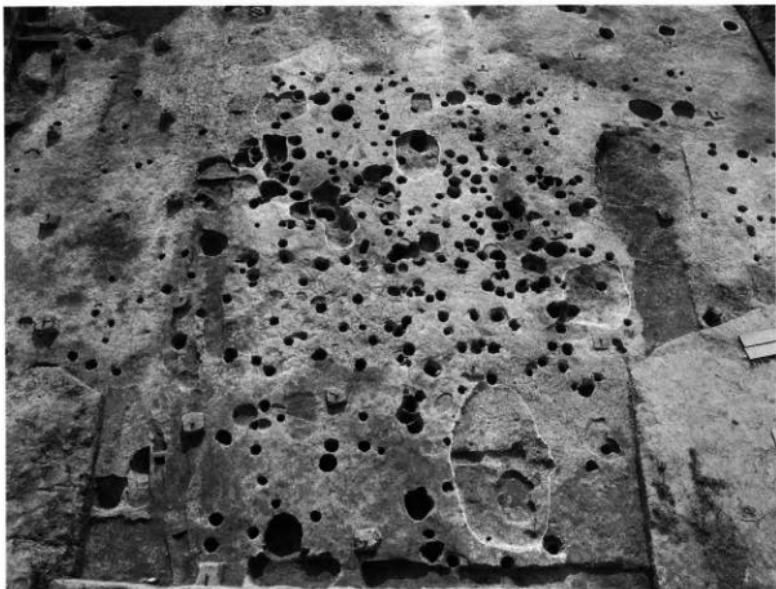
2. 遺構検出状況（南より）



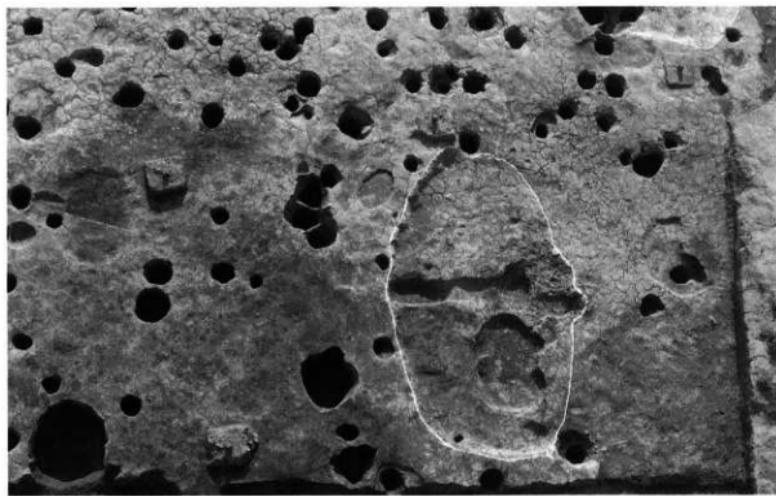
1. 造構完掘状況（北より）



2. 据立1完掘状況（北より）

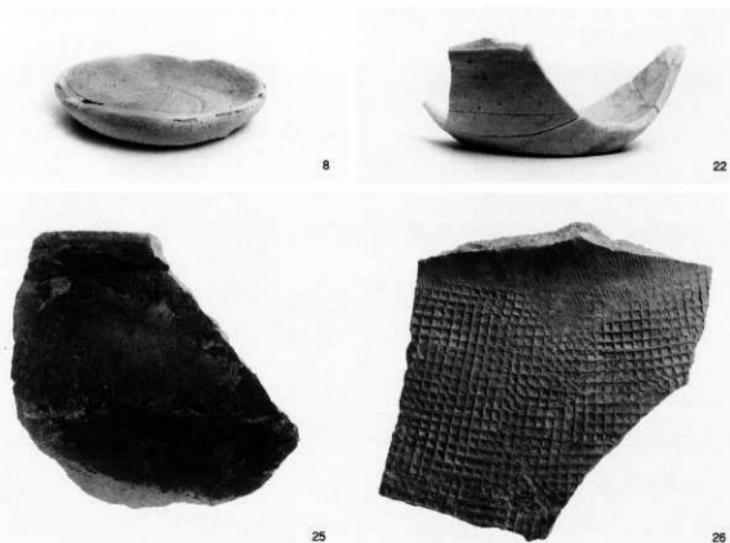
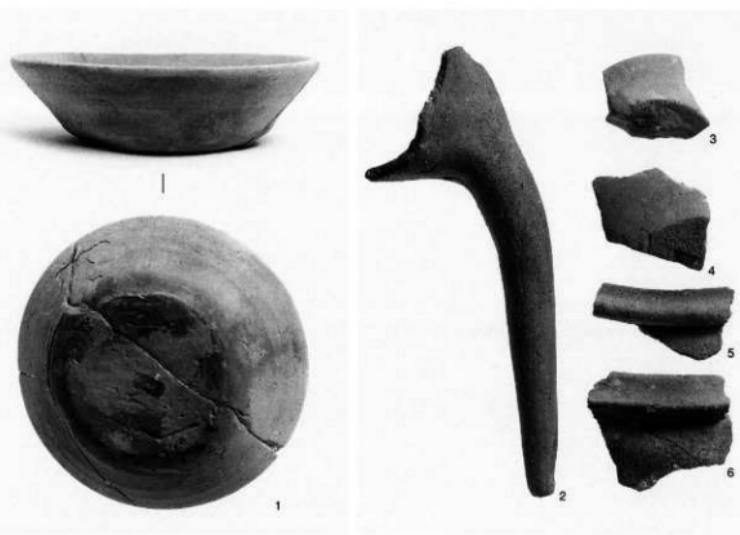


1. 淹構完掘状況（東より）

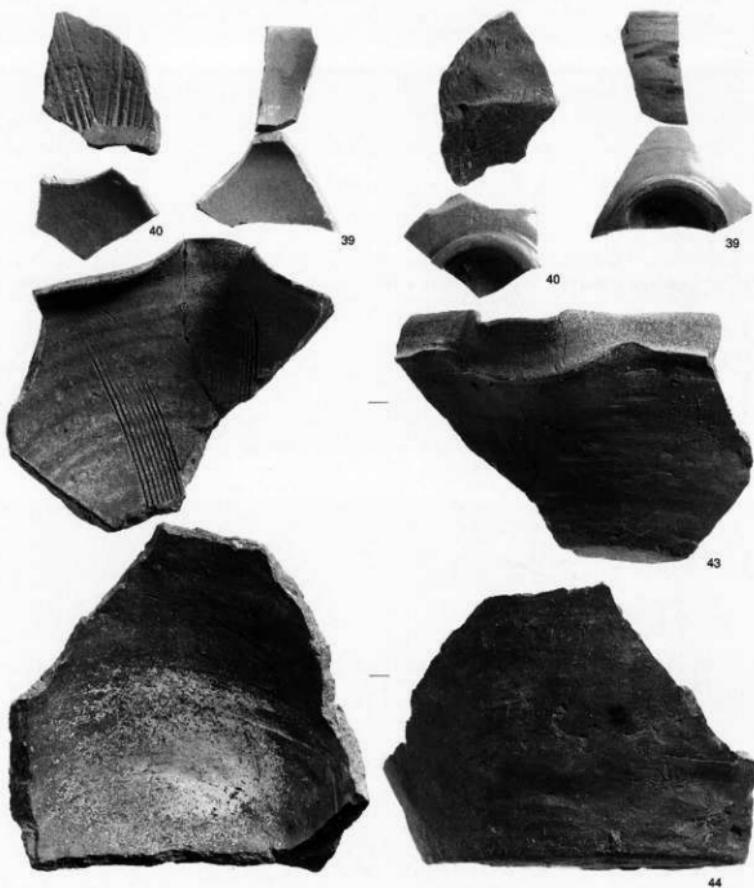


2. SK 4 完掘状況（東より）

圖版
四



1. 柱穴内出土遺物



1. 出土遺物

南久米町遺跡

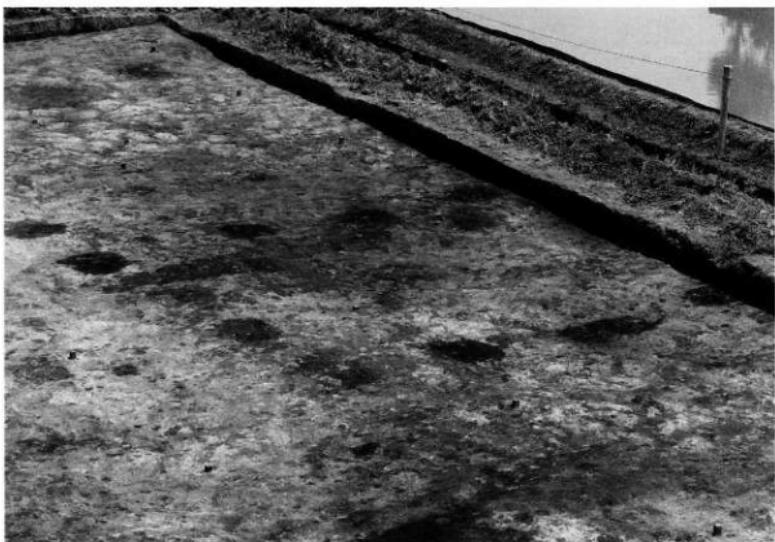
図版
六



1. 調査地遠景（北東より・右下調査現場仮事務所）



2. 造構検出状況（南より）



1. 挖立 1 棟出土状況（南西より）



2. 挖立 1 棟出土状況（西より）

図版
八



1. 遺構完掘状況（南より）

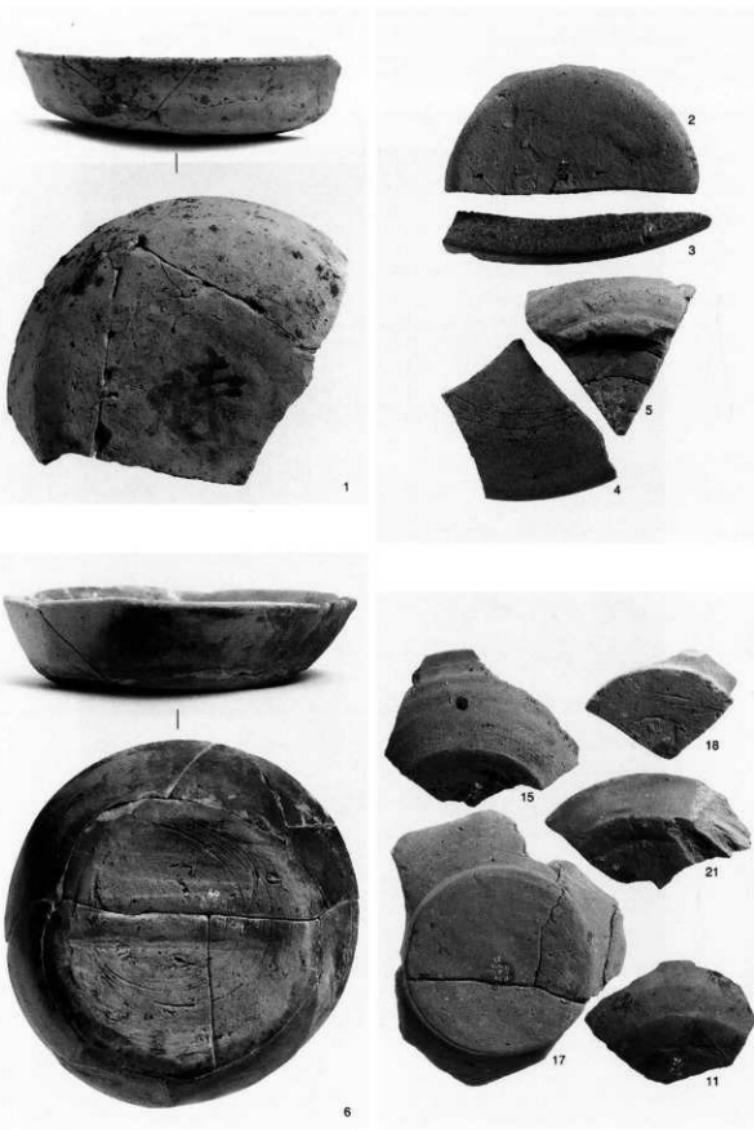


2. 挖立1完掘状況（南西より）

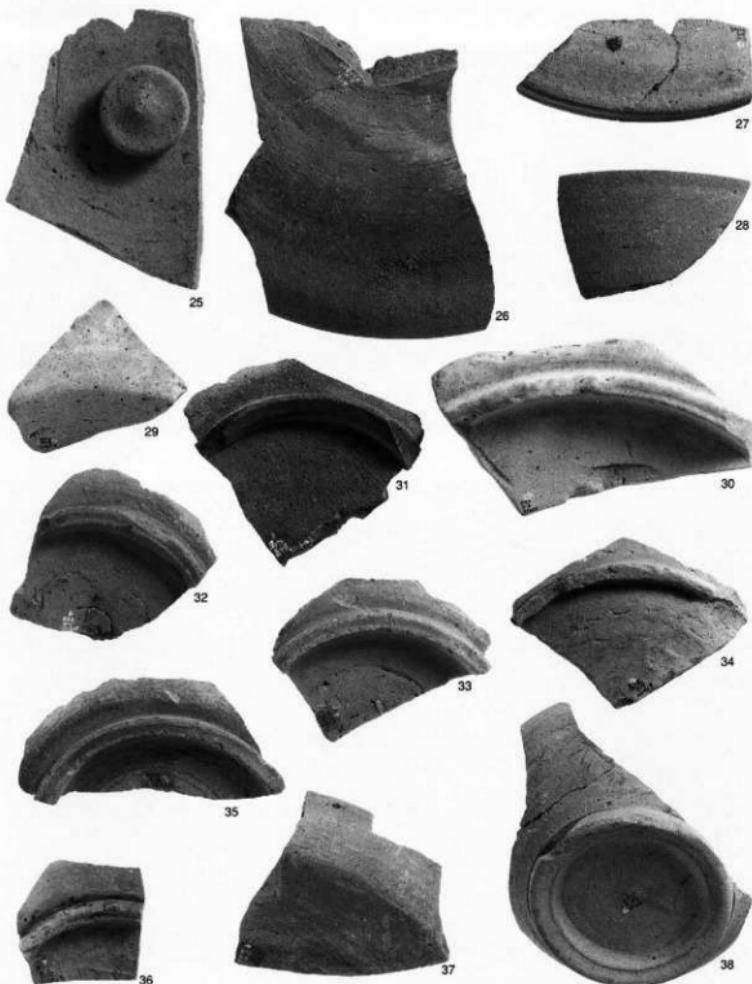


1. 遺構完掘状況（南より）

図版
十



1. 出土遺物①



1. 出土遺物②

南久米町遺跡 2次調査地

図版

十二



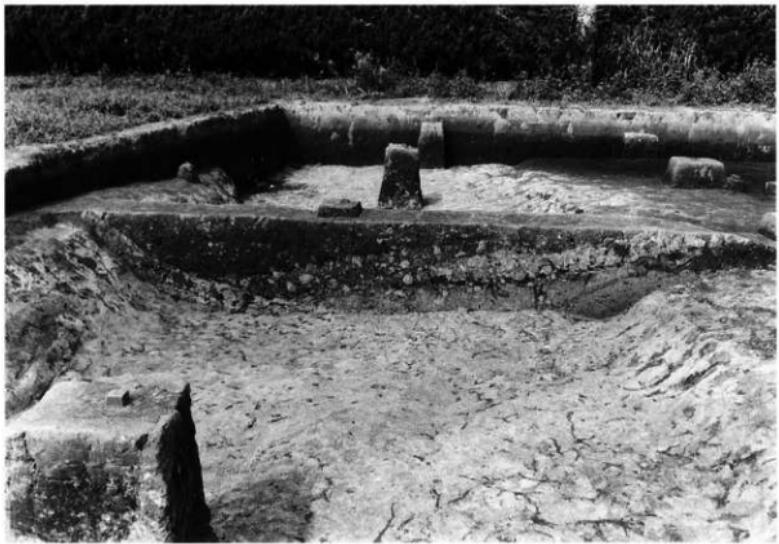
1. 調査地遠景（南西より）



2. 2次調査遺構検出状況（南東より）



1. SD 1検出状況（東より）



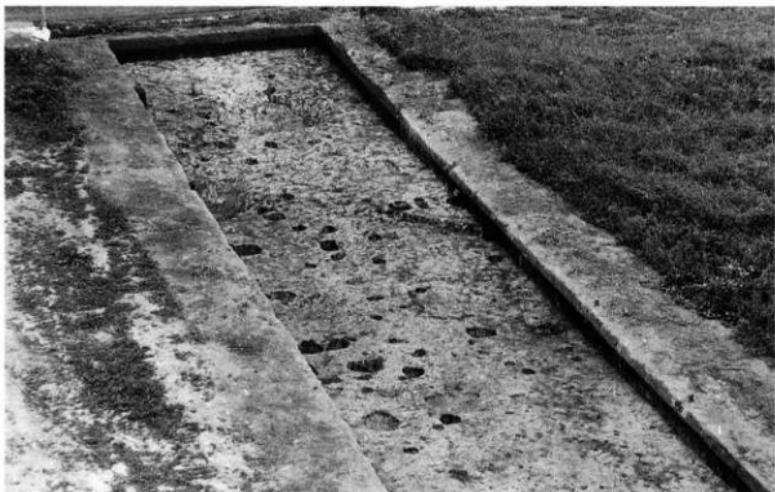
2. SD 1土層断面（東より）

南久米町遺跡 2次調査地

図版
十四



1. 遺構完掘状況（北東より）



2. 遺構検出状況（北より）



1. 出土遺物①

南久米町遺跡 2次調査地

図版
十六



19



22



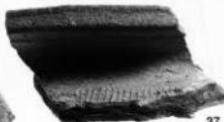
35



26



36



37



30



58

1. 出土遺物②



1. 3次調査遺構検出状況（東より）



2. 遺構完掘状況（東より）



1. 遺構完掘状況（北東より）



2. 調査区南壁土層断面（北東より）



1. 出土遺物

来住町遺跡 4 次調査地



1. 造構検出作業風景（西より）

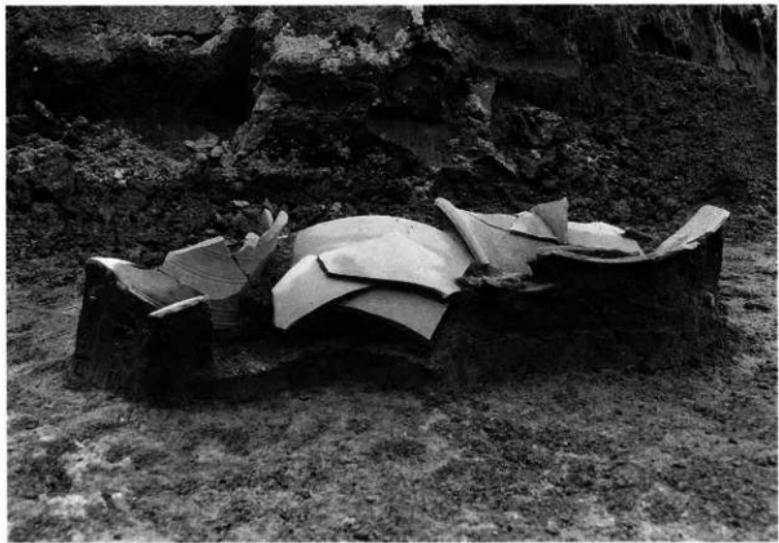


2. 遺物出土状況（東より）

来住町遺跡 4 次調査地



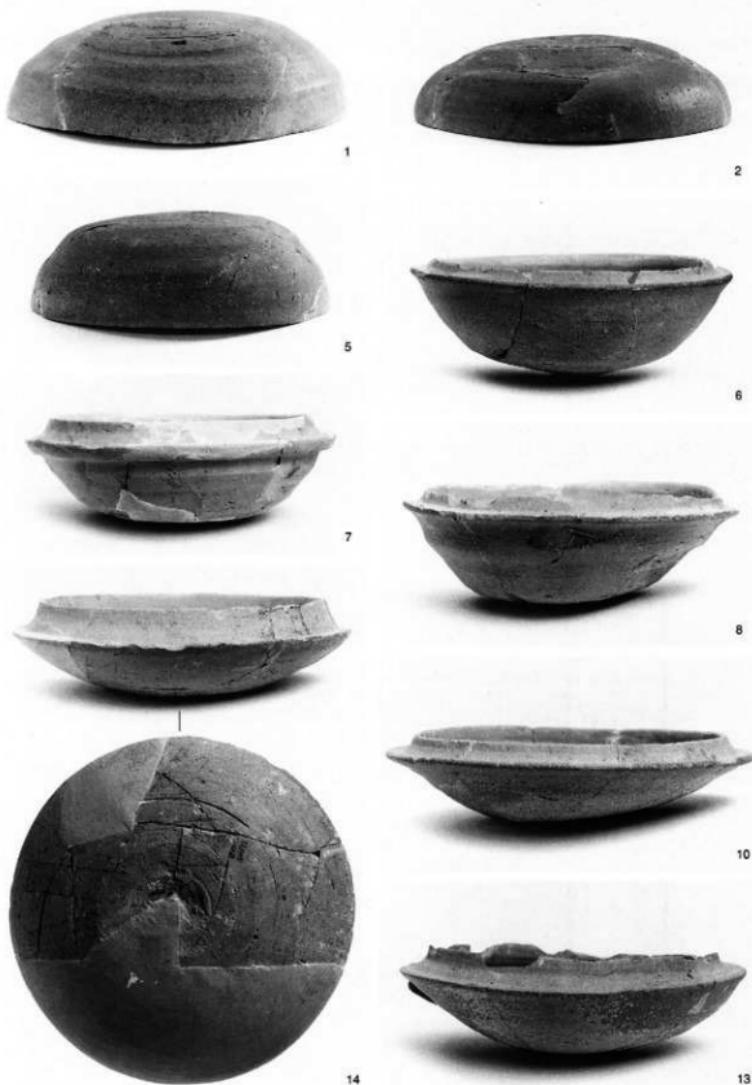
1. 須恵器出土状況（東より）



2. 大甕出土状況（東より）



1. 遺構完掘状況（西より）



1. 出土遺物①

圖版

二四



15

16



17



21



22



23



24



25



26



27

1. 出土遺物③



26

1. 出土遺物④



1. 出土遺物⑤

図版

二八



41



42



43



44



45



58

1. 出土遺物⑤

報告書抄録

ふりがな	きし・くめらく いせき							
書名	来住・久米地区の遺跡Ⅲ							
副書名	北久米町屋敷遺跡、南久米町遺跡、南久米町遺跡2・3次調査地、来住町遺跡4次調査地							
巻次								
シリーズ名	松山市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第76集							
編著者名	田城武志・高尾和長							
編集機関	松山市教育委員会・(株)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター							
所在地	市教委:〒790-0003 松山市一番町6丁目6-1 TEL 089-948-6605 埋文:〒791-8032 松山市南薙町乙67-6 TEL 089-923-6363							
発行年月日	西暦 2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
あたぐめまちやし 北久米町屋敷	まつやまし・きたくめまち 松山市北久米町 477番、1・5	38201	226	33°48'44"	132°48'03"	19920310～ 19920530	854	宅地開発
みくめまち 南久米町	まつやまし・みなみくめまち 松山市南久米町 419番10、420番1	38201	233	33°48'44"	132°48'10"	19920528～ 19920820	1,000	宅地開発
あたぐめまちやし 北久米町遺跡2次調査	まつやまし・きたくめまち 松山市南久米町 408-5外	38201	235	33°48'45"	132°48'14"	19920801～ 19920922	288	宅地開発
あたぐめまち 北久米町遺跡2次調査	まつやまし・きたくめまち 松山市南久米町 408-6の一部	38201	242	33°48'45"	132°48'14"	19920924～ 19921030	416	宅地開発
さしまいせよこじょうさ 来住町遺跡4次調査	よつやましきよこじまら 松山市来住町 524-1	38201	232	33°48'24"	132°48'24"	19920415～ 19920430	988	宅地開発
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 造 積		主 な 遺 物	特 記 事 項		
北久米町屋敷	集落	古墳 中世 近世	中世: 据立柱建物、土坑 近世: 住居址、柱穴		須恵器 土師器 瓦器	中近世の生活・生産遺構		
南久米町	集落	古墳 古代 中世	古墳: 潟 古代: 据立柱建物址		墨書き土師器 須恵器	墨書き土器出土 古代官衙関連遺構		
南久米町 2次調査地	集落	古墳 古代 中世	古墳: 潟 古代: 据立柱建物址 中世: 潟		須恵器 土師器 銭貨	古代集落の一部検出		
南久米町 3次調査地	集落	古代 中世	古墳: 潟 中世: 潟		土師器			
来住町 4次調査地	集落	古墳	古墳: 潟		土師器 須恵器	古墳時代の溝より多量 の須恵器出土		

松山市文化財調査報告書 第76集

来住・久米地区の遺跡 Ⅲ

平成12年3月31日 発行

編 集 松山市教育委員会
〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1
TEL (089) 948-6605

発 行 財団法人 松山市生糸学習振興財団
埋蔵文化財センター
〒791-8032 松山市南荘院町乙67番地6
TEL (089) 923-6363

印 刷 原印刷株式会社
〒790-0056 松山市土居田町396-6
TEL (089) 974-8711
